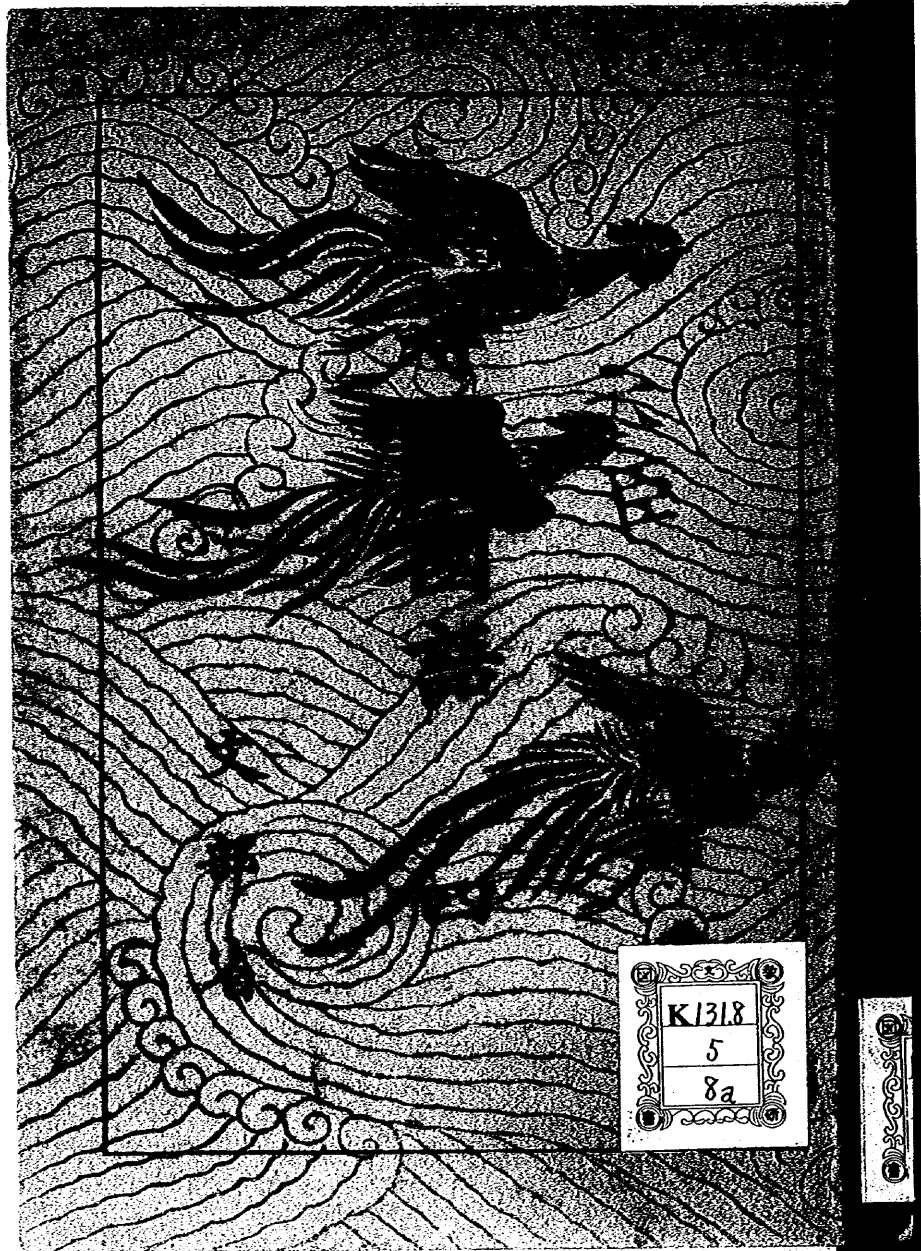




K131.8

5

8a

初等科國語

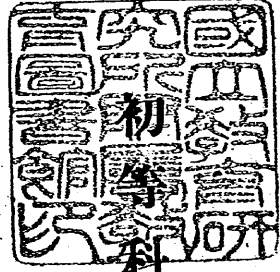
文部省

教師用

四

K1318
5
8a





國語四

文

部

省

教

師

用

文部省圖書刊行部贈

初等科國語四教師用目錄

各 説

一 船は帆船よ	七
二 燕はどこへ行く	一四
三 バナナ	二七
四 大連から	三八
五 観艦式	五〇
六 くりから谷	六〇
七 ひよどり越	六七
八 萬壽姫	七六
九 林の中	八九

十 クライダー「日本號」	九四
十一 大演習	一〇四
十二 小さな傳令使	一二七
十三 川土手	一二八
十四 扇の的	一三六
十五 弓流し	一四五
十六 山のスキー場	一五二
十七 廣瀬中佐	一六〇
十八 大阪	一六八
十九 大砲のできるまで	一八〇
二十 振子時計	一九二

附 録

新出讀替文字一覧	二四四
運筆順序	二五〇
綴り方指導要項	
指導の發展段階	二五三
初等科第四學年	二五四
一 指導要項	二五四
二 指導要項例	二五八

三 參考文題	二六四
話し方指導要項	
指導の發展段階	二七一
初等科第四學年	二七二
指導要項	二七二

各

說



教材の趣旨

一 船は帆船よ

戦國の末から江戸初期に於いて、わが朱印船は盛んに南支南洋の諸地方に往來し貿易をした。「山田長政」や「濱田彌兵衛」はこの時代を代表する國民的豪傑であり英雄である。本教材は、かうした時代に於ける國民の旺盛な海外發展心を懷古的に表現した韻文で、しかもこれを現代に生かして、大東亞の天地に想を馳せしむべきものである。

朱印船は堅牢な大形ひらた船で、櫓をあげ、鐵砲を仕掛け、三桅を設け、その大なるものは長さ三十間幅九間、三百餘人を乗せることができたといふ。もちろん、今日海外に渡航する客船や貨物船に比べれば渺たる帆船に過ぎず、さし當り支那のジャンク船を思はせる底のものであるが、それだけに千里を遠しとせぬ意氣のいつ、そう盛んであつたこと

が考へ合はされる。年々この船によつて南洋諸國に渡航するものが絶えず、呂宋暹羅の如きところには數百戸の日本町ができて、呂宋には三千餘人、暹羅には八百餘人のわが國人が住んでゐたといふ。

本教材は、もちろんこれだけを離して與へれば、この時期の兒童には理會しがたいものであるが、初等科國語三、濱田彌兵衛、初等科修身二、山田長政と直接關聯して取扱ふことによつて、その困難を容易に征服し得るのであり、そこに編纂上の用意があることを忘れてはならない。

文章

七七七五の調で、民謡の一般的な形式に極めて近いが、しかし仔細にいふと、都々逸その他民謡に見る三四、四三、三四、三二の字脚とやや異なり、第一聯は三四、四三、四三、三二、第二聯は四三、四三、三四、二三といふ風に破調であり、むしろその破調によつて重厚味を與へ、輕佻な音律に墮しないことを期した。要は民謡の輕快をねらふとともに、素朴雄渾の趣を添へ持つものである。

第一聯は、朱印船の特徴を端的に示すとともに、直ちにそれに乗つて船出する當時の人々の意氣を表した。朱印船の大きなものは、三桅即ち三本の檣を備へてゐた。もちろん今日のことを思へば、渺たる扁舟であるが、當時としてはわが國の大船であり、しかも意氣を以てすれば千里の海も何事かあらんといふ心持で、當時の人々の心を主體的に表現してある。

第二聯は、第一聯を受け、かくて出航した船が萬里の波濤を蹴つて進む折から、海上に赤々と落ちる夕日を敍し、感慨無量の間にも、心は一筋に南へ南へとはやつて止まなまいといふのである。第一聯の「千里の海」を受けて、萬里の波といつたのも、とより實際の距離をいふのではなく、むしろ修辭の妙を味はふべきである。

第三聯は航海に幾月幾日の泊りを重ねつつ、めざす安南や暹羅國は、まだまだ遙かであるといふのである。當時の航海は風によつて進み、風がなければ港に月餘を待つこともしばしばで、その困難は到底今日

の思ひ及ばぬものがあつた。「心にかかるは、心にかかつて止まない」
―換言すれば、ひたすらに、あこがれる意味である。なほ「シヤム」は今の
タイ國であるが、當時は暹羅としてわが國に知られてゐた。

第四聯は、既に目的地に達した人々が、まづ南方の風物をいかにもの
珍しくもまた感慨深く見たかを、想像的にしかも具體的に表したもので
ある。「椰子の林に照る月影」には、異國的な椰子に故郷をも照らす月
影が配してある。

第五聯は、當時暹羅その他各地にあつた「日本町」を捉らへ、第四聯の夜
景を受けて、ふけ行く夜の日本町に、安らかに眠りつつある人々の夢は、
おそらく故國日本の夢であらうといふ意味である。その夢に故郷の
山を見、川を見、家を見るであらうさまを、あたかも走馬燈の繪でも見る
やうに、「かけまはる」と動的に表現したのである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、韻律を生かして確實に讀ま

せる。七七七五の流麗な調子であるから、範讀等により特に朗讀を重んじて指導
する。讀みを繰り返しながら、しだいに文意を明らかにし、かつての朱印船が、萬里
の波濤を乗り越えて南洋の海面を駆けめぐつたことを追想し、當時の人々の心持
に共感させ、詩情を味ははせるやうに指導する。

讀みを反復し、自然に暗誦に導く。

話すこと 詩は讀むことによつて詩情を味ははせることが大切であるが、この詩に
於いては、特に歴史地理の背景を與へるために、「南洋」「濱田彌兵衛」「山田長政」等を話
題として話をさせる必要がある。

書くこと 新字讀替の文字を中心として指導し、暗誦を利用して、全文を詩の形のま
ま書寫させる。その際次のカナヅカヒに注意させる。

船は帆船よ

なほも南へ

安南シヤムは

照る月影を

昔の人は

ゆめは故郷をかけまはる

注意すべき發音文字ことは等

アクセント、

うみ(海)——ウミ

き(氣)が——キガ

き(木)が——キガ

訛音方言

千里——「シェンリ」の訛を矯正する。

人——「シト」の訛を矯正する。

發音

帆船——ホブネ

萬里——バンリ

夕日が——ユーヒガ

氣が——キガ

月影——ツキカゲ

日本町——ニッポンマチ

ふけ行く夜の——フケユクヨルノ

文字

新字 月影

讀替 千里

語句語法

「マスト」千里の海もなんのその「萬里の波に」氣がはやる」とより重ねて「ふけ行く夜」ゆめは故郷をかけまはる等は指導を要する語句である。

「千里の海もなんのその」は千里の海も何でもないの意で、當時の人々の旺盛な意氣を示したものである。

「萬里の波は」千里の海を修辭的に強めたもので廣漠たる海洋を想像させるやうに指導する。

「なほも南へ氣がはやる」は第一聯の千里の海もなんのその」と呼應して南方への憧憬を表してゐる。

備考

連絡

初等科國語二南洋、同三濱田彌兵衛と連絡して取扱ふ。

初等科修身二日本は海の國、山田長政と連絡して取扱ふ。

初等科音楽二船は帆船よと連絡して取扱ふ。

二 燕はどこへ行く

教材の趣旨

燕はわが國各地方に廣く渡來する候鳥で、兒童にも親しみの深い鳥である。殊に人家の軒先等に巢を營んで、子を育てる點や、また益鳥として保護されてゐる點などから、人々に親愛の感を持たれてゐる。本教材は、この燕の習性を動的に、敘事的に述べ、單なる理科的説明に陥らず、興味深い敘述の間に、おのづから燕の候鳥としての性質を具體化したものである。しかも、單に興味ある鳥として描かれてゐるばかりでなく、その背景には、フィリピン、オーストラリアなど、大東亞圖南方の國國が現れ、初等科三卷末の、濱田彌兵衛や、前課船は帆船などと關聯して、大東亞の地理的關心を高めるやう考慮されてある。同時に燕の活動の敘述はあくまで日本中心であつて、國家的感情が基調をなしてを

文章

り、また全文燕に對する溫い親愛の心持が溢れてゐて、動物愛護の精神にも培ふなど、極めて多面的な意義を持つ教材である。が、それらは兒童の主體性に即した平明な行文の中に渾然と溶けこんでゐるから、兒童の興味に従ひ、文章に即しつゝ、直觀的に把握させるべきである。

大體三段に分れてゐる。即ち、夏の末ごろ電線や物干竿に止つてゐる燕の生態から、それが九月半ばころになつて、だんだん日本を去つて行くまでの敘述が第一段で、第二段の序となつてゐる。第二段は、本教材の中心で、燕はどこへ行くのでせうかの間に答へる部分である。第三段は春になつて燕が歸つて來る場面、第一段と照應し、全文の餘收であり、しめくくりである。

まづ、電線や物干竿に止つてゐる燕を想起させ、情景を具象的に捉らへさせ、その中には親燕もゐますが、今年生まれた子燕が、たくさんまじつてゐますと、兒童の興味を誘ひ、その子燕はもう夏の終りであるから

相當大きくはなつてゐるが、口ばしのやうすが親燕と異ると、細かい觀察が敘してある。

燕が並んでゐるやうすを、何かしら相談でもしてゐるやうに見たのは、觀る者の感情移入で、兒童性に即した主體的表現である。以下、日本に、なごりを惜しんでゐるのかも知れませんかといひ、遠い國のことを話し合つてゐるのかも知れませんかといふのも同様で、燕の意中を推し測つたわけであるが、畢竟觀る者の感情であつて、燕に對する親愛の心持がその底にある。

九月中旬から、日本を去りはじめて、十一月初旬には全く飛び去つてしまふ。あれほどたくさんゐた燕がみんななくなつてしまふとは一體どこへ行くのだらうといふ疑問は、誰しも持つところである。以上は第一段で、第二段への緒口として疑問を提出してゐる。

燕の行く先は、遠い、遠い南の海のかなたです——どこへ行くのでせうかの間に對し、端的な答である。しかも、遠い、遠い南の海のかなたと

いふ表現は文學的で、兒童の憧憬的な心情に訴へるところがあるであらう。「南の海のかなた」の漠然とした指示に對し、更に具體的にはどの邊かと考へが進んで行くのは當然である。それを説明的にいはず、挿話風にある年の十月の末、フライビンで子どもが燕をつかまへたところ、その足に埼玉縣につけて放した標識がついてゐたことを敘して、おのづから南の海のかなたを具體的に明らかにしたのは行文の妙である。昭和二年十月二十六日、ルソン島ラダナ州バプロといふ町で捉らへた燕の右脚に、昭和二・七一、四羽組——杉浦榮治と記した輕金屬の標識がついてゐた事實に由つてある。燕のみならず、各種の渡り鳥その他の鳥類を捉らへて、その脚に小さなアルミニウム製の（海鳥の場合には銅製の）足輪（即ち標識）を附けて放し、それが後に各地で捉らへられた場合の報告を蒐集し、これらを取り纏めて、渡り鳥の行動や、その他鳥類生態に關する各種の問題を明らかにしようとする方法を、鳥類標識法といつて、鳥類生態學上極めて重要視されてゐる。この科學的研究法を

詳細に亘つて兒童に理會させることは不可能でもあり、無用でもあるが、鳥類生態學上一新紀元を劃したといはれる重要な方法であり、また兒童の興味に即した問題でもあるから、簡単に補説するのもよい。なほ、東京マニラ間の直線距離は凡そ三千二百軒であるが、航路によると四千五百軒餘ある。しかし、それはかなり寄港地が多いから、本文では四千軒と大約の數で表した。

しかし、燕はもつともつと、南へ飛んで行くのです——フィリピンも日本から相當に遠いが、更に、もつともつと遠くへ飛ぶ。ジャワやオーストラリアまで行くと學者にいはれてゐるが、本文では、といふことです。その點は多少ぼかして書いてある。

さて、そんな遠くまでよく飛んで行けるものだと推理が進んで行き、燕は、鳥の中でも、いちばん早く飛ぶ鳥ですといふ説明になる。汽車や自動車も、かなはななく、早くて飛ぶ能力を持つてゐるのであるから、がういふ遠い海上を幾百軒も飛べるのは、まことに、もつともてあ

るが、しかし今年生まれた子燕はどうであらう。

夏の末ごろまだ口ばしの黄色かつたやうな子燕が、そんな遠方までよく飛べるものだ——子燕を案じる心持とともに、感歎の氣持が籠められてゐる。それに長い旅の途中で、思ひがけない災難に遭ふこともきつとあるであらう。以下はその一例である。これは、日本の燕ではなく、ヨーロッパでの話である。オーストリア、ウィーン動物保護協會が、昭和六年ウィーン附近に寒氣と飢のため落下した燕十萬羽を集めて、空住宅に住まはせ、保温給食し、疲勞の恢復するのを待つて、汽車及び飛行機で、伊太利のベニスまで輸送した事實によつてゐる。

さて、南へ渡つて行つた燕は、時期が來るとまた北へ歸つて來るのであるが、その場合、前と同じ家に歸つて來ると古來いはれてゐたことを、近年になつて、科學的に調べてみたら、やはりその通りであることがわかつた。いろいろな方法といふのは、主として標識試験であるが、その他に、燕の刺毛や、卵の斑點の特徴等によつても確められたことを指し

てゐる。

日本からオーストラリヤまでの距離を一萬千以上としたのは、もちろん概算で、東京オーストラリヤ北端間の直線距離は、大約五千五百千ぐらゐであるが、燕はフリーピン・ボルネオ乃至マレー・ジャワ諸島からオーストラリヤに渡るものと思はれる。郵船航路によれば、東京・メルボルン間は一萬四千餘千であるが、これは寄港地も多いから、大凡航路を基準とし、いろいろ參酌してごく大約の數字を示したのである。

燕は、決して自分の國を忘れません——日本を主體とした書きぶりが最も明瞭に出てゐる。燕の故國は日本であるといふ主體的な感情の下に筆が進められてゐる。燕は日本に限らず、春、北溫帶地方に來り、秋、南洋地方に去つて越冬するものであつて、一體どこが故國であるかは、一應問題になり得る點であるが、彼等は北溫帶地方に於いて家庭生活を営み、雛鳥を蕃殖するのに對し、越冬地にあつては、かかる現象を一切見ず、雌雄處を異にするとさへいはれてゐる。さういふやうな點か

らみて、元來北溫帶地方の鳥であつたのが、氣候の變動によつて、冬、南方に避寒する習性を次第に馴致したものと學術的にも解釋されてゐるのであつて、決して事實に反した表現ではない。

日本に春が來ると思へば、もう矢もたてもたまらず、北をさして進むのです——以下は、科學的見地からすれば、動物の本能の具象化であり、文學的見地からすれば、動物愛に根ざす感情移入である。

春になると、だれもが、このめづらしいお客の歸つて來るのを待ちこがれてゐます——第三段であり、第一段の燕の出發に對應し、燕の歸つて來るのを人々が喜び迎へるやうすである。「今日、始めて燕を見たよ」の感慨は、この段の焦點で、燕に對する親愛の情が生き生きと表はされてゐるとともに、おのづから季節の喜びが流露してゐる。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字、語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みが進むにしたがひ、燕が秋から冬にかけて遠くオーストラリヤ邊まで行くこと、燕は飛

ふ力の強い鳥であるが、海の上を飛ぶ途中でいろいろ災難にあふこと、それでも燕は同じ家へ歸つて來ることなどを讀み取らせる。その中に候鳥としての燕と燕に對する感情を特に讀み味ははせて燕に對する親愛の情を感じさせるやうに指導する。

話すこと 燕に對する體驗について話をさせ、本文の理會に資する。文章挿畫を中心として燕がわが國を去つて行くころのやうす、その行く先、飛ぶ力、途中の災難、毎年古巢へ歸つて來ること、人々が喜んで燕を迎へることなどについて話をさせる。

次のことばを用ひて話すことを練習させる。

決してふしぎではありません。

惜しんでゐるのかも知れません。

書くこと 新字・讀替文字・略字を中心として指導する。「談」「惜」「續」「屬」「試」「難」「候」「與」等複雑な文字が多いから、扁旁等にわけて指導する。中にも點畫の誤りやすい文字、たとへば「屬」「試」「難」「與」等は特に字形・筆順に注意し、確實に書かせる。次の如き文によつて書取を練習させる。

何かしら相談でもしてゐるやうに見えます。

日本になごりを惜しんでゐるのかも知れません。

十月には續々と去つて行きます。

右の足に、日本の文字を記した小さな金屬の板がついてゐました。

さいたま縣のあるところで、試みにしるしをつけてはなしました。

思ひがけない災難にあはないともかぎりません。

その年は氣候が不順で、九月の中ごろ急に寒くなり、雨が降り續きました。

暖い家に入れてやり、食物を與へてやりました。

長い旅行を續けるせむか、途中で死んで歸つて來ないものもあります。

何よりも、あの家の軒下に作つた古すがなつかしいでせう。

次のカナヅカヒ等に注意させる。

行かう

行きます

行くのでせうか

行け

見・える
越・えて

與・へて

迎・へる

食・にうゑ

植・えつけられた

注意すべき發音文字ことは等

アクセント

す(基)を——スオ す(酢)を——スオ

訛音方言

十羽——ジュッパといはないやうに注意する。

同じ——オナシ、オンナジといはないやうに注意する。

口ばし——クチバシといはないやうに注意する。

ほとんど——ボトントといはないやうに注意する。

不順——フジンの訛を矯正する。

つめたい——ツベクタイ、チイグアイの訛を矯正する。

お客——オチヤクの訛を矯正する。

發音

行く——イク

五六羽——ゴロツバ

その中——ソノナカ

生まれた——ンマレタ

行かなければ——イカナケレバ

行く先——ユクサキ

數——カズまたはスー

今日——キョー

ことばの中または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字

相談 惜(オ)しんで 續々 金屬(屬) 埼玉縣 試み 災難 氣候(コ)

讀替

相(ソ)談 文字 記した 續(続)き 旅(リ)行

語句語法

「いくぶん相談なこり」なれば「緩々」ほとんど「行く先」海のかなた「金屬の板」試みに「二氣に災難」約十萬羽「氣候」不順「飛行中」食にうき「何しろ」軒下「近年」方法「旅行」矢もたてもたまらず「若菜」のもえる日本「古巢」待ちこがれて「わけ工」も等は指導を要する語句である。次の文例によつて決して「副詞」は常に否定形で結ぶことを指導しその使用になれさせる。決してふしぎではありません。

決して自分の國を忘れません。

次の文例によつて疑問の意をもつた助詞「かも」を指導しその使用になれさせる。

惜しんでゐるのかも知れません。

話し合つてゐるのかも知れません。

備考

連絡

初等科國語二「南洋と地理的に連絡がある。初等科修身一」つばめのすと連絡して取扱ふ。

初等科理科一「渡り鳥と連絡して取扱ふ。

参考

九頁の挿畫はウィーン動物保護協會が燕を住宅に集めて保護給食してゐる圖である。

三 バナナ

教材の趣旨

兒童の日常生活に於いて體驗し得るバナナによつて、臺灣に於ける果樹産業の一端をうかがはせ、やがて大東亞の文化生活への理會の手がかりたらしめようとするものである。

ややもすれば、南方の果物が野生のままて産出すると思ひがちな謬想を一掃し、溫度と濕氣に恵まれ植物の生育の盛な熱帶地方でも、やはり文化の営みがあつてこそ、資源としての生産開發がでるのであり、特にかうした果樹の一本一本が、栽培者の苦心と愛育の心によつて成長し、實を結ぶといふ物心一如の妙境を感得せしむべきである。これは敢へて果樹に限らず、例へば南米の野生のバラゴムが一度マレーに移され、苦心經營の結果は、原産地がほとんど忘れられ、ゴムといへば南

洋の主産となり、一本の木から野生に十倍するゴム液を採り得るやうになつたことと、比較して考へられることである。

もとより大東亞戦争下、船腹その他の關係上、臺灣バナナの輸送は意の如くならない現状にあり、一面また南洋各地にバナナを産し、殊にジャワの如きはバナナに幾十の種類があつて、その中には極めて美味を誇るものもあるが、熱帯果物の特色として極めて美味なものは忽ち變味し、遠く輸送し得ないものがある。これらは戦時下適當に補説し、指導することが望ましい。

臺灣のバナナは明治以來栽培の歴史があり、臺中・臺南・高雄三州を主産地とし、その産額は年數億斤に達し、内地その他遠く輸送するに適した品種である。

文章

兒童に親しく話しかける態度で書かれた文章で、初等科國語三、出航と似た趣があり、説明敘述を基調としながら、常に兒童の體驗と結び、理

知とともに感情にも訴へつつ筆が運ばれてゐる。

今日はバナナのお話をしませう——冒頭のこの文によつて、以下親しく兒童に呼びかけたお話になつてゐる。それは、教室に於いて先生が兒童に對してお話をしてゐる場面と見てもよく、また誰かしかるべき人が兒童にある機會に於いて話してゐるのだと考へさせてもよい。まづ兒童の體驗するバナナの感覺面から説いて兒童の興味を誘ひ起し、さてそれがどこでできるか、どんな植物に生るか——この二つの疑問を手がかりに話を發展させて行く。

この疑問に直ちに答へたのが次の一節である。「どこで」といふのに對して「臺灣と答へ、どんな植物」に對して「ばせうによく似た植物と答へてある。ここで注意を要するのは、あの美しいバナナの一句である。琉球や小笠原から来る小さなバナナもあるが、それは、あの美しいバナナから除外していはれてゐる。

次に内地のわれわれが、しばしば抱く謬想が打破してある。臺灣へ

行つたらバナナは枝つきのままもぎ取つてたべられるぐらゐに考へ、現にさうしたことで臺灣へ行つて失望したり笑はれたりする人は少くない。それは結局、あの美しいバナナが野生だと漠然考へることから生ずる。そこで話は次の節へ發展する。

少くとも臺灣のバナナは野生ではない。それは内地に於いて栽培される梨や、水蜜桃などと同様であり、かうした兒童の體驗し得るものを手がかりに反省させるやうに筆が運ばれてゐる。

そこで、いよいよ臺灣に於けるバナナの栽培狀況が説かれる。臺灣でも、中部及び南部の臺中、臺南、高雄三州が主産地で、それも米その他主要農産物を栽培し得る平地でなく、多くは山地で作られる。即ち山麓地方から、時には海拔一千メートルの山地の斜面にまで及んでゐる。しかもそれが整然たる畠である點に於いて、ほぼ梨畠、桃畠などと同様であるが、ばせうに似た草本的な植物であるから、遠く望めばむしろ野菜畠か、花畠を思はせる。さうした感じを敘べることによつてその整

然たる様子と、栽培量を實感的に想像させるやうに書かれてある。

これほど多數で、しかも高さ數メートルもある、あの大きな植物の一本一本について栽培者は除草し、中耕し、施肥をし、灌排水をし、支柱を立て、實が生れば袋まで掛けるのである。全く以て野生どころの沙汰ではない。一本一本に對する愛育の心、苦心努力があることを考へなければならぬ。

然らばその植物は如何に成長して、如何に花が咲き實が生るか。特に興味のあるのは花の實の様子であるから、それはやや丹念に具體的に書かれてある。「長い一本の軸といふのは、花軸であり、蓮のつぼみのやうなものは苞で、苞が開いた花が花軸をめぐつて咲き、更に花軸が伸びて新しい苞ができ、それが開いてまた花が咲く。かうして幾段かに花が咲いて房を形成する。その房に生つた實が、小さい時はみんな下を向いてゐるが、大きくなるにつれ日光に向かつて上へ反りあがり、逆立ちをするのは實に奇觀である。」

臺灣のバナナはまだ青いうちに取つて遠方に輸送し、追熟して販賣する。さうするに適したバナナなのである。まづ木から取つたバナナは検査所で嚴密な検査をし、合格品に等級を定めた上で輸送する。基隆神戸間の客船高雄から東京への貨物船、その外、北支中支滿洲へもそれぞれ配船して送るのであるが、戦時下に於いて異變があるのはやむを得ないことである。

青バナナは澁柿同然で食べられないが、一般に室と稱する追熟室に入れて、四晝夜乃至一週間追熟すると黄金色を帯びて来る。表皮が全部黄金色になり、雀斑のやうな褐色の斑点が出たところが糖化した絶頂で、香氣もよく最も美味である。

かうして臺灣のバナナが内地はもとより、北支、北滿あたりまで行くことを述べて終筆してある。「太陽のゆたかな熱と光とを吸つて、すくすくと育つた」といひ、「みなさんのお目にかかるといひ、雪の夜の家」の家にも行つて、みんなを喜ばしてゐるといひ、擬人的な筆法が特に終末

に興味と感情とを與へてゐることに注意される。なほ、南方の「臺灣」と北方の「北支那」「北滿洲」「太陽のゆたかな熱と光と」「雪の夜の家々」の對照も文の興味として見落すことのできない點である。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みが進むにしたがひ、まづ臺灣で作られてゐるバナナの話であることをわからせ、次にそのバナナについて詳しく讀ませるやうにする。それには、あのバナナがどこでできるかどういふ植物に生るかといふところに疑問を起させて、深く讀ませる。かうしてばせうによく似た植物に生る果物で、鳥に作られること、草を取つたり肥料をやつたり、實に袋まで掛けていろいろ世話をしてやること、苗から成長して、ふさのやうな花が咲き實が生ること、青いうちに取つて遠くへ送り、むろに入れて置く、と皮が黄色になり、おいしい味が出て来ること、各地へ送られ人々を喜ばせることなどを讀み取らせるやうに指導する。

話すこと 始めにバナナについて話をさせ、文章挿畫を中心として、バナナの作り方や花が咲き實が生ることや、遠くへ送られ人々に愛好せられることなどについ

て話をさせる。

書くこと 新字・讀替の文字を中心として指導する。「斜」「料」「箇」「株」等は困難な文字であるから、偏旁等にわけて字形・筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

バナナは、野生の植物に生るくだものではありません。

高い山の斜面がほとんど全部バナナ島です。

まはりの草を取つたり、肥料をやつたりします。

苗を植ゑてから、早くて十箇月で花が咲きます。

古い株を切つて出た芽は、それよりも早く成長します。

太陽の熱と光とを吸つて育ちます。

次のカナヅカヒに注意させる。

（果物にちがひありません）

（大きなまちがひです）

バナナが植ゑてあります

たくさん植ゑてあるのです

（バナナの苗を植ゑてから

かういふと

かうして、花が次から次へ

かうしてみなさんのお目にかかるのです

注意すべき發音文字ことは等

アクセント

なる（生）——ナル なる（鳴）——ナル

カンナ（草花）——カンナ かんな（飽）——カンナ

は（葉と）——ハト は（齒と）——ハト

あぢ（味）——アジ あぢ（修）——アジ

訛音方言

できるか——「デケルカ」と訛らないやうに注意する。

梨——「ナス」の訛を矯正する。

せわ——「シエワ」の訛を矯正する。

發音

今日——キヨ——

生るか——ナルカ

行けば——イケバ

十箇月——ジツカゲツ

何段——ナンゲン

北支那——キタシナ

北滿洲——キタマンシュー

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字

斜(シヤ)面(肥料(リョー)) 十箇月 株(熟)

讀替

野生

語句語法

「ゆたかな日光」ばせう「野生」もぎ取つて「キャベツ」「カンナ」「斜面」「全部」「肥料」「成長」「遠方」むろ「ゆたかな熱」等は指導を要する語句である。

次の如きいひ表し方に注意させその用法について指導する。

私たちが「ばせう」といつてゐるものに、よく似た植物に生る果物です。

梨や水蜜桃などが、畠でだいに育てられた木に生るのと同じことです。

臺灣のバナナにしてもそれと同じことなのです。

實が生ると梨や桃と同じやうに袋まで掛けてやるのです。

備考

連絡

初等科國語三「君が代少年」「濱田彌兵衛」と地理的に連絡がある。

(以上 十月)

四 大連から

教材の趣旨

ヨミカタ二、西ハタヤケに始つた満洲に關する教材は、よみかた四、金の牛及び満洲の冬を経て、支那の子どもや初等科國語一、支那の春にいたり、大陸への憧憬は、次第に高められ、さらに初等科國語三、出航に於ける實感的歡喜の情は、海外進出の念をいよいよ強くしたのであつた。本教材は、この憧憬や歡喜の情を直接受けて、主題を大陸都市たる大連に求め、兒童をして、現實的に歩を大陸の一角に進ませたのである。

大連は、満洲の南端に位する都邑であるが、大陸的な氣候や風土を味はふことができ、また満洲情調ともいふべき異國の風物に接することもでき、故國日本を離れて異郷に來た感じを抱かせるには十分である。本教材はいはゆる郷土の觀察的に大連を眺め、これを手紙の形に表

現し、この土地に安住し活躍せるわが同胞のやうすを具體的に敘し、四海にあまねき御稜威を兒童の心情に即しておのづから感得させようとするものである。

文章

文章は、日本内地から大連に轉任したある教師が、もとの教へ子たちに宛てて書き送つた手紙の形になつてゐる。このことは初めに「みなさん、たびたびお手紙をありがたう」「私もずつと丈夫で、毎日楽しく暮してゐます」といふ前書でわかる。

「きのふは、明治節でした。この手紙を書いた日時もわかり、「講堂の壇に、かざつてあつた菊の花を見て、ふと、みなさんのことを思ひ出し、ました」といふところで、手紙を兒童宛に書かうとした動機もわかる。

まづ、送つてあげた大連の繪はがきや地圖によつて、町の名を説明してあるが、この命名は、單なる思ひつきではなく、「満洲は、前から、日本と深いつながりのあつたことを裏書きし、「このほかまだありますから、

さがしてごらん、なさい」といつて、兒玉町、奥町、山縣通などといふ町のあつたことを暗示してある。

「こちらへ来てから、半年餘りになつたばかりなので、滿洲情調の豊かなくとも、近代的文化都市たる大連のやうすが、いかにも目新しくかつもの珍しく思はれ、この感興を順々に教へ子たちに知らせて行くやうに筆が運ばれてある。

まづ町にはいくつかの廣場があることが書いてあるが、この廣場は町のあちこちにあり、そこが中心となつて、街路が蜘蛛手に放射し、日本の都市には見られない景觀である。廣場には、千代田廣場、大廣場、西廣場、朝日廣場など、大小七つほどあるが、その中で、大廣場がすきであるわけが述べられてある。大廣場は、かなり廣い圓形の地域であつて、外廓には、大連市役所、警察署、諸銀行、ホテルなどが堂々と聳え、廣場の中央には、初代都督大島義昌大將の銅像が、儼然と立つてゐる。それを取りまいて芝生が生え、連翹や藤杏などの植込みがしげり、あづまや、ベンチなど

ともあつて、公園風になつてゐる。それで、滿人の子どもや、ロシアの子どもたちがよく遊んでゐるのであつて、おのづから國際都市としての點景を描き出してゐる。

「今はちやうど、菊の花がたくさん陳列されてゐて、その美しさに見とれてゐるのは、ひとり日本人だけではない。滿人もあれば、ロシア人もある。ここに民族親善の好ましい情景もうかがはれ、かうして、明治節を心から祝ひ、式場や廣場に菊の花を飾つて、明治天皇の御遺徳を偲び奉り、遙かに聖壽の萬歳をことほぐ、外地同胞の心情が、具體的に表現されてゐる。

次に、菊の花の聯想から、アカシヤの花をとりあげて来て、大連初夏の自然の美を表象的に敘述してある。アカシヤは、豈料の灌木であるが、六月中旬ごろ、白い蝶形の花房を枝につばいに咲かせ、薰高い香をあたりにただよはせる。「白いふさになつた花の咲くころは、よいにほひがして」といふのは、そのありさまをいつたので、そこを馬車に乗つてち

りんちりんと鈴を鳴らしながら走るのはいかにものどかな風景で、楽しいものであり、快いものである。大連市内でいちばんアカシヤ並木のそろつたところは中央公園内のものであらうが、ここを、のぼつて行くと、忠霊塔が立つてゐて、町からよく拜むことができる。この忠霊塔下の廣場では、しばしば國民的行事や祭典などが行はれ、大いに日本精神が昂揚され、顯彰されるのである。

さて大連の地理的解説として、重要な港灣であることや、興亞大陸たる日滿支をつなぐ海の關門であり、滿洲國の大玄関であることなどが書かれ、つづいて滿洲國のことに筆が進められてゐる。

「滿洲國には、いろいろな民族が集つてゐて、みんな楽しく働いてゐるといつて、王道樂土の相を表し、民族協和の實が日本語普及の事實によつて具象化してゐる。即ち滿洲國には、滿洲語や蒙古語や、ロシア語などが使はれてゐるが、民族のことはがちがつてゐても、やがて日本語を通して、たがひにお話ができ、心持が合ふやうになることを記し、その一

例として支那町に於ける一挿話をかかげて、日本語普及のやうすをさらに具體的に敘してゐる。

大連には、日本人の人口の二倍餘もある滿洲人が住んでゐて、その集團は、西崗子^{（西崗子）}を始め、寺兒溝^{（寺兒溝）}千代田町附近奥町^{（奥町）}監部^{（監部）}通あたりなどにあり、俗にそこらを支那町とよんでゐる。ここには、支那商店街もあり、露天市場もあり、大衆娛樂場もあつて、一種異様な色彩、響き、匂ひなどがして、いはゆる「滿洲情趣」が豊かに感じられる。このやうな支那町を歩いてゐて、目につくものに看板がある。たとへば、一枚の大きな赤い布をさげた呉服屋の看板とか、櫛をいくつも結んで吊した櫛屋の看板とか、木製の彫刻をさげた藥屋の看板とか、その他、いろいろなものがある。その中で、赤い布ぎれのふさをつるした「おもしろいかんばん」を見つけ、
「あれは、支那料理の店のかんばんです」と日本語で明瞭に答へてくれた「滿人の子どものことばによつて、いかに日本語が實際彼等の身についてゐるかを知ることができ、同時に日本語の普及情態をうかがふこと

がてきるのである。

話は一轉して、滿洲の空にうつり、ほんたうにきれいに澄み、夜になると、手を延せば、すぐつかめさうに星が近く見える。これは、滿洲の空氣がいつたいに乾燥してゐて、水蒸氣が少いために空が晴れわたるからである。

空も美しいが、地上も廣々として氣持がよく、かうりやんも大豆も刈り取つていつそう廣く、思はずヨミカタ二、四ハ夕ヤケの歌を回想し、まさしくあの歌のとほりだと思つたことが敘してある。

かうして何かにつけ、もとの教へ子のことを思ひ出すのであるが、わけても南へ南へと飛んで行く雁の列を見ては、さらにその感を深くし、雁に手紙を頼みたいといふ望郷の念もおのづから湧いて来る。これは海外に進出してゐる同胞が等しく故里を忘れないで、常に母國に感謝しつつ活躍するわが國民的感情でもある。

終りに、秋の遠足には、旅順へ行つたことを書き添へ、「こつてあんなは

げしい戦があつたとは、どうしても思はれないほど、静かな美しい町であるといひ、それでも屹然と聳えてゐる、表忠塔を仰いだり、「廣瀬中佐で名高い旅順港口」の話を聞いたりすると、當時の激戦苦闘の情況もまざまざと眼底に映じ、心持がひとりで、ひきしまつて来るやうに思はれるのである。わが同胞の碧血に蔽はれたこの聖地、靈場たる、旅順の繪はがきを別に送り、「みんなてごらんさい」といつて舊師らしいやさしい心づかひを表してこの手紙の終りとしてある。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みが進むにしたがひ前に教へを受けた木村先生から、四年生の生徒に大連についていろいろなことを知らせて來た手紙であることをわからせる。即ち大連の町名、廣場、並木道、埠頭や内地との交通、滿洲に住む民族と日本語、それから滿洲の空や野や雁のことや遠足に旅順へ行つて表忠塔や港口を見たことなどを讀み取らせ、大連市を想像させて、大陸へ發展して行く皇國の榮えを感じさせるやうに指導する。以

上の指導には、市街地圖を用意し、これと結んで取扱ふことが大切である。

話すこと 文章挿畫を中心として、大連の市街交通、滿洲國の諸民族と日本語秋の滿洲のやうす、旅順口での見聞等について話合をさせる。

書くこと 新字・讀替の文字を中心として指導する。「將」「露」「澄」等は複雑な文字であるから、肩旁等にわけて、字形・筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

町の名に、日露戦争當時の將軍がたの名が取つてあります。

圓形で、きれいな植込みのある廣場です。

旅客機で朝たてば、夕方には大阪に着きます。

「あれは、支那料理の店のかんばんです。」

空がほんたうにきれいに澄むころになりました。

大豆も刈り取つてしまひました。

秋の遠足には、旅順へ行きました。

ひろせ中佐で名高い旅順港口を眺めました。

次のカナヅカヒに注意させる。

あるさうです

みなさうです

つかめさう

おぼえよう

ひえびえとして

近く見えます

こちらへ来て

新京へは

内地へは

北へ行きました

南へ南へと

日本へ行くのです

旅順へ行きました

注意すべき發音・文字・ことば等

アクセント

さく(咲)——サク さく(製)——ザク

訛言方言

きのふ——「キニヨ」の方言を矯正する。
遊んで——「アスンデ」といはいやうに注意する。
合ふ——「オ」といはいやうにする。
おもしろい——「オモロイ」の方言を矯正する。

發音

思ひ出し——オモイダシ
乃木町——ノギマチ
日本——ニッポン
大廣場——オーヒロバ
旅客機——リヨカフキ
合ふ——アウ
朝夕——アサユ
仰いだり——アオイダリ
十一月四日——ジューイチガツヨツカ
大山通——オーヤマドリー
東郷町——トーゴーチョー
半年餘り——ハンネンアマリ又はハントシアマリ
行く——イク
通して——トーシテ
何のかんばん——ナンカンバン
大豆——ダイズ
木村正一——キムラショーイチ

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 將(シヨ)一軍 植込み 支那料理 遣ひ 廣瀬中佐
讀替 日露戦争 東郷町(チヨ) 圓形(ケ) 旅客(カ)機 大豆(ズ) 遠足
旅順港口(コ)

語句語法

「學校園」寫生「將軍がた」廣場「圓形」滿人「陳列」並木通「忠靈塔」貨物「特別急行列車」内地「旅客機」民族「たとへ」日本語を通して「支那料理」かんばん「大豆」雁「表忠塔」等は指導を要する語句である。

次の「だり」に注意して、文意を正しく理會させる。

毎日たくさんの船が出たりはいったりして、そのたびに、貨物が山のやうにおろされたり、積み込まれたりします。

右の文は、毎日たくさんの船が出入し、その出入ごとにたくさんの貨物が積みおろされる意であることを指導する。

にれい山へのぼったり、表忠塔を仰いだり、廣瀬中佐で名高い旅順港口を眺めたりすると、心持がひとりで、ひきしまつて來るやうに思ひました。

右の心持のひきしまつて來るといふのは、にれい山へのぼり、表忠塔を仰ぎ、旅順港口を眺めた時の氣持を表したものであることを指導する。

次の文は、故郷をなつかしく思ふ心持を表したことを理會させる。

「雁に手紙を頼みたい。」

備考

連絡

ヨミカタニ「西ハタヤケ」よみかた四「滿洲の冬、初等科國語」三「出航」と連絡して取扱ふ。

五 観艦式

教材の趣旨

昭和十五年十月十一日、横濱沖に於いて行はせられた紀元二千六百年特別観艦式の光景を敘し、わが無敵海軍の勇姿をしのばしめる教材である。

見渡せば、艦艇百數十隻は東西に縦列を布いてゐる。即ち航空母艦

潜水艦の第一列、旗艦長門以下の主力艦、驅逐艦より成る第二列と第三列、主力艦巡洋艦潜水艦驅逐艦の第四列、主力艦敷設艦驅逐艦潜水艦掃海艇の第五列といふ順序で更に最南には番外列として潜水母艦特務艦がゐるならび、嚴然雄渾まさに言辭に絶する偉容である。

この日、早朝海上は一面の靄で、そのうすれ行くに従つて、各艦の堂々たる姿は墨繪のやうに浮かび出て、やがて空も晴れつくし、燦々たる秋の太陽が輝いて、滿艦飾の旗が各艦に美しくはためいた。

九時四十分、二十一發の皇禮砲が殷々と轟く中に、御召艦比叡は浮標を離れ、御親閱式場に進航する。御先導艦高雄に次いで御召艦比叡、供奉艦加古古鷹はおもむろに第一列と第二列の間を東へ向かつて進み入り、ここに御親閱は始つた。各艦列は、登舷禮を以て迎へ奉り、各艦順次に君が代のラッパを奏する。仰げば比叡艦上マストに懸る天皇旗の氣高き美しさ。かの艦橋には、畏くも大元帥陛下、天機うるはしく、今日を晴れとみならぶ一艦一艦をみそなはし給ふのである。

折しも、大空の一角に爆音が聞えるよと思ふ間もなく、忽ちまづわが海軍飛行機二百五十餘機の第一集團が、翼を連ねて式場を通過し、やがてまた二百五十餘機の第二集團が現れ、一瞬秋空はこれら大編隊の分列式によつて蔽はれつくした感があり、海國日本の力強さにいつそうの感激を深からしめた。

第一列第二列の間の巡航を終つて、御召艦は艦首を轉じ、第三列と第四列との間を西へ向かふ。君が代のラッパが各艦に次々に響き、萬歳の聲がここかしこに起る。

かくて一時間三十分に亘る御親閲を終へさせられ、御召艦が豫定の地點に投錨すると、各艦からは快速汽艇が一齊に御召艦に集る。各司令官艦長が御召によつて御伺候申しあげるのである。

やがて優渥なる勅語をたまはり、將兵も拜觀の官民もひとしく感激に咽ぶ中に、午後一時三十分皇禮砲は再び轟き、御召艦は拔錨して港内に向かふ。光輝ある大観艦式はかくて終つたのである。

本教材は、當日の感激を韻文に敘して、これを兒童に傳へ、わが建軍の本義を具體的に感得させるとともに、やがて大東亞戰爭に於けるわが海軍の活躍、赫々たる戦果をしのばしめるものである。

よみかた三「軍かん」お話、同四「海軍のいさん」初等科國語一「カッタ」の競争、同二「潜水艦等と結んで」本教材の排列上の位置を考ふべきである。

文章

紀元二千六百年特別観艦式の光景をさながらに表現した韻文であるが、しかし時と場所とに觸れてゐない點では、観艦式を一般的に敘した形である。

おのづから盛りあがつた感激を、そのまま四行六聯に表した體の韻文で、各行の字脚は一定してゐないが、自然の韻律を強く感じる詩である。第一聯は、朝靄が次第に晴れて行く海上に、墨繪の如く浮き出すわが艦艇の勇姿を、やや遠く望んだ瞬間の感激である。

「海——見わたすかぎりはやや變つた句法であるが、海、そこには見わたすかぎり」といつた氣持であり、朝もやが晴れて行く海と續けて書くべきところを、特に「海」で改行したところに、海を強くひびかせようとする力が感じられる。

第二聯は、朝靄が晴れ、朝日が燦然と輝く中に、第一列から第五列まで百數十隻の艦艇が今日を晴れとみなぶ光景であり、第一聯から見れば時間的経過がある。ちやうど、拜觀者からすれば、第一聯は汽艇に乗つて進行しつつ、艦影をやや遠く望み見た瞬間であり、第二聯はやうやく艦列に近づいた時の感激であつて、このころ朝靄はほとんど晴れつくし、各艦は朝日を浴びて並んでゐた。

今日、おごそかに觀艦式——第一聯の末行とともに名詞止めになつてゐるところに力があるが、おごそかにの副詞によつて動的な趣が見え、名詞止めの窮屈さを緩和してゐる。つまり、おごそかに觀艦式が行はれるの意である。

第三聯はいよいよ御親閱が始るところで、皇禮砲の轟く中を、御召艦比叡が靜かに進む光景である。ここ三行は逆敘の形で、第一、第二聯の瞬間的な感激を表す名詞止めと全く變つた句法であり、特に軍艦の肅々と動き移るのを感じしめる。

第四聯は艦列の各艦前を御通過になる時、それぞれの艦から拜する者の高潮した感激の表現で、第二行第四行何れも名詞止めを用ひ、瞬間的な表し方になつてゐる。しかも、天皇旗、ああ、天皇旗と繰り返し、登舷禮、君が代のラッパと疊みかけて、感情の高潮を表すとともに、名詞止めの窮屈さを開放するやうになつてゐる。

第五聯は飛行機の分列式である。大空の一角に遠く爆音を聞いたと思ふ間もなく、刻々と近づいて頭上を通過するその雄姿、「たちまち數百機が空をおほうてによつてその瞬間的な變化と、飛行機のおびただしさが想像され、分列式を二度繰り返して第四聯の句法と同じ心づかひを託してゐる。

第六聯は前面御通過後、既にやや遠く、御召艦を見送るころの感じて「はるばると艦列をぬつて進むといひ、秋風はさわやかに海をわたる」といひ、動詞の終止形を以て結び、やや遠き海上に於ける艦の静かな歩みを表し、なごやかな心の落ちつきを託しつつ餘韻ある結尾としてある。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、韻律を生かして確實に讀ませる。莊重な調子の詩であるから、特に讀みに注意しておのづから観艦式のおとそかを感ぜさせるやうに指導する。讀みが進むにしたがひ、秋風がさわやかにわたる海上に浮かぶ百數十隻の帝國艦艇の雄姿を思ひ浮かばせ、殷々として響く皇禮砲の下に堂々として進む御召艦上高くひるがへる天皇旗を仰ぎ、各艦では登舷禮を行ひ、君が代を吹奏する莊嚴なさまを思はせ、數百機の飛行機が爆音勇ましく分列するさまを想像させて、観艦式の壯觀に感激させるやうに指導する。

讀みを反復し、自然に暗誦に導く。

話すこと 挿莖等を利用し、観艦式のやうすについて話合をさせ、詩の理會に資する。詩については次のやうな事項によつて話合をさせる。

観艦式の日の朝のけしき

式場に並ぶ軍艦のやうす

御召艦の進む時のやうす

飛行機の分列式

書くこと 新字・讀替文字・略字を中心として指導する。「觀」等は扁旁等にわけて字形筆順に注意し、確實に書かせる。

暗誦を利用し、全文を詩の形のまゝに書寫させる。その際次のカナヅカヒに注意させる。

秋の日を

御召艦比叡は

巡洋艦高雄を

加古古鷹を従へて

艦艇は

空をおほうて

御召艦は

艦列を。

青空は。

秋風はさわやかに

海をわたる

注意すべき發音文字ことは等

アクセント

はれて(噺)——ハレテ

はれて(應)——ハレテ

發音

観艦式——カンカンシキ

行く——イク

第五——ダイゴ

百數十隻——ヒャクスージッセキ

今日——キョー

御召艦——オメシカン

仰ぐ——アオグ

おほうて——オオーテ

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 観(観)艦式 御召艦 先導(下)

讀替 雄(ユ)姿 御召艦

語句語法

「朝もや」帝國の艦艇、雄姿、旗艦、さんさんと、皇禮砲、御召艦、先導、天皇旗、うやうやしく、
「登舷禮、分列式」はるばると、はてもなく、さわやかに等は、指導を要する語句である。
次の如き句は短句をたたみかけて、観艦式を讃へ、特に感情を強く表白してゐる點を指導し、
文意の理會を深めるやうにする。

くつきりと、堂々と、

帝國の艦艇、おその雄姿、

今日、おごそかに観艦式、

天皇旗、ああ、天皇旗、

登舷禮、君が代のラッパ、

空をおほうて分列式、分列式、

備考

連絡

よみかた「三軍かん、お話、同四、海軍のにいさん、初等科國語一「カッターの競争、同二、潜水艦
等と連絡がある。

六 くりから谷

教材の趣旨

本巻の説話は卷三の發展延長として、源平時代の歴史物語に集中し、やうやく古典文學の性向を示すとともに、この興味深き戦争物語によつて、文語文を提出する手がかりとしたもので、その趣旨は卷三の總説に述べてある。

本教材は表現の方からいふと、源平盛衰記を單純化し平易化した部分が中心となつてゐるが、説話内容は、むしろ平家物語に據り、源平盛衰記の「火牛の計」にはふれてない。いづれにしても文そのものが持つ諧調や韻律の快味は、戦争の感興とともに、強き魅力を兒童に與へるから、ひたすら讀みを反復指導し、兒童をして知らず知らずの間に文章に親しませ、文語の調子を感じさせるものである。指導者はこの趣旨を尊

重し、主として直觀的に朗讀を中心として理會せしむべきである。

文語文は一見口語文と著しく文體を異にするやうに思はれるが、既に口語文でも文語的手法を取り入れたものにあつては、各文の結尾を少しく變改したものに過ぎないやうなものがあつて、随つて文語として始めて提出された本教材の如きも、これを強ひて論理的に取扱はない限り、兒童は直觀的にある程度理會し得るのである。しかも卷三には「日本武尊」「笛の名人」「千早城」「錦の御旗」等の口語文に於いて、幾分文語的手法を用ひ、本巻の韻文「船は帆船よ」「觀艦式」等に於いて、更に口語文語接近したものを掲げて指導の階梯としてある。

文章

短篇の文語文であるが、整然たる文の序列に注意すべきである。

まづ「木曾義仲都へ攻めのぼると聞きて、平家はあわてて討手をさし向けた」と戦争の發端を敘して冒頭としてある。國史の知識のない兒童には、理會しがたい點もあらうから、當時源平二氏が東西に分れて

相争つたこと、木曾義仲は源氏であること、當時の都は京都にあつたことなどについて簡潔に補説するがよからう。

第二節の兩軍の布陣は簡單な敘述であり、しかも文は口語文と同形であるから、文意はおのづから明らかであるが、兩軍の大將と軍勢とを確め、越中の國礪波山の位置に注意して指導する必要がある。

第三節は、兩軍が接近してその間僅かに三町ばかりになつたことから、第四節の義仲の奇襲作戰に敘述の筆を端折つて進めてある。

第五節及び第六節は、興味を中心たる戦況を敘したもので、戦記文學特有の感興を諧調に載せて書かれてをり、しかも文脈は整然たる中に弾力性をもつた敘述になつてゐる。まづ、不意を討たれて平家の軍は上を下への大さわぎと平家の狼狽振りを概括的に名詞止めて力強く敘し、

弓を取る者は矢を取らず、矢を取る者は弓を取らず。人の馬にはおのれ乗り、おのれの馬には人が乗り、後向きに乗るもあれば、一匹の馬

に二人乗るもあり。

と弓矢を失ひ、馬を乗り違へて、全軍隊を崩して混亂する狀を具體化し、「暗さは暗し、道はなし」と暗夜路なき山中の難澁さを、輕快な句によつて韻律的に敘し、以上の敘述を受けて、平家の軍は逃げ場を失ひて、後のくりから谷に、なだれを打つて落ち入りたりと、全面的に敗北して、節度を失つた平家の軍勢が、くりから谷に落ち入るに至つた事情を明らかにしてゐる。

かうして前節に呼應して、くりから谷に落ち入るさまを、

親も落つればその子も落ち、弟も落つれば兄も落ち、馬の上には人、人の上には馬、重なり重なつて、さしもに深きくりから谷も、平家の人馬にてうづまれり。

と親子兄弟折り重なり、人馬重なり合つて、深きくりから谷も人馬で埋まつたと、その惨敗の狀を連鎖的に豊かな諧調を以て巧みに描き、本文興味の頂點としてゐる。

以上の如く、戦争敘述の興味をいやが上に高潮させておいて、突如大將維盛は、命からがら加賀の國へ逃げのびたりと平家敗退の大詰を簡敘し、これを以て結尾としてゐるところに行文の妙を味はふべきである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。最初の文語文であるから、語尾等の口語と異なるところに注意して範讀を示し、讀むことを反復指導して、次第に文語になれさせるやうにする。文語そのものの解釋は文意が通ずる程度にとどめるがよい。讀みが進むにしたがひ、源氏の本曾義仲と平家の維盛とが越中の國となみ山で戦ひ、平家が大敗したことをわからせる。義仲の奇計と、平家の軍が周章狼狽して、くりから谷に落ち入る戦記文の敘述と結んで感興を深めるやうに指導する。

「不意を討たれて以下の文は、暗誦し得るまで讀みを反復させ、文語文の口調をおのづから會得させるやうにする。

話すこと 文章挿畫を中心として、兩軍の陣地、義仲の奇計、平家の軍が、くりから谷に

落ち入るさま等について話合をさせる。

書くこと 新字讀替の文字を中心として指導する。「騎」は肩旁にわけて字形筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

平家の軍十萬騎はとなみ山に陣を取る。

義仲は五萬騎を引きつれ同じくとなみ山のふもとに陣を取る。

みかたの兵を敵の後にまはらせ前後より、ときの聲をあげさせたり。

不意を討たれて、平家の軍は逃げ場を失ひて後のくりから谷に落ち入りたり。

さしにも深きくりから谷も、平家の人馬にてうづまれり。

大將これよりは、命からがら加賀の國へ逃げのびたり。

次のカナヅカとに注意させる。

馬には、

暗さは暗し

都へ攻めのぼる

加賀の國へ

(討手をさし向けたり
矢を取らず)

注意すべき發音文字ことば等

發音

討手——ウツテ

夜に入りて——ヨニイリテ

前後——ゼンゴ

馬——シマ

二人——ニンニ

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 十萬騎

讀聲 失ひ

語句語法

「討手」兩軍「三町」ときの聲「不意を討たれて」「上を下への大さわき」「おのれ、逃げ場を失ひ」
「さし」に「命」から「等」は指導を要する語句である。

文語の主なるものは「聞きて」「さし向けたり」「なれり」「入れり」「より」「あげさせたり」「取らず」「乗るもあれば」「あり」「暗し」「なし」「失ひて」「落つれば」「深き」「うつまれり」等である。
次の如き感興深きいひ表し方を指導し、文意を理會させる。

平家の軍は、上を下への大さわき

弓を取る者は矢を取らず、矢を取る者は弓を取らず。

人の馬にはおのれ乗り、おのれの馬には人が乗り、後向きに乘るもあれば、一匹の馬に二人乗るもあり。

暗さは暗し道はなし。

親も落つればその子も落ち、弟も落つれば兄も落ち、馬の上には人人の上には馬重なり重なつて、さしに深きくりから谷も平家の人馬にてうつまれり。

七 ひよどり越

教材の趣旨

前課と同様、戦記文學による文語文で、文章說話ともに前課と關聯を

持つ。

即ち本教材は、源平時代の英雄として、特にまたその數奇の運命によつて國民の同情を集め、今日の兒童にさへ最も敬愛せられる源義經の武勇を敘したものであるが、義經に關するものは既によりみかた三に於いて、牛若丸が序曲として掲げられてをり、本卷に於いては本教材以下「扇の的」「弓流し」によつて、この國民的英雄の面目をいよいよ躍如たらしめるのである。

ひよどり越の坂落しは、人跡稀な山路を迂回して、敵の背後を奇襲し、常人の企て難い武略を發揮したもので、大東亞戰爭に於ける帝國海軍の眞珠灣襲撃と一脈相通ずる果敢な攻撃精神の現れである。この種戦記文學を原據とした感興深き教材を讀み味はふ間に、兒童はおのづから偉大な英雄を知るとともに、國民の精髓たる尙武の氣象を深く感得するであらう。

なほ前課と相並び、文語教材を二課連續して提出したのは、興味ある

戦記の文章によつて、おのづから文語文の調子に親しませることを期したものであり、随つて前課同様、専ら朗讀を中心として取扱ひ、文語文の直觀的な理會に資し、その興味を感得せしむべきである。

文章

文章はひよどり越の坂落しを中心に、三つの段落に分つて敘せられてゐる。即ち第一段は一の谷の守りと、源氏の攻めあぐんだことを述べて、平家の守備の堅固なことを示し、義經の奇襲作戦の伏線としてある。

第二段は本教材の中心部であり、文はかなり精敘されてゐる。まづ大將義經の敵はけはしき山をたのみ、後のそなへを怠りてあらん。われ敵の後を突かん」と敵情を洞察する機智により、三千餘騎を率ゐてひよどり越に出た敘述に進み、見おろせば、いく百丈の谷は、あたかも屏風を立てたるがごとしと、ひよどり越の險峻な難路を具體化してゐる。ここは敢へて今日に於ける實跡を穿鑿することなく、飽くまで文章を

通して感じさせ、挿繪と結んでひよどり越の險路を想像させるべきである。

義經はこの難路を見て思慮深く、まづ數匹の馬を追ひ落して坂落しを試み、三匹だけ無事に起きあがつたのを見るや、果斷一決、乗手が用心するならば、馬もけがはなかるべし。いざ進め。義經を手本にせよとみづから先頭に立つて駈けくだつた。ここに果敢な義經の一軍に將たる器量の躍如たるものがある。勇將の下に弱卒なく、三千餘騎は轡を並べてどつと駈けくだる。小石まじりの砂なれば、流るるやうにすべること二町餘は、いかにも如實の表現である。

第一の難路を征服して更に第二の難路にさしかかつた。「これより下、十四五丈ばかりは、こけむしたる岩石、壁のごとくつき立ちたりはよく、その狀を具體化してゐる。さすがの關東武者も、今は先へも進まれず、後へひかんやうもなし。皆々、顔を見合はせ、ただあきれて窮地に立つた。

しかし勇士はひるまなかつた。「われらには、かかるところも平地に同じ。進めや」と佐原十郎義連は眞先かけて進んだ。それは義經の「いざ進め。義經を手本にせよ」の言に呼應するものであり、義經の氣性をさながらに受けたもので、將士一體よくこの難險を突破したことを意味する。以下三千餘騎、聲をしのばせ、馬をはげましつつ、なだれのごとくくだるさま、人わざとも思はれずは、まことに力強く、躍如たる敘述である。

源氏の三千餘騎はかうして奇襲に成功し、平家の城に火を放つた。不意を討たれた平家の狼狽敗走は自然の數であり、その簡明な敘述を以て本文の結尾とする。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字、語句等を指導し、確實に讀ませる。文語文で新しい形式も少くないが、前課と同様讀みを重んじ讀むことによつて、文語文に親しませ、次第にその調子を會得させるやうに指導する。それには文語の語句に特

に注意して範讀も懇切に示すことが大切である。讀みが進むにしたがひ一の谷の城にたてこもつてゐた平家の軍勢が源義經にひよどり越から攻め立てられて破れたことをわからせる。一の谷の城についてはその守りが堅くて源氏も攻めあぐんだことから、義經が奇襲を思ひつき、屏風のやうなけしきひよどり越から一氣に攻め落した勇ましいさまを讀み取らせ、義經の果敢な武略に感ぜさせるやうに指導する。

話すこと 文章挿畫を中心として一の谷の城の守り、義經の奇襲作戰、ひよどり越のさか落しのありさま、平家の敗戦等について話をさせる。

書くこと 新字・設替の文字を中心として指導する。「源」意「皆」はいづれも誤りやすい文字であるから、扁旁等にわけて字形筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

平家の軍勢十萬餘騎、源氏の大軍を防ぐ。

後のそなへを怠りてあらん。

山を傳ひて、ひよどり越に出づ。

岩石壁のごとくつき立ちたり。

皆々、顔を見合はせたり。

平家の城に火を放つ。

敵は不意を討たれ、船に乗りて、皆ちりちりに逃げ行きたり。

次のカナヅカヒに注意させる。

人わざとも思はれず

義經思ふやう

先へも進まれず

後へひかんやうもなし

山を傳ひて

馬を追ひ落したるに

身ふるひして立ちあがれり

注意すべき發音文字ことは等

發音

ひよどり越——ヒヨドリゴエ

軍勢——グンゼー

大軍——タイグン

後のそなへ——ウシロノソナエ

七 ひよどり越

出づ——イズ

敵の後——テキノウシロ

馬——ンマ

眞先——マツサキ

平なる——タイラナル

二町餘——ニチロヨ

岩石——ガシセキ

これより下——コレヨリシタ

進み出で——ススムイデ

後へ——ウシロエ

逃げ行き——ニゲユキ

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字

源氏 怠り 皆々

讀替

源氏 防ぐ 出づ 岩石

語句語法

「軍勢、城をかまへ」攻めあぐみ「山をたのみ、ひそかに」屏風「身ぶるひ、いざ進め」岩石「平地」
「聲をしのばせ」馬を「はげましつ」なだれ「人わざ」くだるやいなや「火を放つ」はたして「あ
わてふためき」等は指導を要する語句である。

文語の主なもの、堅ければ「攻めあぐみて」思ふやう「けはしき」怠りてあらん「われ」突か
ん「とて」出づ「あたかも」立てたるがごとし「落したるに」倒るるもあり「されど」用心するな

らば「なかるべし」手本にせよ「かけくたれば」砂なれば「二町餘にして」平なるところ「溜き

ぬ」進まれず「ひかんやうもなし」かかるところ「同じ」放つ」等である。

次の如き現在法比喻法等の修辭に注意して文意を理會させる。

ひよどり越に出づ

ころびて倒るるもあり足ををりて死ぬるもあり

三千餘騎馬を並べてかけくだる

三千餘騎も續いて進む

平家の城に火を放つ

いく百丈の谷はあたかも屏風を立てたるがごとし

小石まじりの砂なれば流るるやうにすべること二町餘

こけむじたる岩石壁のごとくつき立ちたり

われらには、かかるところも平地に同じ

聲をしのばせ馬を「はげましつ」なだれのごとくだるさま人わざとも
思はれず

現在法

比喻法

備考

連絡

よみかた三半わか丸の發展として取扱ふ。初等科國語四くりから谷と連絡がある。
初等科音楽二「ひよどり越」と連絡して取扱ふ。

八 萬壽姫

教材の趣旨

源平相剋の舞臺を背景に、優にやさしい孝女萬壽姫を點出し、卷三の「光明皇后及び本卷の母の日」とともに、専ら女子を主人公とする教材たらしめてある。

出所は「唐糸草子」で、源頼朝と木曾義仲との不和と絡んで、波瀾曲折の間に展開することの可憐な萬壽の物語は人々に深い感動を與へる。義仲は俱利伽羅篠原の合戦に大勝し、勢に乗じて壽永二年七月入洛したが、頼朝との間に不和を生じ、範頼・義經の軍と戦つて破れ、翌三年正月粟

津原で戦死した。唐糸草子によれば、頼朝は壽永二年十月のころ義仲を討たうとし、この間唐糸は頼朝をねらひ、陰謀が露顯して捕はれ、石牢に投ぜられる。萬壽は母が捕はれた噂を聞いて信濃から乳母とともに、はるばる鎌倉に下り、翌三年三月二十日花見の夜、母と半屋で對面し、以後絶えず母を訪ねて孝養する。翌文治元年正月、頼朝は獅子の間の疊の縁に小松が根をさして生えた瑞兆を賀するため、鶴岡の八幡宮で舞を奉納する。萬壽は舞姫となつて頼朝から嘉賞され、身の上を明かして、母の身代りになることを願ひ出る。頼朝は遂にその孝心に感じ、唐糸の罪を許し、數々の褒美を與へて木曾へ還してやつたことで物語は終つてゐる。

以上の梗概で明らかなやうに、この物語に一貫するものは萬壽の母を思ふ深い孝心であり、しかも美しい舞の催を機縁としてその孝心がとどき、母を助けて木曾へ歸つたといふ色香めてたき美談である。この情味豊かな教材を讀ませて、一般兒童、わけても女兒にその美しい心

情を読み味ははせ、孝心にめざめしめようとするものである。

文章

この文章で第一に考へておかなければならないのは、構想が劇的に展開してゐることである。唐糸草子の順序によらず、まづ舞奉納のことから書き起し、最も精彩のある場面によつて萬壽を描き出してゐる。次に頼朝が萬壽を嘉賞する場面で、萬壽が母の身代りに立ちたいと申し出たことから、これを聞くと、頼朝の顔色はさつと變りました。變るも道理、これには深い事情があつたのですと、そこで更に敘述を變へて唐糸が石の牢に入れられるまでの身の上を明らかにしてゐる。この噂を聞いた萬壽は母を救ひたい一念で鎌倉に下り、私かに母と對面して慰めた優しい行爲を詳細に描寫し、最後に頼朝は萬壽の孝心に感動して唐糸の罪を許し、褒美を與へて歸らせることになつてゐる。この構想によつて敘述の順序が變化されてゐる點を注意して指導し、説話の序列を全體的に把握させることが大切である。

困つてゐるところへ、御殿に仕へてゐる萬壽がよからうと申し出た者がありました——舞姫十二人のうち十一人まできまつて後の一人が見當らない。そこへ現れたのが萬壽である。頼朝が一見して舞姫に定めたのも道理、顔も姿も端麗で、しかも年齒やうやく十三の少女、舞姫の中でいちばんの年少であつたのである。ここに萬壽の舞姫としてもてはやされる伏線があることに注意すべきである。

奉納の當日は、頼朝を始め舞見物の人々が、何千人ともなく集りました——かうした晴れの舞臺に十二番の舞が、次々と演ぜられたことを敘じ、そのうちで、特に人のほめたのは、五番めの舞でした。この時には、頼朝もおもしろくなつて、いつしよに舞ひましたと、その舞のすぐれて上手であつたことを具體化して兒童の興味を、その舞姫に集中させ、さて、その五番めの舞を舞つたのが、あの萬壽姫であつたのですと、前節の年若な萬壽に照應させてゐる。敘述の興味は十分である。

「さてさて、このたびの舞は、日本一のてきてあつた——頼朝が思はず

舞臺に現れ、萬壽とともに舞つたことにより、如何にその感興が深かつたかが伺はれるが、更に「さてさて」といひ、「日本一のでき」と褒め讃へて、その心を具體的に表してゐる。因みに「日本」は古來しばしば用ひられた最上級の褒めことばである。しかも、お前の國はどこ、また親の名は何と申す。はうびは、望みにまかせて取らせるであらうのことばに至つては萬壽に取つて無上の光榮であるが、萬壽は恐る恐る「唐糸の身代りに立ちたいと申し出る。この萬壽のやうすやことばと、これを聞いた頼朝が顔色をさつと變へたことによつて、深い事情のあることを反面に表し、唐糸にからまる事情を焦點として、兒童の興味をひくやうにしてあることに注意すべきである。」

それより一年ばかり前のこととす——物語は舞奉納の日より一年前にさかのぼる。ここで構想上敘述が年代順になつてゐないことを知らしめる必要がある。さうしてこの段落には、義仲の家來手塚光盛の娘が頼朝に仕へてゐたこと、この娘が頼朝の義仲を攻めようとする

のを悟つて義仲のところへ知らせたこと、義仲からは頼朝の命を取れと重代の寶刀を送つて來たこと、娘は常に頼朝をねらつたが、却つて刀を見つけられ、見覚えのある刀に頼朝の疑ひは深くなり、終に石の牢に入れられたことを敘し、唐糸といふのは、この女のこととしたと、ここにも萬壽を出すと同様な筆致を用ひて唐糸の名を最後に明かしてゐる。

唐糸には、その時十二になる娘がありました——以下は萬壽の孝心の敘述である。孝心はこの物語に一貫してゐるが、これを重點的にあげると

母のたよりを聞いて、一月餘りも歩き續けて鎌倉に着いたこと

鶴岡の八幡宮へ參つて母の助命を祈つたこと

母の噂をする者がないので、もうこの世の人ではないのかと落膽したこと

母の牢屋を見出し、對面したこと

その後石の牢屋に母をたづねて慰めたこと等であり、母と石の牢屋で對面する場面は、本文の頂點ともいふべきところで、敘述は最も具體的であり、感動的である。

「ああ、母はもうこの世の人ではないのかと、力を落してゐた萬壽は、ある日御殿の裏へ出て眺めてゐると、小さな門があつたが、たまたま女中に注意せられたのが却つて懐しい母の居所を知る奇縁となつた。これを聞いた萬壽のおどろきと喜びは、どんなであつたでせう」とまづ萬壽の心持を敘し、唐糸と對面する花見の夜の場面に筆を進めてゐる。今日はお花見で御殿は人少なであつたこと、萬壽は乳母をつれてひそかに石牢を尋ねたこと、前段に照應して、八幡様のお引合はせか門の戸が細めにあいてゐたこと、乳母を門のわきに立たせて中へはいつたと、月の光にすかしてあちらこちらと探して、松林の中に石牢を見出したことなど要を得た敘述である。

萬壽が駆け寄つて、扉に手をかけると、だれかと牢の中からは懐しい聲が聞える。聲だけ寫して敘述を生かしてゐる妙味も味はふべきである。

「おなつかしや、母上様。木曾の萬壽でございます。」

「なに、萬壽。木曾の萬壽か。」

萬壽のことばには母をなつかしむ子の眞心、唐糸のことばには驚喜する母の情愛がよく現れ、格子を隔てて手を取り合つて泣く恩愛の絆の強さを想像させてゐる。やがて乳母まで呼んで、三人で一夜を泣き明かしたのも無理はない。

「親を思ふ孝行の心には、頼朝も感心して以下は本文の結末である。牢屋から唐糸が頼朝の面前で萬壽と對面を許されたことは夢に夢見る心地もしたことであらう。たがひに取り絶つて嬉し泣きに泣いたのは、前年石の牢の前で泣き明かしたのと對照され、頼朝始め居あはせた人々が思はず泣いたのも自然で、何れも世にも稀な孝女に對する感激に外ならない。」

萬壽の心はさることながら、常に影の如く萬壽に付き添ひ、その孝養を全うさせた乳母も感心すべき女であり、本文中しばしば現れる「うば」のところにそのまごころを読み取らせるべきである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みが進むにしたがひ、萬壽の親孝行な感心な話が書いてあることをわからせる。文章は時間の順序に構想されてゐないから、その順序が變更されてある點に注意させて讀ませる。それには各場面に注意させるとともに、それより一年ばかり前のことです。唐系には、その時十二になる娘がありまじた。さうして、その明くる年の春、舞姫に出ることになつたのでした等の文によつて場面の變化されてあることを知らしめる。かうして舞奉納の場面から、頼朝が萬壽を呼び出して褒美を取らせる場面に展開するのであるが、その間に唐系が頼朝をねらひ、却つて石牢に入れられたことや、これを開いた萬壽が鎌倉へ下り、唐系を石の牢にたづねて孝養を盡す物語が挿入されてあることを讀み取らせ、萬壽の優にやさしい孝心に感激させるやうに指導する。

話すこと 文章挿畫を中心として萬壽の孝心について話合をさせる。それには、唐系が頼朝をねらつて捕らはれたことや、萬壽がそれを聞いて鎌倉へ下り、ひそかに石の牢に母をたづねたことや、舞奉納の日のできばえや、あくる日の頼朝の感賞等を話題とする。

書くこと 新字讀替の文字を中心として指導する。「舞」「納」「情」「養」等は複雑な文字であるから、扁旁等にわけて字形筆順に注意し、確實に書かせる。次の如き文によつて書取を練習させる。

舞を奉納することになりました。

顔も姿も美しく上品に見えました。

はうびは、望みにまかせて取らせるであらう。

變るも道理、これには深い事情があつたのです。

晝夜は、だ身はなさず持つてゐました。

次のカナヅカヒに注意させる。

（當年やうやく十三
やうやく鎌倉に着きました）

御殿に仕へてゐる萬壽
頼朝に仕へてゐました
お仕へしたいと願ひ出ました
わけをたづねますと
石のらうをたづねました
石のらうをたづねて

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

いちばん(副詞)——イチバン いちばん(數詞)——イチバン
き(氣)を——キオ き(木)を——キオ

訛音方言

知らせて——「シラシテ」といはいやうに注意する。
居あはせた——「イヤワセタ」といはいやうに注意する。

發音

一人——ヒトリ
呼び出し——ヨビダシ

一目——ヒトメ
舞見物——マイケンブツ

日本一——ニッポンイチ

何と申す——ナントモース

立ちたうございます——タチトゴザイマス

大切な刀——タイセツナカタ

晝夜——チュウヤ

二人——フタリ

一月餘り——ヒトツキアマリ

十日——トウカ

二十日——ハツカ

門の中——モンノナカ

何の氣——ナンノキ

今日——キョー

その夜——ソノヨ

松林の中——マツバヤシノナカ

ことばの中または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 舞(マイ) 奉納(ノ) 事情(ジョー)

讀替 上品 望み 晝(チュウ)夜

語句語法

奉納「上品」舞姫「當年」年若「當日」舞見物の人々「日本一」のでき「變るも道理」事情「かへつて」は「だ身はなさず」見おぼえ「風のたより」かげひなたなく「うはさ」召使「人すくな」お引合はせ「をりをり」もらひ泣き等は指導を要する語句である。
次の文例により「始め」の用法を指導する。

頼朝を始め舞見物の人々が何千人ともなく集りました。

頼朝を始め居あはせた者に、だれ一人もらひ泣きをしない者はありませんでした。

次の如き敬讓のことはに注意してその用法を指導する。

親の名は何と申す。

と申しました。

らうの中から申しました。

別に望みはございませんが、唐糸の身代りに立ちたうございます。

木曾の萬壽でございます。

次の如きいひ表し方を指導し、文意を理會させる。

顔色はさつと變りました。變るも道理、これには深い事情があつたのです。

二人は野を過ぎ山を越え、なれない道を一月餘りも歩き續けて、やうやく鎌倉に着きました。

備考

連絡

初等科國語四くりから谷と連絡がある。

(以上 十一月)

九 林の中

教材の趣旨

晩秋初冬の風物を敘した詩である。しかも單なる客觀的敘景でなく、著しく主觀が織り込んであり、その主觀感情もかなり高いものであるばかりでなく、始めて出る文語詩としても注意すべきものがある。ただし、文語詩といつても既出の「船は帆船よ」や「觀艦式」などが殆んど文語的であり、それらを階梯とし、「くりから谷」「ひより越」等の文語文を経てここに至るのであるから、この詩が文語として特に難解だと考へる必要はないであらう。

それよりも、かうした自然のややうらさびた中から詩興を感じ、靜寂な自然に生命を感じることに程度の高さがある。しかし、元來この詩は小學國語讀本卷六にあつたものを修正したもので、既に第三學年の

児童にある程度理會されたものであつてみれば、今これを第四學年の教材とし、更に深い感興と理會を得しめることは、決して無理ではないといへよう。

自然を主體的に動的に捉らへる態度から、かうした教材を通して靜的な相にも興味を覚えさせる——そこに兒童心身の發達に即應するものがあるばかりでなく、元來靜寂な自然に接して主觀を高めて行くのがわが傳統の自然觀である。かうした日本的な自然の見方に兒童を導くことは、國土愛の精神に培ひ、大國民たる資源を育てて行く上にも、極めて大切なことである。

文章

五行三聯の詩である。各聯は五七を基調とし、末句を五五で結んだ形式で、全體としてこの韻律を持つ感情は、五七の落ちつきであり、内容の靜寂感としつくり調和してゐる。

「葉は落ちて明かるきこずゑは、茂つてゐた葉が皆ふるひ落されて、梢

がばつと明かるいといふのであり、澄んだ秋らしい感じもそこに出てゐる。その明かるい林の小徑に、枯れた落葉を踏んで、一足ごとにかさこそと鳴る音に、興味を覚えるのは、既に詩の世界が始つたのである。

おのづから何物かを求めるやうな心が、内に動いてゐる。「かさこそは「かさかさ」と大體同じであるが、いつそう細やかであり、上品であり、やや古いことばでもある。

かさこそと鳴る落葉に興を感じ、何物をかあこがれる心を持ちながら林の中を奥へ奥へと行く。ふと立ち止ると、林はもとの靜けさに返る。そこで今度は意識的にこの靜けさに聞き入らうとする。すると、この「靜けさ」を破るやうに、「ちち、ちち」とかすかな小鳥の聲。それは靜中の動であり、靜の更に靜なるものであり、生命ある靜である。

耳から目へ感觸が移る。「見あぐれば高きこずゑ——そのこずゑの小枝小枝はかすかにふるへてゐる。晴れたる空に、細きこと針のごとくは逆敘で、瑠璃の如く澄んだ晩秋の空に、針のやうに細く小枝小枝が

ふるへてゐるのである。高く大空に聳え立つ大木——例へばけやきなど——の梢の、この繊細な感覚は「ちち、ちち」と微かに聞える小鳥の聲と通ふ感覚であつて、そこにも静中の動、生命ある静が感じられる。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、韻律を生かして確實に讀ませる。最初の文語詩で七七を基調とし、詩的情趣に富んだ詩であるから、靜かにおちついた態度で讀ませるやうにし、讀みを繰り返してその間に文語詩のもつ妙味を會得させるやうにする。かうして林の中の靜かな氣分を感得させ、林の中で落葉をふむ足音や、林の奥から聞える小鳥の聲や、晴れた空に高くつき立つ梢などにより、その靜かな氣分を一そう具象的に味ははせるやうに指導する。

讀みを反復し、自然に暗誦に導く。
話すこと 林の中へ遊びに行つた體驗のある兒童には、その時の感じを話させ、詩の理會に資する。詩については、

「詩をうたつてゐる人は、どんなところを通つてゐますか」
「何の音が聞えますか」

「かさこそと鳴る落葉をふむ音が聞えることにより、どういふことがわかりますか」

「林の奥から何が聞えますか」

「小鳥の聲が聞えることによつて、どういふことがわかりますか」

「小枝小枝がどんなに見えますか」

「空はどんなになつてゐますか」

「この詩は、林の中の何に感じて歌つたのでせう」

書くこと 暗誦を利用して全文を書寫させる。その際、次のカナヅカヒに注意させる。

葉は落ちて 明かるきこずゑ

小道を行けば 聞きいる

鳴くはいづこ 小枝小枝は

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

は(塞)は——ハワ	は(齒)は——ハワ
なる(鳴)——ナル	なる(感)——ナル

發音

林の中——ハヤシノナカ

小道を行けば——コミチオユケバ

一足——ヒトアシ

ふるふ——フルウ

ことばの中または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

語句語法

「一足ごとに」たたくみて「しばし聞きたい」鳴くはいつこ「見あげれば」「かすかにふるふ」「細きこと針のごとく」等は指導を要する語句である。

「かさこそ」「ちちちとの擬聲、鳴る落葉、鳥の聲の如き名詞止め、針のごとく」の中止形も朗讀させることにより、その表現のおもむきを味ははせるやうにする。

備考

連絡

初等科理科一「森の中」と連絡して取扱ふ

十 グライダー「日本號」

教材の趣旨

工作的遊戯を主題とする教材として、よみかた三に「うさぎとたぬき」があり、よみかた四に「いうびん」がある。その工作に理科的な面をもつものとしてよみかた三の「らくかさん」があり、初等科國語二の「ぼくの望遠鏡」がある。

本教材はこれらのものを受けて、これをいつそう發展させたものである。即ち全級兒童が、工作の時間に、一齊にグライダーの製作にとりかかり、正しい計算と細心の注意をもつて組み立て、苦心を重ねつつ、漸くその完成を見る。飛翔の結果、意外にも優秀であることに驚き、喜び、感激して「日本號」と命名するのは、國語教材の感動面として大切であり、兒童に興味と關心を深からしめるものである。

このやうにグライダーの製作過程を表現し、これを通じて飛行機の性能や構造等について關心を深め、航空に關する興味を示唆し、防空思想に培はうとするのが本教材の趣旨である。

文章

全文は、四つの部分から成つてゐる。

第一は、グライダーを製作するにあたり、先生から注意があり、設計圖を書く場面であり、第二は、機體の組立にとりかかり、翼を作り、グライダーの骨組ができあがるまでの苦心を書き、第三は、最後の仕上げとして、翼の骨に紙を張るところで、ここは、作業中最もむづかしいことであるが、それだけに完成の喜びも深い。第四は、グライダーを飛ばす光景の敘述である。運動場のがけの上に整列し、用意どんで飛翔させるのであるが、私の作つたものがいちばん遠くまで飛んで行つて、最高の記録をのこした。みんなも、萬歳を叫んで喜ぶ感激の場面を敘して、全文の結尾としてある。

本教材は、ただ單に客觀的に物を見、説明的に工作順序を記述するといつた文でなく、常に兒童の心情に即して主體的に表現し、いたるところに子どもらしい感情がにじみ出てゐることに注意すべきで、次の白い紙をはつた、いかにも飛びさうなかつかうをしてゐる

線を引きながらも、私の心に浮かぶものは、青い空に飛んでゐる眞白なグライダーであつた

いよいよ製作にとりかかつた。みんなは、一生けんめいだ。話などをしてゐるものは一人もゐない

それを持ちあげて、自分ながら見とれてゐると

できるだけおちついて、氣をつけながら、少しづつはつて行つた

少しぬれてゐるけれども、できあがつたのだ。私は、そつと翼をなでてみた。何ともいへない、かはいい氣持がして来る

めいめいのグライダーを机の上に置いて、おべんたうをたべた

私のがまだ飛んで行く。涙が出て來た

などその點最も注意すべきところである。いかに科學的な素材を取扱ひ、これを説明的に記述するにしても、國語教材に於いては、つねに思考感動を生かし、豊かな國民的感情を育てることを期するのである。

取扱の要點

読むこと グライダーの製作の順序を書いた文であるから、(一)(二)(三)(四)の順序に讀ませて行き、製作の興味を次第に感じさせるやうにする。文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。(一)ではグライダーを作る喜びを感じさせながら部分部分の名稱と、正確に作りあげるために設計圖を書き出したことを讀み取らせる。(二)と(三)ではグライダーを正確におちついて製作したことを讀み取らせ、(四)ではそのグライダーを實際に飛ばしてこの文を書いた子どものグライダーが一等すぐれて飛び「日本號」と名づけたことを讀み取らせる。「日本號」がかく優秀な性能をあらはすやうになつたことは、この子どもの製作に對する熱意と、正確な設計綿密な作り方等にあることを表現と結びつけて指導することが大切である。話すこと 文章挿畫を中心として、主としてグライダーの製作の順序や注意等について話をさせる。

副詞「決して」を用ひて、話すことを練習させる。

次の如き敬語を下記の敬語に變へさせて、話すことを練習させる。

いはれたので

おつしやつたので

いはれたのは

おつしやつたのは

いはれた

おつしやいました

書くこと 新字讀替の文字を中心として指導する。「翼」「垂」「確」「設」「製」等は複雑な文字であるから、肩旁等にわけて字形筆順に注意し、確實に書かせる。次の如き文によつて書取を練習させる。

胴體の先端に鼻木をとりつけた。

翼には主翼水平尾翼垂直尾翼などがある。

正確に作りあげるといふ注意が大切である。

私たちは、第一に設計圖をかくことになつた。

機體の材料をいただいて、製作にとりかかった。

これは重さに關係がある。

翼を作るために、ひこを熱くして曲げる。

設計圖に當てて見て、形を整へる。

ひこを折つてしまつた者もあるだ。

見るまに飛んでゐる数は少くなつた。

次のカナヅカヒに注意させる。

先生がいはれたので

といはれたのには、おどろいた

大切だといはれた

いかにも飛びさうなかつかうをしてゐる

うまく飛ばないさうだ

さうはいきません

よく飛びさうです

飛ばさうかな

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

な名をつける付——ナオツケル

な名をつける遣——ナオツケル

あつく慈——アツク

あつく厚——アツク

訛音方言

むづかしい——ムツカシイといはないやうに注意する。

注意——「チーイ」の訛を矯正する。

できない——デケナイといはないやうに注意する。

先生——「シェンシェー」の訛を矯正する。

来られ——「キラレ」といはないやうに注意する。

指——「イビ」の訛を矯正する。

けれども——「ケードモ」といはないやうに注意する。

まつ直に——「マツツグニ」といはないやうに注意する。

發音

日本號——ニッポンゴ

今日——キョー

出して——グシテ

行く——イク

鼻本——ハナギ

眞白——マッシロ

一人——ヒトリ

糸の數——イトノカズ

こしこし——ゴシゴシ

骨組——ホネグミ

来られて——コラレテ

何とも——ナントモ

その中を——ソノナカオ

ことばの中、または下に來る、ガ行鼻濁音に注意する。

文字

十 グライデー「日本號」

新字 胴^ド下^ゲ段^{ダン} 主翼^{シュウよく} 垂^{ツル}ス^スイ^イ直^{チキ}尾^ビ翼^{よく} 正^{セイ}確^{コク} 設^{セツ}計^{ケイ}圖^ト 製^{セイ}ケ^ケ作^{サク} 關^ケ係^{ケイ}ケ^ケ

折^オつて

讀替

先^{セン}端^{タン} 主^{シュウ}翼^{よく} 水^{スイ}平^{ヘイ}尾^ビ翼^{よく} 垂^{ツル}直^{チキ}尾^ビ翼^{よく} 正^{セイ}セ^セ確^{コク} 設^{セツ}計^{ケイ}ケ^ケ圖^ト 翼^{よく} 熟^{ジュク}く

整^{セイ}へる 少^{ショウ}く

語句語法

〔分度器〕部分々々〔胴體〕先^{セン}端^{タン}〔鼻本〕主^{シュウ}翼^{よく}〔水^{スイ}平^{ヘイ}尾^ビ翼^{よく}〕垂^{ツル}直^{チキ}尾^ビ翼^{よく}〔くるひ〕正^{セイ}確^{コク}〔寸法〕い^いか^かげ^げん〔設計圖〕機^キ體^{タイ}〔材^{サイ}料^{リョウ}〕製^{セイ}作^{サク}〔關^ケ係^{ケイ}〕ひ^ひこ^こ〔骨^{ボネ}組^{グミ}〕見^ミと^とれ^れて^て〔重^{オモ}心^{シン}〕水^{スイ}平^{ヘイ}〔グ^グラ^ライ^イダ^ダー^ー日^{ニチ}より〕拍^{ハク}手^テ

〔應^{オウ}援^{エン}〕胸^{ムネ}が^がわ^わく^くわ^わく^くした^{した}〔風^{カゼ}に〕あ^あふ^ふら^られ^れて^て〔等^{トウ}は〕指^{サシ}導^{ドウ}を^を要^{ヨウ}す^する^る語^ゴ句^クで^であ^ある^る。

次^{ツギ}の^の文^{モン}例^{レイ}に^によ^より^り副^{ソコ}詞^ジ決^{ケツ}して^{して}は^は否^{イナ}定^{テイ}の^のこ^こと^とば^ばで^で結^{ムス}ぶ^ぶこ^こと^とを^を指^{サシ}導^{ドウ}し^し用^{ヨウ}法^{ホフ}に^にな^なれ^れさ^させ^せる^る。

決^{ケツ}して^{して}う^うま^まく^く飛^{トビ}ば^ばな^ない^いさ^さう^うだ^だ。

決^{ケツ}して^{して}飛^{トビ}び^びま^ませ^せん^ん。

次^{ツギ}の^の如^{ごと}き^{ごと}敬^{けい}語^ごに^に注^{ちゅう}意^いして^{して}指^{サシ}導^{ドウ}し^し、そ^{その}の^の用^{ヨウ}法^{ホフ}に^にな^なれ^れさ^させ^せる^る。

先^{セン}生^{セイ}が^がい^いは^はれ^れた^たの^ので^で。

と^とい^いは^はれ^れた^たの^のに^には^は、お^おど^どろ^ろい^いた^た。

注^{ちゅう}意^いが^が大^{だい}切^{けつ}だ^だと^とい^いは^はれ^れた^た。

次^{ツギ}の^の如^{ごと}き^{ごと}文^{モン}例^{レイ}に^によ^よつ^つて^て、列^{れつ}舉^{きよ}して^{して}い^いふ^ふい^いひ^ひ表^{ひょう}し^し方^{ほう}を^を指^{サシ}導^{ドウ}す^する^る。

附^つ隨^{ずい}そ^{その}の^の先^{せん}端^{たん}に^にと^とり^りつ^つけ^ける^る鼻^び本^{ほん}い^いち^ちば^ばん^ん大^{だい}き^きな^な主^{しゅ}翼^{よく}、そ^{その}れ^れか^から^ら水^{すい}平^{へい}尾^び翼^{よく}、垂^{すい}直^{ちき}尾^び翼^{よく}な^など^どで^であ^ある^る。

ち^ちう^う返^{へん}り^りを^をし^して^て落^おち^ちる^るも^もの^の、ま^まつ^つさ^さか^かさ^さま^まに^に落^おち^ちる^るも^もの^の、横^{よこ}へ^へす^すべ^べつ^つて^て行^いく^くも^もの^の、見^みる^るま^まに^に、

飛^とん^んで^でる^る數^{かず}は^は少^{すく}く^くな^なつ^つて^て、た^たつ^つた^た二^に機^きに^にな^なつ^つた^た。

次^{ツギ}の^の如^{ごと}き^{ごと}修^{しゆ}辭^じ的^{てき}な^ない^いひ^ひ表^{ひょう}し^し方^{ほう}を^を指^{サシ}導^{ドウ}し^し、文^{モン}意^いを^を理^り會^{かい}さ^させ^せる^る。

飛^とぶ^ぶ飛^とぶ^ぶ。二^に十^{じゅう}メ^メー^ートル^{トル}も^も一^{いち}氣^きに^に飛^とん^んで^で行^いつ^つた^た。

白^{しろ}い^い花^{はな}ひ^ひら^らを^をま^まき^き散^{さん}ら^らした^{した}や^やう^うで^であ^あつ^つた^た。

そ^{その}の^の中^{ちゅう}を^を、私^{わたし}の^のグ^グラ^ライ^イダ^ダー^ーは^は眞^{まこと}直^{ちき}に^に飛^とん^んで^で行^いく^く。

み^みん^んな^なが^が、わ^わあ^あつ^つ。と^とい^いつ^つて^て應^{オウ}援^{エン}を^をす^する^る。

二^に機^きが^が並^{なら}ん^んで^で行^いく^くの^のを^を見^みて^てゐ^ゐる^ると^と、胸^{むね}が^がわ^わく^くわ^わく^くし^{した}た^た。

備考

連絡

よ^よみ^みか^かた^た三^{さん}、ら^らく^くか^かさん^{さん}、同^{どう}四^し、た^たこ^こあ^あげ^げと^と連^{れん}絡^{らく}が^があ^ある^る。

初^{しゅ}等^{とう}科^か音^{おん}樂^{がく}ニ^ニ、グ^グラ^ライ^イダ^ダー^ーと^と連^{れん}絡^{らく}し^{して}取^と扱^{さく}ぶ^ぶ。

初^{しゅ}等^{とう}科^か工^{こう}作^{さく}ニ^ニ、グ^グラ^ライ^イダ^ダー^ーと^と連^{れん}絡^{らく}し^{して}取^と扱^{さく}ぶ^ぶ。

十一 大演習

教材の趣旨

兵隊さんが隊伍を整へて街頭を行進する場合にも、小銃や機關銃を撃ち合ふ演習の場合にも、児童は兵隊さんの勇ましさに、心から感激する。ましてそれが、大元帥陛下を目のあたりに拜し奉る上に、大すきな兵隊さんが自分の家に宿泊したり、直接湯茶の接待ができたりする特別大演習の場合には、この感激はいよいよ昂揚する。このやうな児童の心は、戦時下特別大演習を御取止めになつてゐるとはいへ、いささかも變ることはないであらう。一度、大演習拜觀の榮をになうた児童のその時の印象は、一生を通じて忘れがたいものとなる。このやうな體驗を児童にさせることは大切なことで、今日その體驗を得る機會に恵まれない児童には、せめて本教材を通してでも、その感動を児童に體得させる必要がある。

そもそも陸軍特別大演習は、海軍のそれとともに、憲法並びに陸海軍軍人に賜はつた勅諭に於いて明示された統帥權確立の意義を明らかにしたまふ御事で、畏くも大元帥陛下親しく三軍を御統監御訓練あそばすのである。その際、まことに畏れおほいことであるが、陛下には、あるひは深夜軍司令官を召されて、戦況を御下問あらせられたり、未明から霜深き演習地へ統監部を進めさせたまふこともあつて、親しく軍隊と勞苦をともにしたまふのである。

このやうに、陛下は直接軍隊を御統監あそばされる一方、併せて民情を親しくみそなはせられ、國民にあまねく聖恩に浴する機會をお與へになるのである。かくして軍官民一體となつて、陛下に赤誠を捧げ奉る國民的感動は、民草の中に湧然と起るのである。

この國民的な感激を、児童の生活に即して書き表した本教材を通して、めいめいの心に、深く刻み込まうとするのが本教材の趣旨である。

文章

本教材は、三つの部分から成り立つてゐる。(一)は、大演習拜觀の前日、軍隊が自分の町を通過し目的地向かふのを、町の人たちといつしよに迎へる場合で、(二)へ發展する序をなしてゐる。(二)は、本教材の中軸をなすもので、大元帥陛下が、皇軍を親しく御統監あそばされる特別大演習の第一の意義と、民草が聖恩に浴し、御英姿を拜して感泣する第二の意義とが、遺憾なく表現されてゐる。(三)は、兵隊さんが自分の家に泊り、兵隊さんと親しく語り、翌朝これを見送る場面である。このやうに國民的な至誠をもつて軍民が一致し、その究極に畏くも大元帥陛下がおはします。このやうな上御一人を中心とし奉る美しい一致があつてこそ、皇軍はいよいよ精銳であり、國民としての統後の護りはますます堅いことが書き表されてゐる。

さて、(一)に於いては、まづ「ばかばかと馬のひづめの音がして來たと思ふと、騎兵の一隊が、勇ましく私たちの前を通り過ぎました」と書き出し、

「馬のひづめの音や、騎兵の一隊の通過などによつて、大演習地の雰囲気」を端的に表すとともに、やがて、また、ごうごうとすさまじい音をたて、たくさんの戦車が「來」續いて、歩兵が近づいて來ることの前ぶれとしてゐる。

このやうな演習地の町の湯茶接待所を中心として、「私、おかあさん」「在郷軍人」「婦人會や女子青年團の人々」が、兵隊さんたちをいたはつて、湯茶の接待をする有様が、そのまま書き表されてゐる。隊長が「二十分開きうけい」と、號令を掛け、兵隊さんたちが、「やれうれしやとばかり、私たちの前へ押しかけて來たことの描寫には、その場の状況を髣髴躍如たらしめるものがある。「ごくらうさま。おつかれてせう」と、いたはりながら麥湯をついであげる人々、「この水筒にも入れてください」「これにも」「これにも」と、いひながら、水筒をさし出す兵隊さんとの間には、無言の愛情が交流し、「とうとう、夜の十一時ごろまで働きつづけたところにも誠意がこもつてゐる。」

(二)はいよいよ大演習拜觀の當日である。先生につれられて拜觀に出かけると、早くも空には飛行機が勇ましく飛び、あたりをふるはすやうな大砲の音がする。「そのたびに、早く飛んで行つて、見たいやうな氣がしたのば、いかにも子どもらしい心持である。」

大演習拜觀の場所は、寒い北風が吹きまくる野原で、その寒さは、たんの水たまりには、うすい氷さへ張り、拜觀人は、皆外たうのえりに、首をうづめ、「たき火にあたつてゐる人もある程である。衆人注視の野外統監部が、ここからは遠く望まれる。眼前に展開されてゐる大演習の様子は、素人目にはよくわからない。ただどこかで時々大砲の音が聞え、木の小枝や、わらをからだにつけて、擬装した歩兵が、上手のかげをかけて行き、騎兵が勇ましく土を蹴つて走つて行くのが眺められるのであるが、實は、かうした間にも、戦機は刻一刻と熟して行つてゐるのである。

やがて、野外統監部へ、天皇旗をお進めになつて、御統監の大元帥陛下

がお出ましになりました——未明からお待ち申しあげてゐた大元帥陛下はいよいよ野外統監部へお出ましになつたのである。はつとして感激にふるへ、思はずうやうやしく最敬禮をし、やをら頭をあげて仰ぎ見ると、野外統監部は、風當りの強い高地であるのに、陛下は外たうをも召されず、熱心に戦況をごらんになつていらせられるのである。その尊いありがたい御姿を拜した時には、何ともいへない感じがして、目が涙でいつぱいになつたのである。尊容を拜し奉つた民草の赤誠が、何とはなしに自然にほとばしり出たこの箇所は、本文章の頂點をなす部分である。ふとわれにかへり、あたりに目をやれば、今まで外套を着てゐた人もそれをぬぎ、焚火にあたつてゐた人も焚火を消して、威儀を正し、嚴肅な面持ちで野外統監部の彼方を遙かに拜してゐるのである。この緊張した(二)の場面から一轉して(三)に移ると、今日は、兵隊さんが、私の家にもとまるといふうれしいうちとけた情景が點出されてゐる。「急いで學校から歸つてみると、兵隊さんは來てゐた。兵器の手入れ

をすまし、靴下を洗つたり、靴をみがいたりしてゐる兵隊さんを、めづらしさうに傍に立つて見てゐる。私の姿が、この文章を通して想像される。「お湯からあがつて、『生き返つたやうだ。』といつてゐる兵隊さんは、(一)の『ほこりと汗で、眞黒になつた兵隊さん』と、對照し、演習の勞苦を、一風呂あびてさつと洗ひ落した爽快な氣分が、端的に表されてをり、銃や劍を見せてもらつて大喜びの弟も、夕飯の支度にいそがしいおかあさんも、兵隊さんの靴下を火にあぶつて、かわかしてあげる。私も、おのおのの立場に於いて、兵隊さんへ心からなる敬愛の情をおくつてゐる。

楽しい夕食は、兵隊さんたちを中心に、一家團欒のうちにすまされたことであらう。その後で、兵隊さんから、新しい兵器について、おもしろいお話をみんなて聞き、その話に父が感心して、自分の行つてゐたところとは、すつかり變つた。進んだものだ、と感嘆の聲を發したところには、近代戰の飛躍的な進歩が側面から描かれてゐる。

翌朝、兵隊さんは未明に出發するので、一同で早く起きて、出發の支度

をしてあげたのである。おばあさんが、つかれないやうにと、焼いたすめめや氷砂糖を、餞別としたところにも、孫子を勞るやうな兵隊さんへの心づかひが感じられる。

早朝であるから、またたく星を仰ぎながら、父につれられて、町角まで見送つて行つたのである。わが家の門前で見送るのは、氣がすまないで、町角まで見送つて行くところに、兵隊さんへの親愛、感と感謝の氣持とが現れてゐる。いよいよ別れる時、みんなは、萬歳、萬歳と提燈を高く掲げて合圖をする。その親切な人々の心に答へて、兵隊さんも、萬歳、萬歳と叫びながら次第に離れて行く。兵隊さんと人々の感動は、その瞬間、焰のやうに燃えあがる。

やがて、兵隊さんたちの姿が、薄明の彼方へ消えてしまつても、その感動を胸に抱き續けて、私たちは、兵隊さんの勇ましい姿を、いつまでも見送つてゐたのである。そこにこの文章全體を締めくくる餘韻があり、文章としては一應の段落はついてゐるが、兵隊さんへの思慕の情は、

いつまでも搖曳して續いて行く。このやうに、文は終始兵隊さんと人との眞心を根柢として、その上に大演習の様相が敘述されてゐるのである。

本教材に於いて、語法上特に注意すべきことは、「おとうさんも感心して……といひました」「おばあさんは……包んであげました」といふ用ひ方がされてゐることである。即ちこれまでは、「おとうさん」「おばあさん」に對し常に敬語を用ひて書かれて來たものが、ここで始めて敬語のない客觀的な文章表現へ一步踏み入れてゐる。しかし、「父が……いつた」「祖母が……包んであげた」といふやうな純粹な客觀的表現へはまだ至つてゐないのである。

取扱の要點

讀むこと 文章は三章にわかれて、それぞれ大演習の特殊な部面を敍したものであるから、(一)(二)(三)おのおの別々に取扱ひ、然る後全體を通じて指導するがよい。文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。(一)では軍隊が續々町へ

入り込む勇壯なありさまと親切に軍隊を接待して慰問する人々の心持に感じさせるやうに指導する。(二)では早朝から開始された演習のありさまと、これを御統監になる大元帥陛下が御熱心に戦況を御覽になる大御心に感佩させるやうに指導する。(三)では民家に宿泊した兵隊を一家こぞつて接待する氣持に同感させるやうに指導する。かうして三章を通じて大演習の氣分を感得させ、國防觀念の養成に資するやうにする。

話すこと 文章挿畫を中心として湯茶接待所のやうす、大元帥陛下御統監の御模様、兵隊を泊めた一家のありさま等について話合をさせる。

書くこと 新字讀替文字略字を中心として指導する。「接」「郷」「婦」「帥」「況」「靴」等複雑な文字も少くないから、偏旁等にわけて字形、筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

湯茶接待所へ手傳ひに來たのでした。

在郷軍人や婦人會や、女子青年團の人々が並んでゐます。

北の方で銃聲が聞えました。

大演習の拜觀に出かけました。

大元帥陛下が、熱心に戦況をごらんになつていらつしやいます。
靴下を洗つたり靴をみがいたりしてゐました。

夕飯の支度をしました。

氷砂糖を紙に包んであげられました。

私も町角まで見送りしました。

「萬歳萬歳」と叫びました。

次のカナヅカヒに注意させる。

兵隊さんを迎へて

「ちやうちんをあげるのに答へて

銃聲が聞えました

いつのまにか消えてゐました

注意すべき發音文字 ことば等

訛音方言

ひづめ——シズメの訛を矯正する。

えり襟——「イェリ」の訛を矯正する。

消えて——「ケエテ」の訛を矯正する。

發音

馬——ンマ

湯茶接待所——ユチャセツタイジョ

こうこう——ゴーゴー

とび出して——トビダシテ

眞黒——マツクロ

夜の十一時——ヨルノジューイチジ

外たう——ガイトー

行く——イク

仰ぎ——アオギ

何とも——ナントモ

今日は——キョーワ

文字

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

一隊——イツクイ

手傳ひ——テツグイ

地響き——ジヒビキ

在郷軍人——ザイゴーグンジン

出される——ダサレル

夜の明けない——ヨノアケナイ

たき火——タキビ

お出まし——オデマシ

風當り——カゼアタリ

一人——ヒトリ

夕飯——ユーハン

新字 湯茶接待所 在郷軍人 婦人會 大元帥スィ、戦況キッ、靴下

讀替 湯茶接待所 在郷ゴ一軍人 銃聲(しんせう) 文度(ぶんど) 町角(まちかく)

語句語法

「大演習」湯茶接待所「すさまじい音」ものすごい地響き、きうけい「いたはり」在郷軍人婦人會「女子青年團」麥湯「水筒」銃聲「拜觀」野外統監部「一向わかりません」大元帥陛下「最敬禮」高地「外套をも召されず」戦況「夕飯の支度」等は、指導を要する語句である。

次の文例につき、られの助動詞に注意し指導上の心構とする。

私はおかあさんにつれられて、

女子の組も先生につれられて、

次の如きいひ表し方を指導し文意を理會させる。

ばかばかばかと馬のひづめの音がして來たと思ふと、

「こうこう」とすさまじい音をたてて、たくさん戦車が來ました。

私たちは、いそがしくて目がまはるやうです。

あたりをふるはすやうな大砲の音がします。

備考

連絡

ヨミカタ一「ヘイタイサン」同二「ヘイタイゴツコ」よみかた四「いさんの入營」金しくんし

やう「病院の兵たいさん」初等科國語一「いさんの愛馬」同二「軍旗」るもん袋「三勇士」同三「兵替だより」等と連絡がある。

初等科修身二「明治天皇の御徳」と連絡がある。初等科國畫二「演習」と連絡する。

十二 小さな傳令使

教材の趣旨

初等科一年の時「ハトコイコイ」と呼びかけたやさしい社頭の鳩は、本教材に於いて、戦場を飛翔して偉勳を樹てた軍鳩として登場する。

鳩は兒童に親しみの深い柔和な鳥であるが、いはゆる傳書鳩は軍鳩としての訓練を受け、一たび戦場に立てば、小さな傳令使としての使命を遂行する。この勇敢な行爲に對しての感動を、文の表現を通して兒童に感得させ、初等科國語一の「軍犬利根と關聯し、動物に對する親しみの心を深めるとともに、ひいては兒童の國防觀念に培はうとするもの

である。

文章

昭和六年十二月二十八日、錦州攻撃を行ふために、大石橋を出發した第二師團が、大石橋と錦州との中間にある盤山といふところで、優勢な敵軍と邂逅し、激戦が開始された。この戦況を直ちに大石橋の守備隊へ報告しようとしたが、電信も電話も不通となり、連絡は軍鳩によるほかはなかつた。信書管に報告書をつめて鳩の右脚につけた取扱兵は、途中の無事を念じ、空中に放つた。大空高く舞ひあがつた鳩は、一氣に大石橋の方へ飛び去つたが、途中鷹の群に襲はれたので、低空に下つて來た。そこを敵から一齊に射撃せられ、一弾は脚に、一弾は腹にあたつた。鳩は重傷に屈せず飛翔を續けたが、遂に力つきて、わが軍の駐屯する田庄臺水源地附近の樹の枝にとまつた。わが兵はこのやうすを見て、捕へようとして樹に登つて行くと、鳩はばつと翼をひろげて飛び去つた。

三十一日の夕暮、大石橋守備隊の鳩舎へ瀕死の鳩が、氣息奄々としてたどりついた。一軍曹が、駆けつけて行つて調べてみると、大石橋二二九號の軍鳩であつた。赤く血に染まつた右脚の信書管には、盤山激戦の重要な報告書がはいつてゐた。

以上は、本教材の原據となつた事實談であるが、それを教材として書き表す場合、昭和六年十二月三十一日の夕暮に、大石橋守備隊の鳩舎へ、血に染まつた一羽の鳩が、飛んで來たと、最後の場面から書き始めてゐるのは、兒童に、生き生きとした印象を與へて、讀む興味を喚起する筆法である。

信書管は血にまみれ、身には重い傷を負つて、息もたえだえてあつた――血に染まつた一羽の鳩を更に詳述したもので、この場面は本文章の終りの部分、大石橋守備隊では、さつそく信書管をとりはづして、手あつくかんごしたが、以下につながり、首尾相呼應してまとまりのある構想をなしてゐる。

錦州へ向かつたわが軍は、三十日、とつぜん敵の大軍に出あつて、はげしく戦つた——四日前に、錦州へ向けて出發したわが軍を受けて、いよいよ事件の發端から順序を追つて書き始めてゐる。十二月二十八日に大石橋を出發したわが軍は、三十日突然盤山で敵の大軍と遭遇し激戦を交へたのである。

電信も電話も、敵のためにこはされたので、通信は、ただ鳩によるほかはなかつた——激戦の結果一切の通信機關が杜絶した場合、唯一の連絡は、軍鳩による方法であつた。そこに戦場に於ける軍鳩の重要性がはつきり認められる。

通信紙をつめたアルミニウムの管を、鳩の右の足にとりつけた兵は、しばらく鳩のからだにほほをすりつけて、途中の無事を祈つた——部隊の運命を托されて飛翔しようとしてゐる軍鳩に、頬をすりつけて途中の無事を祈つた取扱兵の氣持の中には、日ごろから手鹽に掛けた鳩に對する愛情と、この重大な使命を完全に果してくれるやうにと願

ふ希望とが錯綜してゐたに違ひない。そこには、無言のうちに通ふ軍鳩と兵との心の交流もあるのである。

小さな傳令使は、胸をふるはせながら、かはいい目で空を見あげてゐた——無心な鳩にも兵の眞心は通じたものか、飛翔前の一種の武者ぶるひにも似たやうすと、これから突き切つて飛んで行かうとする大空を凝視するまなざしとが、この表現の中に感じられる。

戦の眞最中に、鳩は空高く舞ひあがつた。二三回、上空に輪をゑがいて飛んでゐたが、すぐ方向を見定めて、矢のやうに飛んで行つた——彼私の砲火が飛び交うてゐるさ中に、軍鳩は勇ましく上空へ舞ひあがつたのである。上空に輪をゑがいて飛んだのは、方向を見定める鳩の習性を寫したものであるが、主體的には地上の兵に最後の別れを惜しむ趣を見せてゐる。

寒い夕空をものともせず、南東をさして高く飛んでゐた鳩は、ふと、たかの一群を見たので、すばやく低空に移つた。すると、今度は敵軍に見

つけられて、一せい射撃を受けた——滿洲の寒々とした夕方の空を、鳩が飛んで行く。——寒さは特に鳩にとつてにがてである。鳩自身も不安であらうし、その飛翔の姿を想像する讀者もまた不安な氣持にされる。そこへ鳩にとつては強敵の鷹の群が襲撃して來たのである。あぶないと本能的に感じた鳩は、すばやく低空に身を避けた。ほつとすると、今度は低空に舞ひさがつたため、敵軍に發見されて、一齊射撃の難に遭遇した。その瞬間、一弾は鳩の左の足をうばひ、一弾は、その腹部をつらぬいたのであつた。ここに於いて、事件は緊張の極に達し、表現はその頂點に到達する。

この重い傷にも屈しないで、鳩はなほしばらく飛び續けてゐたが、とうとうたまりかねて、とある木の枝に止つた——普通の鳩であつたならば、重傷のためにあるひはそのまま落ちてしまつたかもしれない。しかし平素から訓練された勇ましい軍鳩は、死力を盡して飛び續けるのである。そこに軍鳩らしい勇ましさがある。しかし何といつても

かよわい鳩であるから、とうとうたまりかねて、とある木の枝に止つたのであつた。その場所は先にも述べたやうに、田庄臺水源地附近で、そこにみかたの兵が居あはせたのであつた。

つかまへようとして手をさしのべると、鳩はまた翼をひろげて飛びあがつた。飛び去つたあとの木の枝には、かはいさうにも、赤い血がついてゐた——いたいたしい鳩を見つけた兵が、手をさしのべてつかまへようとする、鳩は再び死力を盡して大空に舞ひあがつたのである。重傷に氣息奄々たる鳩が、傳令使としての任務を果さうとする努力には、崇高なものさへ感じられる。必死に飛び立つたあとには、赤い血がべつとりと附着してゐた。それを見た兵の氣持は、かはいさうにも、といふ短いことばの中に表されてゐる。

弱りきつたこの小さな傳令使は、その夜どこで休んだことであらう。明くる日になつて、やつと、大石橋の自分の鳩舎にたどり着いたのである——「弱りきつた」といふのは、軍鳩の狀態を表すとともに、讀む者の同

情に訴へて居り、この小さな傳令使といふ愛稱と相俟つて表現に温さが感じられる。それは更に、その夜どこで休んだことであらうにつながることによつて、一そう強められるのである。一夜を明かしたこの鳩は翌日やつとなつかしい大石橋の住み馴れた古巢におちつくことができたのである。軍鳩もそこで安堵の念を抱いたことであらうが、読む者もともにほつとし、同時に、その後の結末を追ふ心理に驅られる。大石橋守備隊では、さつそく信書管をとりはづして、手あつくかんとした。が、任務を果たして氣がゆるんだのか、鳩は、取扱兵の手にだかれたまま、つめたくなつてしまつた——軍鳩が、大石橋の鳩舎から、盤山に至り、盤山から再び大石橋へ歸り着いたやうに、この文章も、大石橋守備隊の鳩舎から始つて最後にまた同じところへ歸つて來たのである。随つて、この一節は冒頭の一節へ直接つながつてゐる。血まみれになつた信書管を、さつそくとりはづし、身には重い傷を負つて、息もたえだえの鳩を、手あつくかんとしたのであつたが、全身の力を出しきつてしまつ

たのと、任務を果たして氣がゆるんだためとであらう、鳩はやさしい取扱兵の力強い腕にしつかりかかへられたまま、かつては、胸をふるはせながら、大空を見あげたかはいい、兩眼を、永遠に閉ぢたのであつた。小さな鳥ながら、死を以て自己の任務を完遂したこの軍鳩の崇高な行爲に對しては、おのづから頭のさがるものを感じるのである。

取扱の要點

読むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みが進むにしたがひ、題目にも注意させて、鳩がだいいじな使ひを果した話を書いた文であることをわからせる。滿洲事變及び軍鳩については簡潔に豫備知識を與へて、大石橋と錦州の位置を地圖によつて明らかにし、錦州に行く途中から大石橋守備隊へ血に染まりながらたどり着いた鳩のけなげな精神と、その使命を果たした功績とに感動させるやうに指導する。

話すこと 文章挿畫を中心として、傳令使となつて使命を果たした軍鳩の感すべき點について、話をさせる。

書くこと 新字・讀替の文字を中心として、指導する。「備」「扱」「群」「務」等複雑な文字が多

いから扁旁等にわけて字形筆順を指導し、確實に書かせる。
次の如き文によつて書取を練習させる。

大石橋守備隊へ血に染まつた小さな傳令使が飛んで來た。

信書管は血にまみれ身には重い傷を負つてゐた。

方向を見定めて矢のやうに飛んで行つた。

一群のたかを見て、すばやく低空に移つた。

敵軍の一せいの射撃を受けた。

重い傷にも屈しないで翼をひろげて飛びあがつた。

重い任務を果たした。

次のカナヅカヒに注意させる。

大石橋守備隊へ知らせようとした

つかまへようとして

息もたえだえであつた

かはいいい目で空を見あげてゐた

木の枝には、かはいさうにも赤い血がついてゐた

注意すべき發音文字ことば等

訛音方言

出發——ジツバツの訛を矯正する。

血——「チ」といはいやうに注意する。

手——「テ」といはいやうに注意する。

發音

夕暮——ユウグレ

四日前——ヨツカマエ

大軍——タイゲン

夕空——ユウゾラ

ほほ——ホー

眞最中——マッサイチュー

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 守備隊 取扱アツカイ兵 見定めて 一群 屈し 任務 果して

讀替 傳令使 守シ備隊 信書管 ショ管カン 負つて 低テ空 射シ撃 腹部

語句語法

「傳令使」「守備隊」「鳩舎」「取扱兵」「信書管」「血にまみれ」「息もたえだえであつた」「とつぜん」「アル」「ミニューム」「眞最中」「方向」「見定めて」「一群」「低空」「敵軍」「一せいに」「射撃」「腹部をつらぬいた」「屈

しないで「たどり着いた」とりはづして「手あつくかんごした」任務を果たして等は指導を要する語句である。

次の如き具象のないひ表し方を指導し、文意を理會させる。

小さな傳令使は胸をふるはせながらはいはい目で空を見あげてゐた。

飛び去つたあとの木の枝には、かはいさうにも赤い血がついてゐた。

任務を果たして氣がゆるんだのか、鳩は、取扱兵の手にだかれたままつめたくなつてしまつた。

備考

連絡

初等科國語一「軍大利根」と連絡がある。初等科國語二「鳩」と連絡する。

十三 川土手

教材の趣旨

大川の土手を主題に、春夏秋冬の自然風物を敘し、特に四季に於ける

自然の特色をあざやかに捉らへた韻文である。しかもその自然はどこまでも兒童の生活に即して捉らへられ、兒童の眼に映ずる姿に於いて表されてゐるところに、この詩にみなぎる童心があり、兒童の心に直接響くものがある。かうした詩の感動を通じて四季の特色を感得させ、自然に對する鑑賞に資するとともに、われらが生を受けた國土郷土に對する感情を深めさせて行くべきである。

文章

川土手の四季を表した七五調の韻文で、いはば四季の歌であるが、しかしその四季が單に羅列されてゐるのでなく、兒童の生活によつて展開し、統一的に表されてゐるところに生きた作品としての價值がある。即ちこの詩は冬を眼前に見つめながら、春夏秋冬の三季を思ひ出として敘してをり、隨つて嚴密にいへば、この詩は四季の歌でなく冬の季に立つた詩である。

對象となつてゐる川は、平野の田園を悠々と流れ、川船も通ずる大川

である。さうしてその表現に於いて、各聯ともに初めの四行に川の土手の草を歌ひ、後の二行に川の水を敘してゐること、第五行が「ゆらりゆらゆら」「ちらと」「さやささやさと」「ひたひたひた」との如き擬聲擬態の語で始つてゐること等に、この詩全體に通ずる統一感があるとともに、第一聯から第三聯までが過去の表現で、ほぼ同じ形式を繰り返してゐるのに對し、第四聯だけが現在感の表現として、形式におのづから變化を與へてゐることも見のがせない點である。

第一聯は、春の川土手である。「春來たときは」といひ、「咲いてゐた」「うつつてた」といふ過去の表現し方は、思ひ出であるからである。「川土手に、すみれの花が咲いてゐたは、いふまでもなく川土手の春に極めて普通に、見る小さな自然であるが、その小さなすみれが取りあげられてゐるところに詩心がある。しかも第二聯の夏と違つて古い草が刈り取られ、若しくは焼き、拂はれた後に若草がめぐみ、その間にすみれが點在してゐるといふ春の川土手の趣が描き出されてゐる。さうしてこの

土手から廣く展望する大川の水は、いかにも春の水らしく悠々たるものが、あり、その上を往來する船の白帆を、夢の如くうつしてゐるのである。「うつつてたは正しくは、うつつてゐた」であるが、韻律の制約上生活語をそのままに捉らへたのである。

第二聯は、夏の川土手の思ひ出である。春はあるかなきかに萌えそめてゐた草——その間に點在するすみれをも自由に見たり摘んだりすることのできた川土手の草が、今は一齊に丈高くのびてゐる。「ほくのせいより高かつたは、いかにも子どもらしい表現である。かうなつては川土手に登つても、川水の展望は自由でない。「ちらとのぞいた大川には、この高い草むらつづきの間から、わづかにのぞき得る趣である。夏の空をうつして青くたたへる水の上を、くつきりと白いモーターボートが走つてゐるのは、夏らしい點景である。「走つてたは正しくは、走つてゐた」であるが、これも韻律の制約上、兒童の生活語をそのまま生かしたのである。

第三聯は秋の川土手の思ひ出である。夏のびにのびた草むらは、一面に穂を出してすすき原になり、赤いとしんぼがむれをなして飛んでゐる。もちろん水邊には葦の穂も出でゐる。吹く秋風にかうした草葉がさやさやと鳴り、川水はすき通るやうに底まで澄みきつてゐる。いかにも清澄な秋が具體的に捉らへられてゐる。「さやさやと鳴る風には、水は底まで澄んでゐた」と呼應して、清爽な風の音と、清らかに澄む水とが因果關係をなしてゐるかのやうな感じ方であるが、兒童にはそこまで考へさせる必要はない。

第四聯は、冬の川土手であり、これが現在の生活感として描き出されてゐる。随つて以上三聯と違つた句法が用ひられ、おのづから詩趣に變化を與へてゐる。

今は川土手が一面枯草でおほはれてゐる。その川土手を北の寒風が強く吹いてをり、その寒風に川の波はひたひたひたと音をたてながら、枯れた葦間につながれてゐる川舟に打寄せて來るといふ、冬の大川

の情景の表現であるが、この冬らしい一脈の淋しさ、わびしさが、詩全體の基調となつて、春以來の思ひ出をして感慨深いものたらしめてゐる。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、韻律を生かして確實に讀ませる。流麗な七五調であるから讀みに注意し、讀みを反復するうちに、次第に詩を理會させるやうに指導する。土手にすみれの花が咲き、川に白帆のかげがうつつてゐる春のおもむき、土手に草が茂り、川にモーターボートが走る夏のやうす、すすき原になつた土手には赤としんぼが飛び、川水はあくまで澄んだ秋の氣分、枯草になつた土手には北風が吹き、蘆間の舟に川波がひたひたと打ち寄せる冬のおもむき等、四季折々に移り行く詩趣を味はせるやうに指導する。

讀みを反復し、自然に暗誦に導く。

話すこと 次の如き問によつて詩の理會を助けるやうにする。

「この詩にうたはれてゐるところは、どんな場所と思ひますか。」

「春の川土手のやうすを話してごらんなさい。」

「夏の川土手のやうすを話してごらんなさい。」

「秋の川土手のやうすを話してごらんさい。」

「この詩は四季のうち、いつ歌つたのですか。」

「では冬の川土手のやうすを話してごらんさい。」

書くこと 暗誦を利用し、詩の形のまゝに書寫させる。その際、次のカナヅカヒに注意させる。

春來たときは

咲いてゐた

夏來たときは

秋來たときは

飛んでゐた

水は、底まで澄んでゐた

今は、枯草

川土手を

注意すべき發音文字ことば等

發音

せい——せー

すすき原——ススキハラ

大川——オーカワ
枯草——カレクサ

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

語句語法

「ゆらりゆらゆらは」帆かげが揺れてゐるさまを表したものである。

「ちらとのぞいた大川」には、「ぼくのせいより高かつた土手の草の間からのぞいた意である。

「ちらと」さやさと「ひたひたひた」との如き副詞的修飾語のいひ表し方について理會させる。

「今は枯草は前三聯の春來たときは」夏來たときは「秋來たときは」と反復した詩句に變化を與へながら、冬の季を表したものである。

備考

連絡

よみかた三「川、初等科國語一川をくだる」と連絡がある。

郷土の觀察「山川海」と連絡がある。

(以上 十二月)

十四 扇の的

教材の趣旨

本巻に於いては、先に「くりから谷」「ひよどり越」と文語の歴史教材が二つ出た。それらは、源平に關する興味深い物語によつて文語文を提出し、興味ある敘述の中に兒童をして知らず知らず文語文の調子を感じ得させようとしたものであるが、それと同じ意味に於いて、ここに「扇の的」「弓流し」の二つの文語の歴史教材が並べられてある。いづれも、國民的英雄として、兒童にも、牛わかまる「以來親しみの深い義經に關聯した教材である。

くりから谷に敗れた平家は、更に一の谷に城を構へた。しかし、ここでも義經の果敢を「ひよどり越」の攻撃に脆くも敗れて、平家は海に出た。前の二つが陸の戦であるのに對し、この二つは海の戦である。前の二

つが主として戦況を中心に述べられてゐるのに對し、この二つは、人物を中心として捉らへ、その武士道的行動を敘して、兒童の英雄崇拜の心理に適合せしめてある。「萬一射そんずるならば弓切り折りて自害せん」と覺悟し、神に祈りてひようと矢を放つた餘一の武人としての果敢な精神が、力強く文語で書き表されてある。取扱に於いては朗讀を中心として文語獨特の調子に興味を持たせ、専ら直觀的に理會せしめることに力むべきである。

なほ本教材は主として平家物語の文章を單純化して作成されてゐる。

文章

壽永三年一の谷で大敗した平家は、讃岐の屋島に據つたが、源氏は攝津の渡邊浦から船出し、阿波の國勝浦に上陸して、それより陸路山道を越え、突如として平家の本營を襲つたので、平家は驚いて全軍船に乗り、源氏の鋭鋒を避けた。「扇の的」の話は、この時のできごとで、かくて、源氏は陸に陣を取り、平家は海に船を浮かべて相對したのである。折から

兩軍の間へ美しくかざつた船が一さう出て來た。源氏方では、何事かと思つてよく見ると、舳に長い竿を立ててその先に赤い扇がつけてある。さうして、宮仕への一人の女がその下に立つて、陸に向かつてさしまねいてゐるのは、源氏にこの扇を射てみよといふことであると思はれる。源氏の大將義經たるもの、この挑戦に黙してはゐられない。「かの扇を、射落す者はなきか」といふことには、大將としての凜然たる趣がうかがはれる。そこで、空を飛ぶ鳥でも、三羽射ればその中二羽は必ず射落すほどの名人である那須餘一が呼び出される。餘一は下野國那須の産で、實名宗高、通稱餘一、當時二十歳ばかりであつたといはれる。「空飛ぶ鳥も」云々は、古典の口調の残つてゐるおもしろい表現である。「それ呼べは、その男をここへ呼んで來いてある。」

呼び出された餘一は扇の的を射よとの命を受けるのであるが、本教材ではその敘述は省略してある。しかし餘一はその任に非ずとして再三辭退する。決して臆病で辭退したのではなく、萬一失敗した場合

に於ける源氏全體の不名誉を思ひ、事の困難と自らの力を推し測つて辭退したのであることを補足説明すべきである。しかし、是非にとの主命もだしがたく、いよいよ海中に馬を乗り入れる。彼は決死の覺悟であつた。即ち運拙く萬一射そこなつたならば、弓の弦を切り、弓を折つて、切腹して死なうといふのである。「心のうちに思ふやうは、その深い覺悟を示して餘りがある。海中に馬を乗り入れたのは、陸からでは餘りに遠距離だからである。」

海は風が強く、波が高いので、扇をつけた船は、あるひは高くゆりあげられ、また低くゆりさげられ、扇は風にひらひらと動いて、到底一矢で射ることは不可能と見えた。そこで、餘一は眼を閉ぢ、一心に神に祈つた。平家物語によれば、與一目を塞いで、南無八幡大菩薩、別してはわが國の神明、日光の權現、宇都の宮那須の溫泉大、明神、願はくはあの扇のまん中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓切り折り、自害して、人に再び面を向ふべからず。今一度本國へ歸さむと思し召さば、こ

の矢はづさせ給ふな、と心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱つて、扇も射よげにこそなつたりけれ。」とある。眼を開けると、風はやや静かになり、扇も幾分おちついて射やすさうに見えた。すかさず彼は弓に矢をつがへた。「ただちに弓に矢をつがへ」にその趣が見られる。「ひようと」は矢が弦を離れる音の形容で、勢よく力強く飛んで行く感じがさながらに現れてゐる。

矢は扇の要ぎはを射、扇を結びつけた紐を切つたので、赤い扇は華やかに空高く舞ひあがり、二三度空中でひらひらとまはつて海の中へ落ちこんだ。

大任を果たした餘一の心中の喜びはいかばかりであらう。しかし、それには一切ふれないで、大將義經を始め、源氏の軍勢一同が、馬のくらをたたいて喜び、敵方の平家も、餘一の神技に感動し、船の縁をたたいて、どつとほめあげたことを述べて終筆としてある。「馬のくらをたたき」と、ふなばたをたたきてが、相照應するところに表現のおもしろさを見らるべきである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。文語文であるから朗讀を重視し、その調子になれさせて行くことが大切である。「ひよどり越」の戦に關係づけて、屋島の戦に那須餘一が扇の的を射落した功名物語であることとをわからせる。大將義經に餘一の弓の名人であることを見込まれ、幾度辭退しても許されず、餘一は決死の覺悟で源氏の名譽を一身に背負つて、あつばれ一矢で的を射落したその武士的精神に、感動させるやうに指導する。

話すこと 文章挿畫を中心として、那須餘一の物語について話をさせ、この説話をまとめて敬體口語で話させる。

書くこと 新字讀替の文字を中心として指導し、次の如き文によつて書取を練習させる。

源氏は陸に陣を取り、平家は海に船を浮かべて相對せり。
船一さう、平家の方よりこぎ出す。

へさきに長き竿を立て、赤きあふぎをとりつけたり。

「かのあふぎを射落す者はなきか」

「空飛ぶ鳥も三羽に二羽は、かならず射落すほどの上手なり」

萬一射そんなるならば、弓切り折りて自害せん

餘一、目を閉ぢ、あのあふぎの眞中を射させたまへ」と神に祈る。

あふぎは、かなめぎはを射切られて空高く舞ひあがり

次のカナヅカヒに注意させる。

(むつかしと見えたり

射よげに見えたり

答へたれば

射させたまへ

注意すべき發音文字 ことば等

發音

扇——オーキ

平家の方——ヘーケノホー

出す——イダス

合戦——カッセン

一人——ヒトリ

その下——ソノシタ

心の中——ココロノナカ

一矢——ヒトヤ

軍勢——グンゼー

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

萬一——マンイチ
眞中——マンナカ

文字

新字 閉ぢ

讀替 こぎ出す

語句語法

「屋島の合戦、相對せり」さしまねく、かならず「召し出す」萬一「射そんなる」「自害」「射よげに」「ただちに」「かなめぎは」「軍勢」「ふなばた」等は、指導を要する語句である。

文語として指導を要するものは「相對せり」者はなきか「答へたれば」「許されず」「射そんなる」ならば「自害せん」等である。なほ口語では「むつかしい」であるが文語では「むつかし」といふ。

次の如く現在法を多く用ひ、敘述を生かしてゐるいひ表し方を味ははせるやうにする。

平家の方よりこぎ出す

陸に向かひてさしまねく

那須餘一と申す者あり。

餘一を召し出す。

餘一はいくたびかことわりたれども許されず。

ねらひを定めてひようと放つ。

次の如き對句擬態等の修辭によつて具象化したいひ表し方を指導し文意を理會させる。

時に風強く波高ければ船はゆりあげられゆりさげられ、扇は風にひらめきていかなる弓の名人も、ただ一矢にて射落すことはむづかしと見えたり。

扇はかなめぎはを射切られて、空高く舞ひあがり二度三度ひらひらとまはりて、さつと海の中に落ち入りたり。

陸には大將義經を始め、源氏の軍勢馬のくらをたたきて喜びたり。

海には平家、ふなばたをたたきて、どつとほめあげたり。

備考

連絡

初等科國語四「くもりから谷」ひよどり越と連絡して取扱ふ。

十五 弓流し

教材の趣旨

前課を受けて、戦がいよいよ海戦になつて來た場面である。國民的英雄としての義經の武勳については、既に「ひよどり越」でも述べ、周知のことでもあるので、ここでは直接戦闘の手柄話でなく、義經の名を重んずる武士道精神を表した行爲を述べ、義經に關した教材の一應のしめくくりとしてある。前課と相俟つて文語の表現の獨特の調子を直觀させようとするのが、國語教材としての趣旨であるから、朗讀を中心として、文章に即しつゝ、危険を冒して名を重んずる義經の精神を感得させるべきである。なほ、原據は前課と同じく平家物語である。

文章

前課にひきつづいた戦の場面である。那須餘一が扇の的を射落し

た後、平家方は陸に押し寄せ、源氏はこれを反撃して海中に入り戦つた。義經もまたみづから馬を海中に乗り入れて、はげしく戦つてゐるその時、どうしたはづみか、脇の下に挟んで持つてゐた弓をとり落した。義經は馬の上に體をかがめ、手をのばして鞭の先で弓をかき寄せようとする。手をのばしても届かないので、馬の鞭の先で辛うじて引き寄せようとしてゐるところである。平家方は、このやうすを見て船の上から、義經のかぶとに熊手をひっかけ、海中にひき倒さうとする。熊手は長い柄の先に鐵の爪をつけた武器で、馬上の人を引き落したりするのに用ひるものである。「打ち掛け、打ち掛け」といふところに、盛んに義經に挑みかかつてゐる平家のやうすが現れてゐる。

弓の一張や二張は、源氏の大將といふ身分からすれば、決してそれほど惜しむべきものではない。源氏の者どもが、その弓捨てたまへ。捨てたまへ」といふのは當然のことである。「口々にいふは、皆がめいめいにいふの意で、誰も義經を助けに行きたいのであるが、すぐには間に合

はずはらはらして氣をもんでゐるやうすがはれる。

皆にさういはれても志を變へず、しきりに襲つてくる熊手を太刀で防ぎながら、とうとう弓を拾つて無事に陸へもどつた。以上は戦鬪の場面、で本文の前段である。

後段は程經て戦も一段落した折の場面と考へるべきであらう。義經が無事陸へもどつたのにほつと安心はしたもの、義經の冒險に、はらはらして氣をもんでゐた家來たちが、たとへ、金銀にて作りたる弓なりとも、御命には代へがたし」といふのは、いかにもつともな感情である。しかし、義經は笑つて——いかに大將らしい悠然たる態度である。「おまへたちがさういふのは誠にもつともだ」といふやうすが見える。さうして、しかし自分は弓を惜しんだのではないとその理由を説明する。自分が危険を冒して弓を拾つたのは、弓を捨てるのが惜しいからではない。自分の弓が、をちの爲朝の弓のやうな強い弓なら、むしろ弓をわざと落してでも、敵に與へて見せてやるだらう、といふのであ

る。爲朝は義經の父義朝の弟で、世にかくれない弓の名人であり、その弓は五人張の強弓であつたと傳へられる。ところが、自分の弓は残念ながら弱い弓だから、さういふ弱い弓を敵に取られて、これが源氏の大將義經の弓だと嘲けられては、自分一人の恥辱であるばかりでなく、源氏一門の恥辱になる。さう思へばこそ、危険を冒して弓を拾つたので、決して弓が惜しかつたのではないと事理を明らかにする。

源氏の者たちは、この話を聞いて、義經の名を惜しむ心に「まことの大將かな」とみんなて感心しあつた。單に強いばかりでなく、名を尊ぶところに武士道の面目がある。源氏の大將として武士どもの衆望を擔つてゐるやうすが、最後の一句に示されてゐる。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字、語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みを重視し讀ませることによつて、文語文の調子になれさせるやうにとめる。文末の「まことの大將かな」に着目させて大將たる義經の器量を讀み取らせ、弱き弓を取

られて、これが義經の弓なりとあざけらるるは源氏一門の恥ならずやの意味を理會させ、命より名を惜しむ名將の心掛に感じさせるやうに指導する。

話すこと 文章挿畫を中心として、源義經の名將たる點について、話をさせ、この說話をまとめて敬體口語によつて話させる。

書くこと 讀替文字を中心に指導し、次の如き文によつて書取を練習させる。

義經は弓を海中にとり落したり。

流れ行く弓を、かき寄せ取らんとす。

打ち掛け打ち掛け、引き倒さんとす。

「その弓、捨てたまへ。」

太刀にて防ぎ防ぎ、弓を拾ひあげて、陸にのぼる。

御命には代へがたし。

弓を惜しみたるにはあらず。

わざと落しても與ふべし。

源氏一門の恥ならずや。

「まことの大將かな」と、皆感じあへり。

なほ時間に餘裕があれば全文を書寫させる。

次のカナヅカヒに注意させる。

はげしく戦ふ

落しても與ふべし

弓を拾ひあげて

義經笑ひて

注意すべき發音文字ことは等

發音

馬——ンマ

戦ふ——クダコ

流れ行く——ナガレユク

拾ひ——ヒロイ

御命——オンイノチ

與ふべし——アトベシ

ことばの中または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

讀替 太刀

語句語法

「いかなるはすみにかうつぶし」取らんとすれば「引き倒さんとす」されども「太刀」たとへ「弓なりとも」代へがたし「あらず」落しても與ふべし「あざけらるるは」源氏一門「恥ならずや」まことの大将かな「感じあへり」等は指導を要する語句である。

次の如き文語を口語と比較しこれを理會させる。

かき寄せ取らんとすれば、

引き倒さんとす。

弓を惜しみたるにはあらず。

わざと落しても與ふべし。

源氏一門の恥ならずや。

次の如き文例によつて反復によるいひ表し方を指導し文意を理會させる。

義經のかぶとに打ち掛け打ち掛け引き倒さんとす。

その弓捨てたまへ。捨てたまへ。

義經は太刀にて熊手を防ぎ防ぎつひに弓を拾ひあげて陸にのぼる。

備考

連絡

初等科國語四「くりから谷」ひよどり越「扇の的」と連絡して取扱ふ。

十六 山のスキー場

教材の趣旨

冬季に於ける體鍊的遊戲として、初等科國語二、雪合戦があつたが、本教材は、それと關聯して、全級の兒童が教師に引率されて山のスキー場へ出かけ、そこで思ひきり滑走し、またジャンプ臺から飛躍する先生の勇ましい姿に見とれ、寒さも忘れて、愉快に雪中で運動する生活を敘して、讀む兒童に感激を與へ、冬の自然に親しむとともに、剛健な氣性を養ふことに資するのが、本教材の趣旨である。

文章

本卷中の長篇の一つである。

まづ、ぼくたち四十人は、野田先生と石井先生につれられて、山のスキー場へ行つたと書き起して、人物と場所とをわからせ、スキーをつけ、二

本の杖をつきながらと敘して、スキーを簡明に説明し、全文の序としてある。

「野田先生が先頭に立たれ、石井先生が、みんなのあとから來られたのは、雪中を行軍する兒童たちを擁護する意味があり、また、野田先生が、さあ、元氣を出して。」と大きな聲を掛けられ、石井先生も、ずつと後の方から、しつかりのぼれ。」と叫ばれたとあるのは、疲れてゐる兒童たちを鼓舞激勵するのであつて、先生がつねに兒童たちの上に、氣を配つてゐることを表したのである。

「松林の中を通り、大きな兎がとび出したのに興じつつ、傾斜面のところを登つて行つて、やうやくスキー場に着く。」いかにもすべりよささうな傾斜が、長く續いてゐるのを見ると、もうすべりたいと思ふのは子どもとして無理もないことであるが、それを先生が、待て待て。もう少し上まで行かうと、はやる心を制しながら登つて行くと、適當に指導し、鍛鍊する意味が含まれてゐる。

いよいよ、ようし、ここからすべりたい者は、すべつてよろしいといふ先生のことばだ。子どもたちにとつてはどんなに嬉しいことであらう。たちまち、眞一文字にすべりおりたそのときの心持は、まるで、空中滑走をしてゐるやうであり、汗ばんだ顔に、雪のこなが降りかかるのも快いことである。このやうに自分のすべるのも愉快であるが、小鳥のやうにおりて来る友だちを見るのも愉快である。あるひは、雪だるまになつて起きあがる者もあり、あるひは、笑ひながらおりて来る者もあり、また、まじめな顔でやつて来る者もあつて、そこにそれぞれの趣が現れ、個性も出てゐるのである。

二人の先生は、更に高いところへ登り、そこから一氣にすべりおりられた。雪煙が消えて、先生の笑顔が浮かんだのは、いかに先生方のスキーが上手であるかを表し、また、快活な性格をも物語る情景である。

次に本教材中、感激の頂點ともいふべき先生方のジャンプがかなりこまかに敘してある。「えいつ」といふ先生の掛聲、萬歳、野田先生と叫

ぶ、児童たちの聲、いづれも、短いことばの中に、先生方の勇壯な姿を想像することができ、四十メートルも空中をとんで、先生は、地上の人となられた、ほつとする氣持も現れてゐる。

最後は児童各自がスキー練習をすることを書き、坂をすべつて歸る痛快さを簡明に敘して結尾としてある。

取扱の要點

讀むこと

文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みが進むにしたがひ、學校の生徒たちが先生につれられてスキーに行つたその愉快なやうすが書いてあることをわからせる。道中のやうすから、スキー場で興がる生徒たちのスキー、野田先生と石井先生のすべり方やジャンプ等の壯快なさまを表現と堅く結んで想像させ、その氣分を感得させるやうに指導する。

話すこと

文章挿畫を中心として、スキー場まで行く道中のやうすや、スキー場に於いて愉快にするスキーのやうす等の話をさせる。スキーの體驗ある児童には、その經驗を話させて文の理會に資する。

次の如きことばを敬體口語にいひかへさせて、その用法になれさせる。

すべつた
すべられた

おすべりになつた

書くこと 新字讀替の文字を中心として指導する。「杖」「制」「距」「離」等は困難な文字であるから、偏旁等によって字形筆順に注意し、確實に書かせる。
次の如き文によつて書取を練習させる。

集合地は村はづれの一本杉のそばであつた。

ルックサックを背負つて、スキーをつけ、二本の杖をつきながら、そこへ集つた。

傾斜が長く續いてゐる。

ふもとへ來て急停止すると、ばつと雪煙が立つ。

はげしい制動を掛けられると、もうもうと雪煙が立つ。

先生の笑顔が浮かんだ。

林をぬつて長距離をすべるのは、ほんたうに愉快であつた。

次のカナツカヒに注意させる。

（氣持よく聞える）

ジャンプ臺も見える

（雪煙が消えて）

（それに答へた）

（すべり方を教へていただいた）

（思はず手をたいた）

（思ひ思ひに）

（來たと思ふと）

注意すべき發音文字ことは等

アクセント

ふつた（降）——フツタ

ふつた（振）——フツタ

訛音方言

背負つて——シヨツテといはないやうに注意する。

谷あひ——「クニヤイ」と訛らないやうに注意する。

叫ばれた——「サカバレタ」と訛らないやうに注意する。

尻——「オサギ」の訛を矯正する。

十六 山のスキー場

一五八

發音

スキー場——スキージョー
集合地——シニョーゴーチ
來られた——コラレタ
後の方——ウシロノホー
行かう——イコー
眞一文字——マイチモンジ
笑顔——エガオ
一人一人——ヒトリヒトリ
ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

四十人——シジューニンまたはヨンジューニン
背負つて——セオツテ
出して——グシテ
松林——マツバヤシ
大聲——オーゴエ
二人——フタリ
四十メートル——シジュームートルまたはヨンジュームートル

文字

新字 杖(ツ) 制(セ) 動(キ) 離
讀替 傾(ケ) 斜 急停止 笑(エ) 顔 距離

語句語法

「スキー場」集合地「先頭谷あひ」からだかほてつて「あへきながら」もう一息「ジャンプ臺」傾斜「眞一文字」空中滑走「急停止」制動「もうもうと雪煙が立つ」笑顔「ジャンプ」たちまち

「長距離」等は指導を要する語句である。
次の如き敬語に注意して指導する。

野田先生と石井先生につれられて、
石井先生が、みんなのあとから來られた。
大きな聲を掛けられる。
先生たちはもう目の前へ來られた。
はげしい制動を掛けられると、

野田先生が先頭に立たれ、
追ひ立てるやうにいはれた。
兩手をひろげて高くとばれる姿は、
鉢巻をしてすべり出された。
先生は地上の人となられた。

次の如きいひ表し方を指導し、文意を理會させる。
やあ、兎兎。
からだもスキーも一つになつてびゆうとうなる。

十六 山のスキー場

一五九

まるで空中滑走をしてゐるやうだ。

ばつと雪煙が立ち、汗ばんだ顔に雪のこなが降りかかる。

スキーのあとを雪の上にぬがきながら小鳥のやうにおりて来る。

もうもうと雪煙が立つ。

先生のからだは美しくちうをとんで行く。

備考

連絡

よみかた四、滿洲の冬と連絡がある。

郷土の觀察、氣候と連絡がある。

十七 廣瀬中佐

教材の趣旨

明治三十七八年戦役に於ける旅順港口の閉塞は、戦史上空前の壯舉であつて、世界の耳目を聳動させたものである。しかもこの壯舉は前

後三回にわたつて決行され、將士は血書して志願し、もとより生還は期するところでなく、勇躍して壯途にのぼつたのである。中にも廣瀬中佐は閉塞船の指揮官として二回これに加り、よくその任務を果して遂に壯烈無比の戦死を遂げた。當時東郷聯合艦隊司令長官の報告の一節には、

戦死者中福井丸ノ廣瀬中佐及杉野兵曹長ノ最後ハ頗ル壯烈ニシテ同船ノ投錨セントスルヤ杉野兵曹長ハ爆發藥ニ點火スルタメ艀艀ニ下リシ時敵ノ魚形水雷命中シタルヲ以テ遂ニ戦死セルモノノ如ク廣瀬中佐ハ乗員ヲ端舟ニ乗移ラシメ杉野兵曹長ノ見當ラサルタメ自ラ三タヒ艀内ヲ搜索シタルモ艀體次第ニ沈没海水甲板ニ達セルヲ以テ止ムヲ得ス端舟ニ下リ艀ヲ離レ敵彈ノ下ヲ退却セル際一巨彈中佐ノ頭部ヲ撃チ中佐ノ體ハ一片ノ肉塊ヲ艀内ニ殘シテ海中ニ墜落シタルモノナリ中佐ハ平時ニ於テモ常ニ軍人ノ龜鑑タルノミナラス其最後ニ於テモ萬世不滅ノ好鑑ヲ殘シタルモノト謂フヘ

シ

とその忠烈を賞し、平時に於いても軍人の龜鑑であつたことを讃へ、軍神として尊崇されるゆゑんを明らかにしてゐる。今次大東亞戦争に於ける特別攻撃隊の九勇士の壯烈とその軌を一にして崇高無比、實にわが軍人精神の遺憾なき發現である。しかも中佐の忠烈な精神が如何に國民に深い感化を與へたかけだし測り知るべからざるものがあると思はれる。

教材は廣瀬中佐の最後を語る場面を詩によつて躍如たらしめたものであり、これによつて兒童の感激を深からしめ、國民精神を振起し、非常時局に於ける奉公の赤誠を致す自覺に培はうとするものである。

文章

「林の中」とともに文語詩として採擇せられたもので、三聯より成り、七調を基調としてゐる。各聯の初句は八八または八七になつてゐるが、全詩に一貫するものは七七の韻律である。

詩は福井丸爆沈の刹那的光景を捉らへ、部下に對する廣瀬中佐の温情を讃へ、その壯烈な戦死を悼んだものである。

第一聯は、轟き渡る敵の砲彈がもの凄く炸裂し、水柱をあげて荒れ狂ふ怒濤に洗はれる甲板の上から、暗夜を衝いて聞える中佐の杉野を尋ねる聲を表したものである。「やみを貫ぬく」は中佐の聲の鋭さを示し、この句を受けて「中佐の叫び」と名詞止めにした句法は、その悲壯な心持を強く表してゐる。「杉野はいづこ、杉野はゐらずや」は中佐のことばで、杉野の反復、いづこ、ゐらずやの重韻に注意すべきである。

第二聯は、第一聯を受けて、中佐が船内を一度ならず、二度三度まで杉野を探し求めてゐる中に、船は次第に沈み行く光景を敍したものである。「船内くまなく」といひ、たづねる三たびといふ、この短い句に部下を思ふ中佐の苦衷を思はせ、呼べど答へず、さがせど見えず」と類似の句をたたみ掛けて第一聯の中佐の叫びに照應し、慌しく船内を駆けめぐる中佐を想像させてゐる。さうしてその間に船は次第に沈降し、敵の砲

撃はいよいよ熾烈を極めてゐるさまを表し、刻々に危険が切迫してゐることを示してゐる。

第三聯は、中佐の悲壯な最後の場面を描き、追悼の情を敘したものである。「今は」とは、第二聯の杉野を求めて探し得ず、危険の緊迫せるさまに照應して、やるせなき無念の情を抱く中佐の心持を表し、ボートに乗り移つた瞬間、一片の肉塊と化して、勇姿の消え失せたさまを敘し、最後に作者の感慨をのべてゐる。「旅順港外うらみぞ深き、軍神廣瀬とその名残れど」は、軍神廣瀬とその名残れど、旅順港外うらみぞ深きの倒置である。「うらみぞ深き」は「くやしい」などといふのではなく、「遺憾に堪へない意味に解すべきである。部下を愛して戦死を遂げた軍神廣瀬中佐を痛惜する作者の眞情はこの句によつて表白され、十分に生かされてゐるのである。

取扱の要點

讀むこと 廣瀬中佐については、日露戦争の時、旅順港口閉塞の壯舉に加り、閉塞船を

指揮して二回までこれを敢行したことを、簡潔に説話した後、讀みの指導に入る。文に即して發音を正し、文字、語句等を指導し、韻律を生かして確實に讀ませる。文語詩であるから特に讀みを繰り返し、讀ませることによつて、次第に詩の理會に導くやうにし、閉塞船擧沈の際に於ける杉野兵曹長に對する中佐の美しい心情とその壯烈な最期に感動させるやうに指導する。

讀みを反復し、自然に暗誦に導く。

話すこと

文章挿畫を中心として、次の如き問によつて詩の理會を深めるやうにする。

「この詩を讀んで第一に感じたことは何ですか。」

「杉野兵曹長の姿が見えないので、中佐はどのやうにしてさがしましたか。」

「船はどんなにして沈んで行きますか。」

「中佐の最期のさまを話してごらんさい。」

書くこと

新字讀替の文字を中心として指導する。暗誦を利用し、全文を詩の形のままに書寫させる。その際、次のカナヅカヒに注意させる。

荒波あらふ

やみを貫ぬく

杉野はいづこ杉野はゐすや

たづぬる三たび

呼べど答へず

さがせど見えず

船はしだいに

今はとボートに

注意すべき發音文字 ことば等

發音

荒波あらふ——アラナミアロー 三たび——ミタビ

波間——ナミマ 軍神——グンシン

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 荒波 貫ぬく

讀替 彈丸(ガン) 失せ

語句語法

「とどろくつつ音」彈丸「荒波」やみを貫ぬく「杉野はいづこ」杉野はゐすや「船内くまなくたづぬる三たび」敵彈いよいよあたりにしげし「たちまち失せて」旅順港外「うらみぞ深き」軍神廣瀬とその名残れど等は、指導を要する語句である。

「うらみぞ深き」のぞの係り結びは、「うらみは深し」と比較し讀ませることによつて、文意が強くあらはされてゐることを自然に體得させるやうに取扱ふ。

次の如き對句について指導し、文意を理會させる。

「とどろくつつ音」

飛び來る彈丸

呼べど答へず

さがせど見えず

杉野はいづこ、杉野はゐすやの反復による重韻にも注意して指導する。

備考

連絡

初等科國語四「大連から」と連絡がある。

初等科音楽二「廣瀬中佐」と連絡して取扱ふ。

(以上 一月)

十八 大阪

教材の趣旨

兒童に、山や海や平野にとり圍まれた漁村農山村の生活に親しみを
持たせるとともに、生産通商交通文化施設歴史などの総合的な有機體
である近代都市についての正しい見方なり考へ方なりを、國語の表現
を通して、感得させることは必要なことである。

それは一面國民科郷土の觀察や、やがて初等科第五學年から行はれ
る國民科地理にも關聯すべきもので、國民科の各教科目が一體たるの
建前から、重要な意義を持つこととなる。

本教材は、かういふ意味に於いて、初等科國語二の「東京」と呼應し、日本
の商工業都市を代表する「大阪」を取りあげ、兒童に、大阪の所々方々を案
内しつつ、工業商業交通文化施設などの現狀を、地理的な條件や、歴史的

な傳統とからませ、自然に體得させるやうにしたものである。

文章

大阪の全貌をわからすため、文は大阪の

イ 煙の都としての工業都市面

ロ 水の都としての商業都市面

ハ 中之島を中心とした近代文化の面

ニ 道頓堀心齋橋を中心とした股賑狀態

ホ 大阪城・高津宮・四天王寺等の名所舊蹟

ヘ 大都市の玄關大阪港

ト 水陸空の交通

チ 史的傳統

などを順序を追つて書き表してゐる。

汽車で大阪驛に近づくと、晴れた日でも、どんよりくもつたやうに見
えます——汽車は刻一刻めざす大阪へ近づいて行く。車窓から眺め

た大阪の第一印象は、煙の都にふさはしく、大小幾多の煙突から大空に向かつて放たれる煙である。この煙の下に大阪の市街は横たはつてゐるが、劈頭、工業都市としての大阪をその遠望のうちに捉らへ、大小一萬以上の工場がここにあつて、林のやうに立ち並ぶ煙突から、絶えず黒い煙を吐き出してゐるので、といふ敘述と相俟ち、實に日本第一の工業都市で、各種の工業がさかんに行はれてゐる盛觀を概括的にいひ表してゐる。

工業都市としての大阪を敘した後、昔から今日に引き續き、最も活潑に行はれてゐる商業の紹介に筆が進められてゐる。大阪の商業が販販を極めるやうになつた一つの理由は、市を貫ぬいて流れる淀川が、いく筋にも分れて、西の大阪灣に注いでゐる地理的な條件を備へてゐることである。

南に大阪灣を控へ、中國・四國・九州はもちろん、遠く滿洲・支那・南洋の各地から、物貨が海路によつてここへ運ばれ、また一方、攝河泉などの豊富

な生産地と消費地とを直接その背後に擁し、海陸からの物産は、この關門を経由して、互に交換される。それには、淀川の川水が、市内の何十といふ堀から堀へ通じ、川と堀とは、まるで網の目のやうに、組み合つてゐることが非常な有利な條件となつてゐる。即ち大阪港に投錨した汽船から陸あげされる積荷は、小船で、この川や堀を傳はつて、大阪の町々にあげられ、同様にまた陸からの物産も、堀や川を通つて港へ送られるからである。このやうな、大阪の恵まれた自然の條件によつて、多くの品物が、自由自在に集散するに都合がよく、しぜん大阪が、一大商業都市として發達したのである。

このやうに、昔から開けたいはば水の都であるから、大阪には、大小千何百といふ橋があつて、水の都の特色をなしてゐることを物語りつつ、更に大江橋や中之島の敘述に筆を進めてゐる。中之島に南北にかけ渡された橋の模様が、まるで中之島を、たくさんの串でさし通したやうだと譬喩的に表してゐるのは、中之島を見ない兒童にも容易に想像の

できる書き方である。

中之島を中心とした地域は、大阪の政治経済文化の一つの中心地で、市役所控訴院米穀取引所公會堂圖書館などの、高い建物が並び、島の東の端には、中之島公園もあつて、いはば大阪の心臓部である。

「いちばんにぎやかな場所は、道頓堀附近の町々と、大阪の銀座ともいふべき心齋橋筋とであり、人の波が、あとからあとから押し寄せる程のにぎやかさである。この繁榮の背後には、永い大阪の傳統が存在してゐるが、それをわからせるためには、どうしても大阪の歴史をひもとかなければならない。しかもその歴史は大阪の名所舊蹟として今日なほ残つてゐるので、それに即して説くことが兒童には最も適切な仕方であらう。

そこでまづ第一に秀吉の建てた大阪城があげられ、近年復興を見た天守閣と、城の石垣に使用された巨石とを描いて、大阪城の規模の宏大さを、兒童に想像し易からしめてゐる。戦時下の今日では、天守閣に登

つて、四圍の展望をほし、いまにすることはゆるされないが、その威容を誇る天守閣は、大阪を訪れる者のたれしもがひとしく仰ぎ見るものである。

大阪の新名所ともいふべきものに、大阪城の堀端の廣場にそびえてゐる教育塔がある。これは、昭和九年九月、突如として關西地方を襲つた風水害の際、悲壯な殉職を遂げた小學校中學校の教職員及び兒童生徒をはじめとし、全國の教育關係の殉職者の靈をまつた記念塔である。

「仁徳天皇をおまつりしてある高津宮」や、神武天皇以來の歴史を持つといはれる生國魂神社や、神功皇后の新羅征討の時から由來する住吉神社や、聖德太子御建立の日本最初の佛法靈地たる四天王寺などの神社佛閣に筆を進め、大阪の古き歴史に思ひを馳せしめてゐる。この四天王寺に關聯して、中之島公園とともに有名な天王寺公園を紹介し、こ

こでも大阪の近代文化の一面に觸れさせてゐる。

次には、一萬トン級の汽船が横づけになる海の玄關大阪港のやうすを述べ、更に市内を自動車や電車や地下鐵が走り、川や堀に、何千といふ船が通ひ、市外には郊外電車が疾駆し、飛行場には毎日のやうに飛行機が發着する、水陸空の交通狀態を敘して、大阪を動かす血液ともいふべき交通についてさとらせようとしてゐる。

このやうに、近代都市大阪の全貌を簡明に敘した後、最後の締めくくりとして、大阪が水の都として發達し、また、煙の都と呼ばれて、今日のやうな大都市となつたのは、昔、仁徳天皇が、この地に都をお定めになつて、堀江をお開きになり、また、六年間の税を免じて、民のかまどの煙の立つやうになつたのを、たいそうお喜びになつた、まことに、尊いいはれにやることを、國史と結んで、兒童の腦裡に具象的に刻み込ませようとしてゐるのである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。説明の文

で、地名や人名を始め、熟語が多く用ひられ、新字も多いから、地圖を用ひ、範讀にも注意して讀みを懇切に指導し、文意をわからせるやうにつとめる。讀みが進むにしたがひ、各節の節意に留意して、大阪が大工業都市であるとともに、大商業都市であること、川や堀が多くしたが、つて橋が多いこと、にぎやかな町筋、名所交通歴史等を讀み取らせ、大都市としての大阪を理會させるやうにする。

話すこと 文章挿畫を中心として、大阪について語合をさせる。

書くこと 新字、讀替文字、略字を中心として指導する。中にも、實「灣」堀「産」達「劇」復「異」壁等複雑な文字が多いから、扁旁等にわけて特に字形筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

大阪は、實に日本第一の工業都市です。

各種の工業がさかに行はれます。

よど川は、いく筋にも分れて、西の大阪灣に注いでゐます。

川水は堀から堀へ通じ、川と堀とは、まるで網の目のやうに組み合つてゐます。
大阪の物産も、堀や川を通つて港へ送られます。

しせん、大阪が一大商業都市として發達したのです。

りつばな商店が並び、堀ばたの町には、映畫館や劇場があります。

大阪城は近年復興されたものです。

石垣の石の大きいのは有名です。

堀ばたの廣場、教育塔があります。

四天王寺に近い天王寺公園には、美術館や動物園があります。

港内の岸壁には、一萬トン級の汽船が横づけになります。

六年間の税を免じて、民のかまどの煙の立つやうになつたのを、たいそうお喜びになりました。

次のカナヅカヒに注意させる。

工業がさかに行はれます

水の都ともいはれてゐるのです

この川や堀を傳はつて

市内の何十といふ堀から

大小千何百といふ橋があります

中之島といふところへ來ます

縦六メートル、横十一メートルといふ

空がどんよりとくもつたやうに見えます

大阪が一目に見えます

帆柱が林のやうに見えます

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

はれた(噺)——ハレタ はれた(腫)——ハレタ

ひ(目)でも——ヒデモ ひ(火)でも——ヒデモ

はし(橋)——ハシ はし(巻)——ハシ はし(端)——ハシ

訛音方言

煙突——「エンタツ」といはいやうに注意する。

端——「ハジ」と濁らないやうに注意する。

にぎやか——「ニイヤカ」と訛らないやうに注意する。

びつくり——「ビツクラ」と訛らないやうに注意する。

發音

工場——コーバまたはコージョー
 日本第一——ニッポングイイチ
 小船——コブネ
 御堂筋——ミドースジ
 道頓堀——ドートンボリ
 心齋橋——シンサイバシ
 夜になると——ヨルニナルト
 一目——ヒトメ
 四天王寺——シテンノージ
 神社——ジンジャ
 天王寺公園——テンノージコーエン
 木立——コグチ
 今日——コンニチ
 穿い——トートイ
 ことばの中または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 大阪 各種 大阪灣 堀 物産 發達 劇場 復興(ラッ)興(コー) 有(ユー)名
 教育塔(ト) 一萬トン級(キュー) 免じ
 讀書 實(実)に 行はれ 商店 教育塔 四天王寺 美術館 岸壁

語句語法

「どんより」煙の都「實に」工業都市「各種の工業」商業堀から堀へ通じ「水の都」船の積荷「物産」自由自在「二大商業都市」發達「水の公園」商店「堀ばた」映画館「劇場」人の波「名所」近年

「復興」天守閣「一目に見えます」有名「すばらしく」教育塔「いはれのある神社」境内「社殿」美術館「花壇」防波堤「岸壁」一萬トン級「地下鐵道」郊外電車「大阪のほこり」堀江「税を免じ」天都市等は指導を要する語句である。

本課には「煙の都」「水の都」「水の公園」の如き表し方が用ひられてゐるから文章と結んで理會させることが大切である。

次の如き文例によつて接続詞に注意しその用法になれさせる。

大阪の港に集つて來る船の積荷は、小船で、この川や堀を傳はつて大阪の町々にあげられます。また大阪の物産も堀や川を通じて港へ送られます。

次の如き文例によつて説明の文には比喻の大切なことを理會させる。

林のやうに立ち並ぶ煙突から絶えず黒い煙を吐き出してゐるのです。

川と堀とはまるで網の目のやうに組み合つてゐます。

まるで中之島をたくさんさんの串でさし通したやうになつてゐます。

大小の船の帆柱が林のやうに見えます。

備考

参考

押査は、八十九頁安治川口の工場地域、九十一頁上方中之島、下方心齋橋筋、九十二頁大阪

城、九十三頁上方教育塔下方大阪城の石垣、九十四頁住吉神社、九十五頁天王寺公園の
写真である。

連絡

初等科國語二「東京、同三、山航、同四」大連から」と地理的に連絡がある。

十九 大砲のできるまで

教材の趣旨

目にふれ、耳に聞くものについて、児童は、どうしてとか、なぜとかの疑問を起し、それを解決し、納得したい氣持を持つてゐる。

児童のすきな大空を飛ぶ飛行機、大海原を威風堂々航進する軍艦、飛行機や軍艦や要塞や戦車や敵兵を撃ち破るあの大砲などは、いつたいどうして作られるであらうかと、恐らく一度は考へてみることであらう。このやうな児童の持つ疑問を解決に導くことは、教育上見逃してはならないことである。

本教材は、かかる見地から、児童の興味をひく大砲を取りあげ、それが工場でいろいろな工程を経てできあがる有様を、児童の主體性に即しつつ、これを通して機械による生産に興味を感じさせ、併せて國防觀念に培はうとしたものである。

文章

高射砲や、對戰車砲や、野砲や、重砲のやうないろいろな大砲は、どうしてこしらへるのであらうかといふ問題をまづ提示し、それをみなさん考へてみたことがありますかと児童に問ひかけることによつて、大砲の製造に對して興味を向けさせる。さうして、この疑問を解決するために、大砲を製造する工場へ児童を案内する。

實際工場へ行つてみると、種々様々な機械が、絶えず活動し、複雑な工程を経て、鐵の塊から、精巧な近代兵器が製造されてゐる。この文章では、その複雑な工程を整理し、單純化して、児童の理會の程度に即して重點的に示してある。

大砲を作る工場へ行つてみると、大きな電気仕掛の製鋼爐があり、どろどろに溶かした鋼鐵を、大砲の形とは似ても似つかない鑄型へ流し込んで鍛へやすい形にする。鑄型から取り出された鐵の塊には表面に瑾ができる場合があるので、それをけづり取り、更に赤熱して、水壓を利用した機械に掛けて十分鍛鍊する。

いつたい砲彈は、爆發した火藥ガスの膨張する壓力で撃ち出されるが、その壓力は、二千氣壓乃至三千氣壓にのぼることは珍しくない。然らば砲身の每平方糎に、二トンから三トンの壓力が加る計算になるので、砲身はあらゆる方法によつて、高壓力に堪へ得られるものを作らなければならぬ。それにはいろいろの方法があるが、ここでは、かかる技術上の専門にわたることを避け、砲身の鍛鍊と、燒きを入れる極く大まかな過程がわかりやすく表現されてある。即ち、大きな鐵の槌が、ごとんと地響きをたてながら、臼のやうにつぶしたり、棒のやうに延したりして、十分にきたへますといひ、そのやうすを、まるで、つきたて

の餅を手でまるくしたり、長くしたりするのと同じやうに、大きな機械が、思ふままに、鐵のかたまりを手玉に取つてゐるので、と譬喩を以て説明し、かうして、きたへにきたへるのですが、それだけではまだ足りないことをいつてゐる。それではどうすればよいか。即ち、長い柱のやうに延されたこの鐵が、今度は、起重機につられながら、せいの高い大きな爐へ入れられて、高い溫度で熱せられたり、深い油の桶の中へ、眞赤なからだを沈めたりして、燒きを入れ、鋼鐵の質を鞏固にしなければならぬ。このやうに、打つたり、熱したり、冷したりして、鐵の質を固くし、強くする鍛鍊の有様が、目に見えるやうに書き表されてゐる。

「鐵の質を固くし、強くしなければ、あの力の強い火藥を一時に爆發させて、大きな砲彈を撃ち出すやうな、がんじやうな大砲にはならないから、それを、ちやうどみなさんが、暑さや寒さにうち勝つて、からだや心をきたへて行くのと、同じことだ」と、兒童の生活と直接結び、砲身の鍛鍊の意義を兒童に體得させるやうに書かれてあるのである。

かうして、がんじょうな砲身が鍛へられると、次にはこれを精製して行かなければならない。今度は機械に掛けられて、外側がまるくけづられる。さうして、黒くて、ざらざらしてゐる表面が、しだいにはぎ取られて行くと、始めて、あの鋼鐵の白い光が、かがやき始めるやうになる。

このやうな作業は、もちろん大人の手によつてなされるが、高等科を卒業して二三年ぐらゐの若い職工さんの細心な注意と熱心な働きによつてもりつぱになされる。かうして、この學年の兒童に身近な少年工の工場に於ける勤勞の姿を描出して、教材と兒童との間に寸分の隙がないやうに考慮が拂はれてゐる。

砲身の外側が仕上げられると、次には、砲彈を撃ち出す通路が切り抜かれる。その有様を、まるい鋼鐵の棒の先についてゐる、すうどい刃物がぐるぐるまはりながらやつて来る砲身の中へ、ぐいぐいとくひ入つて行きますと、敘し、ほんの少しでも、あけ方がくるふと、大砲の役目を果たすことができなないので、職工さんは、張りつめた氣持で、機械が運轉する

のを、じつと見つめてゐますと、機械の操作と人間の働きとが一體となつて、精巧な兵器ができあがることをわからせてゐる。

「かうした仕事がもう一度くり返されて、砲彈の通る路ができあがるのであるが、實際は更に砲身の内側へ、腔綫が幾條も刻みつけられるのである。しかし、それまで示すことはこの學年の理會の程度を越える心配があるので、省略されてゐる。

「このやうに、いろいろな仕事を重ねて、やつと一本の砲身ができあがるのであるが、しかし、砲身ができただけでは、まだ、大砲がすつかりできあがつたとはいへない。砲身をのせる、鋼鐵で作つた臺即ち砲架も、砲彈を込めて撃ち出す時、砲身の根もとを固くふさぐ閉鎖器も、同じ工場て、受持受持によつて、分業的に作られ、かうして作られた部分部分も最後には職工さんたちの力強い手で、だんだん組み立てられて行く。

このやうに、近代工業の分業的生産過程の面が捉らへて描き出されてある。

以上、大砲の重要部分である砲身砲架閉鎖器について説明してあるが、その外に大切なものとしては、目標にねらひをつける照準器、砲彈を發射した際、後退した砲身をもとの位置に復させる駐退復座機などもある。しかし、ここではそれらには一切觸れてない。

全部の組立てが終ると、塗料が塗られ、いつでも砲彈が撃ち出される威容を示すやうになる。その有様を、高射砲は、まるい鐵の臺の上で、砲身を空へ向け、今にも飛行機を撃ち落としさうなかつかうになります。ゴムの車輪の上にとりつけられた、小がたの對戰車砲は、どんなに早く走る戰車でも、どんな撃ちまくるやうな身がまへになります。野砲も、重砲も、ずらりと大きなからだを横たへて、さあ、いつでもお役にたつぞと、どつかり身がまへるやうになりますと書き表し、それに引き續いて、かうして、いろいろな大砲が、どしどし作られて、日本の國をしつかり守つてくれるのですと、大砲が國防上重大な意義と役割を果すことを主體的に表現し、大砲が國を守り、敵を撃ち破ると同じやうに、兒童もお

のおの國土防衛の戰士であることの自覺を、この表現を通してさとらせるやうにしてある。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。複雑な工場を單純化して書き表されてある點に注意し、題目にも關係づけて冒頭にあげられたいろいろな大砲に留意させ以下はこれらの大砲の作り方を敘述したものであることをわからせる。大砲の作り方は砲身を中心とし、その他のものの作り方に及び最後に作りあげた大砲が勇ましく並んでゐるさまを敘してゐることを讀み取らせる。砲身の作り方は、鑄型に流し込まれた鐵塊が次第に鍛へられて外側ができ、次に砲身の中に穴をあけられる順序を節を追うて理會させ、機械工業の偉大な力に感じさせるやうに指導する。

話すこと 文章挿畫を中心として、大砲の作り方について話合をさせる。枝葉の間に深入りしないで、作り方の大體の筋道を明らかにさせるやうに指導することが大切である。

書くこと 新字、讀替の文字を中心として指導する。「鋼」「釜」「鑿」「鐵」「轉」等複雑な文字

が多いから、扁旁等にわけて字形筆順に注意し、確實に書かせる。
次の如き文によつて書取を練習させる。

戦車の厚い鋼鐵の板を射抜く。

大きな電氣仕掛の釜の中で、白熱された鐵がとけてゐます。

大きな鐵のかたまりは、眞赤に燒かれます。

打つたり、熱したり、冷したりして、鐵の質を固くし、強くします。

あの力の強い火藥を一時に爆發させて、大きな砲彈を撃ち出します。

高等科を卒業して二三年ぐらゐの、若い職工もゐます。

砲身のまるみを計ります。

砲彈を撃ち出す通路が、切り抜かれます。

職工さんは、張りつめた氣持で機械が運轉するのを、じつと見つめてゐます。

砲彈の通る路ができあがります。

砲身の根もとを固くふさぐものも必要です。

次のカナヅカヒに注意させる。

十分にきたへます

かうして、きたへにきたへるのです

からだや心をきたへて行く

かうしてきたへられた鐵の柱

（撃ちまくるやうな身がまへになります）

どつかり身がまへるやうになります

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

あつい（厚）——アツイ あつい（熱）アツイ

かま（釜）——カマ かま（鎌）——カマ

發音

工場——コーバまたはコージョー 電氣仕掛——デンキジカケ

取り出され——トリグサレ 眞赤——マツカ

地響き——ジビビキ 火柱——ヒバシラ

行きます——イキマス 撃ち出す——ウチダス

あけ方——アケカタ 日本——ニッポン

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 厚い 鋼(コ) 鐵 釜 冷し 卒業 職(シ) 工 通路 運轉 必要ヨ
讀替 白熱 眞赤(マッカ) 足り 火藥 砲身 路

語句語法

「高射砲」「鐵」「對戰車砲」「牽引車」「野砲」「重砲」「電氣仕掛」「白熱」「似ても似つかない」「がた」「きたへます」「爐」「止つたとたん」「表面」「火藥」「砲彈」「がんによう」「外側」「はぎ取られ」「卒業」「職工」「砲身」のまるみ「通路」するどい刃物「運轉」必要「受持」「身がまへ」等は、指導を要する語句である。

次の如き文例によつて助動詞「られる」「れる」に注意し指導の心構とする。

「こしらへられるでせう。」

「爐へ入れられて、高い温度で熱せられます。」

「かうしてきたへられた鐵の柱は、

固い砲身に穴があけられて行きます。」

「だんだん組み立てられて行きます。」

「ゴムの車輪の上にとりつけられた小がたの對戰車砲は、

「白熱された鐵がどろどろにとけてゐます。」

もう一度眞赤に焼かれます。

長い柱のやうに延されたこの鐵が今度は起重機につられながら、

起重機でつられたまゝ、そろそろと外へ出て來ます。

しだいにはぎ取られて行くと、

けづられて行く砲身のまるみを計つたり、

砲彈を撃ち出す通路が切り抜かれるのです。

受持受持によつて作られます。

次の如き文例によつて、比喩が敘述に役立つてゐることを理會させる。

「まるでつきたての餅を手でまるくしたり長くしたりするのと同じやうに大きな機械が、

思ふままに鐵のかたまりを手玉に取つてゐるのです。」

長い柱のやうに延されたこの鐵が、

それにちやうどみなさんが暑さや寒さにうち勝つてからだや心をきたへて行くのと、同じことなのです。

次の如き文例によつて擬人的な表現が敘述を生かしてゐることを理會させる。

「鐵の柱は熱い爐の中でじつとがまんをしてゐるのです。」

「鐵の火柱が起重機でつられたまゝ、そろそろと外へ出て來ます。」

二十 振り時計

一九二

眞赤なからだを沈めにかかります。

高射砲は、まるい鐵の臺の上で砲身を空へ向け、今にも飛行機を撃ち落しそうなかつかうになります。

小がたの對戰車砲は、どんなに早く走る戰車でも、どんな撃ちまくるやうな身がまへに、なりま。

野砲も、重砲も、ずらりと大きなからだを構へて、さあいつでもお役にたつぞとしつかり、身がまへるやうになります。

備考

連絡

初等科國語三「機械」と連絡して取扱ふ

二十 振り時計

教材の趣旨

本教材はガリレオが振子の等時性を発見したといふ傳説を基礎と

し、それをやや創作的に表現した文章である。

ガリレオが、ピサの寺院で動搖するランプから振子の等時性を発見したといふことや、その等時性の内容等については史的根據も十分でないが、振子を作つて糸の長さを變へていろいろ實驗したことは事實と考へられてゐる。動搖するランプの等時性を脈で測つてみたこともいろいろ傳へられてをり、ランプの動いた原因についても説がある。ただ創作上の心づかひとして、次のやうなことが考へられてゐる。即ちかういふ寺院の天井は、かなり高いもので、そこから吊りおろされたランプは相當の長さを持つてゐるはずであり、また相當の長さがあつて、振り方がかなり時間的であつたればこそ、等時性の発見の暗示を得られたのであらうと思はれる。

振り時計に仕組むことについては、ガリレオ親子はかなり工夫を進めたやうであるが、遂に成功しなかつた。ホイヘンスはオランダの學者で、彼はガリレオの振子の法則をもつと詳しく研究した人である。

さうしてこれを時計に應用することに成功したことは、廣く社會も學界も認めてゐるやうである。

元來發明發見は偶然のできごとによることが多いが、それは誰でもがよくなし得ることではなく、常にさうした方面に強い關心をもち、研究に没頭する人にして始めて眞理發見の契機を捉らへるに到るものである。かうした點からこの種の教材の教育的意義は深いものがあり、この教材を読むことによつて、兒童にさうした點を感得せしむべきである。

初等科國語二「ぼくの望遠鏡」、同三「國旗掲揚臺」と關聯し、ふとしたことから眞理を發見したガリレオの研究態度に氣づかせ、工夫創造の心に培ふべきである。

文章

文はまづピサの町に夕靄がたちこめて、日が靜かに落ちて行く夕景から筆を起し、ガリレオが動搖するランプに目をつけた伏線としてゐる。

うす暗い寺院の中で、番人が今し方火をつけた大きなランプは吊りさがつて靜かに動搖してゐる。「大きなランプが、ふと、ガリレオの心をとらへました」はランプを主體とした表現であるが、事實はガリレオの心がランプを捉らへたのである。何事にも注意深い彼は、そのランプを見逃さなかつた。じつと見つめてゐると、ランプは靜かに左右へ動いてゐる。ランプを捉らへた彼は更にその動搖にも氣付き、ランプの動き方を見つめたのであつた。その態度が既に科學的であつて眞理探究に眼を見張る若き學徒が想像される。ランプは「左から右へ、右から左へ」行つたり來たりするのに、その一回一回の時間が、どうやら同じであるやうに思はれた。ここに科學的な直觀が働いてゐることに注意しなければならない。

「何かで、驗してみろ方法はなからうか——一回一回の時間が同じやうに思はれる。その直觀を證明する方法に考へ及び、脈を取つてランプの動く時間を測定してみると、ランプが一回動く間に脈の數がほぼ

一定してゐることがわかり、更にランプの動きが次第に小さくなつて、かすかに搖れるだけでも一回の動きにやはり脈が二つ打つといふ事實によつて、證明はまづ成り立つたのである。しかも研究心の強い彼は、それだけでは満足してをられない、急いで家へ歸つて幾度となく實驗した。その結果次の事實を確認するに至つた。

糸を短くすれば、振り方が早く、長くすれば、振り方がおそくなる。

糸の長さを一定しておく、と、錘は重くても軽くても、振幅の大小にかかはらず、振る時間は同じである。

即ち振子の等時性を発見したのである。このあたり、文は次第に理知的な説明的態度を取り、條理整然としてゐる。

最後の一節はガリレオが発見した等時性をホイヘンスが應用して、振子時計を發明したことを述べたもので、文章の最後のしめくくりをなすものである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みが進むにしたがひ、ガリレオがおもりの振る時間が同じであることを發見し、ホイヘンスがこれを應用して振子時計を發明したことをわからせる。次に各節を讀ませてガリレオの發見はふとしたことから、科學的研究に入り、終に振子の等時性を發見するに至つたことを讀み取らせ、その研究態度とこれを應用して振子時計を發明したホイヘンスの功績とに感じさせるやうに指導する。

話すこと 文章挿畫を中心として、ガリレオが振子の等時性を發見するまでのことと、ホイヘンスが振子時計を發明したことについて話をさせる。

書くこと 新字讀替の文字を中心として指導する。「驗」「脈」「應」等複雑な文字もあるから、扁旁等にわけて字形筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

天井から大きなランプがつるしてありました。

「何かで、驗してみろ方法はなからうか。」

自分の脈を取つてみました。

おもりが重くても軽くても、大きく動かしても小さく動かしても振る時間は同

じです。

ガリレオの發見を應用して振子時計を發明しました。

次のカナヅカヒに注意させる。

有名な大寺院へ、お参りをしました

靜かに左右へ動いてゐます

左から右へ、右から左へ

急いでうちへ歸りました

左右へ振ります

ふとガリレオの心をとらへました

しばらく考へてゐた

注意すべき發音文字ことは等

訛音方言

お参り——「オマエリ」と訛らないやうに注意する。

動き方——「イゴキカタ」と訛らないやうに注意する。

ぐあひ——「ダワイ」と訛らないやうに注意する。

短く——「ミチカク」といはないやうに注意する。

發音

振子時計——フリコドケイ

行く——イク

うす暗く——ウスゲラク

左右——サユー

何かで——ナニカデ

仕組んだ——シクンダ

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 驗し 賑(ミヤク) 軽く 應(オ)用

讀替 時計(ケイ) 天井(ジョー)

語句語法

「タモヤ」學生「大寺院」今しがた「振り方」正確「發明」應用「仕組んだ」等は指導を要する語句である。

次の如き主體的ないひ表し方を指導し文意を理會させる。

天井からつるしてあるこの大きなランプが、ふとガリレオの心をとらへました。

次の如き正確ないひ表し方を指導し、文意を理會させる。

糸の長さを、一メートルなら一メートルにきめておくと、おもりそのものは重くても軽く

でもまた大きく動かしても小さく動かしても振る時間は同じです。

備考

連絡

よみかた三「らくかさん」同四「たこあげ」初等科國語一「月と雲」同二「ぼくの望遠鏡と連絡がある。

二十一 水族館

教材の趣旨

三月の初中旬ごろのある日、水族館に行き、水棲動物の生態を観察した記述で、観察に基づく生活的な表現である。「自然の観察である」ともに児童の主體的な感動の發露である。更に「おさかな」「ふなつり」「大れふ」「潮干狩」と關聯して、次第に水産的意義を深めて行くことにも注意すべきである。

主として児童に興味あるもの、殊に児童に親しみのある魚類を選び、その活動を中心にして表現したもので、珍奇なもののはわざと避けて、また餘り多種多岐にわたらないやうに注意されてゐる。随つて描き出されたものは、ある特定の水族館でなく、いはば紙上にくりひろげられた「児童水族館」と見ることができる。なほ、水族館は、季節によつて魚類が變るものであるが、本教材は大體三月のころと見て差支ない。

文章

児童が水族館を巡覽する順序に敘述が進んでゐて、観察する對象が變る毎に小段落がある。まづ「入口のそばの池」である。甲の長さが一メートルもある「うみがめ」を見て、こゝで早くも水族館らしい變つた空氣を感じ、これから展開するであらう好きな光景を豫想して胸を躍らせる。

最初の室の窓際のガラス箱に目を惹かれる。さうして、色とりどりの美しい色彩に、何だらうかと疑問を持つ。「ぼくは思はずが、次の、きれ

いだなあ。何の花ですか、にいさんの感歎疑問とよく結びついてゐる。「いそぎんちやく」や「いそばな」や「いぼやぎ」などを、子どもが花とおもつたのは、無理もないことで、却つてそこに情景が躍動してゐる。

「いそぎんちやく」「いそばな」「いぼやぎ」の形式は色彩と形態と両面から生き生きと描き出されてをり、小さなきんせんくわが、むらがつて咲いてゐるといふ、いぼやぎの形容も具象的で、兒童の理會に適當である。くらげを形容して「すき」とほつた寒天のやうなからだから、腕が何本も出てゐます」といふのは、人體に擬した表現で、兒童の主體的な感覺である。「體をしぼる」は、くらげが傘を收縮するのをさしてゐるのであつて、くらげの運動方法である。

室の中央の池には、いわしがゐて、それがおもしろい游動をしてゐる。二千匹にも上るいわしがみんなそろつて同じ方向へ泳いでゐる。しかも、内側と外側とがそれぞれ速度を調節し、一せいに廻つてゐるのは、おもしろい現象で、これはやや高級な觀察であるから、にいさんの注意

て了解するのである。

次の部屋へ行くと、魚を入れた水槽が並んでゐて、それを横から觀察するやうになつてゐる。この邊から敘述はいよいよ高潮し、魚類の動的な生態が生きて描き出されてゐる。「鯛の泳ぎぶりは、堂々としてをり」、「いういう」として見える。こせこせしてゐないやうすを、ほかの魚などには目もくれないと形容したのも主體的な表現で、おもしろく、その色彩美に對する感覺も繊細である。「あぢの敏捷活潑な動作を、輕快な戰鬪機に譬へたのは、胸びれをすつと左右に張り、背びれ、尾びれを上下に張つた恰好から來る實感であるとともに、兒童の興味に即した比喩でもある。さかな屋の店先に並べられてゐるのは全く違つた感じがするのは當然である。「はうぼう」の泳ぎぶりを「グライダーが空中をすべるやう」と譬へたのも、「あぢの場合と同様である。しかも普通の魚類と異なり、下を、このこ歩く」を見ては驚かざるを得ない。「かれひ」の泳ぎ方はまた獨特である。「かれひ」の特異な形態から來た變

つた泳ぎ方で、くねつて行くわけである。砂にもぐつた、かれひもまた
児童の興味をそそる。「たこもまたその特異な形態上おもしろい運動
をする。」「たこの頭に見えるところが胴であるといふに、いさんの説明
はこの場合まことに適切で、だから歩く時、ああいふふうに頭が傾いて、
へんなかつかうに見えるが、あれは胴なのだから仕方がない」といふ説
明には、滑稽味も感じられる。たこの泳ぎ方は、頭に見える胴體に海水
を吸ひ込み、それを漏斗いのはゆる口から急速に出して、その反動で進む
のであつて、足は前進方向の反對に揃へてゐる。その形態の無恰好さ
に似合はず、素早いのは少々驚かされたところである。

最後に「たかあしがにがゐた。」「たかあしがに」は本邦に産する蟹のう
ち最も大きなもので、左右の足をいつばいに延したら、三メートルぐら
ゐはあるてせう」といふ書きぶりには、大きなあといふ感激が暗に含
まれてゐる。さうして、その奇妙な恰好を仔細に觀察し、觸角を「人形
のかはいらしい手」と感じたのは子どもらしい感覺である。「しかも、その

手は、ピアノでもひくやうに、絶えず動いてゐます」と感じ、かには、ピアノ
の先生ですわといふことばには、思はず微笑を催させられる。ところが、
かに、いさんは、いさんらしく少しくむづかしい「タイピスト」を聯想した
ので、二人とも思はず笑ひ出してしまふのである。一文の結びとして、
いかにも印象的な興味ある表現である。蟹の觸角の運動をタイピス
トに譬へることは、實物を見ない児童には、あるひは多少理會が困難で
あるかも知れないが、普通の蟹でも觸角の運動はあるのであるから、適
宜それらを觀察させるなり、思ひ起させるなり工夫するがよい。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字、語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みが進
むにしたがひ、水族館へ行つていろいろな動物を見た敘述であることをわからせ
る。次に觀察した順序に、いろいろな珍らしい動物を讀み取らせ、その美しい色彩
や、變化ある形態や生態に興味を感じさせるやうに指導する。比喩が多く用ひら
れてゐるから、これによつて動物の生き生きとしたやうすを想像させるやうに讀

ませることが大切である。

話すこと 文章挿畫を中心として、本文中の動物について話合をさせる。水族館を

観覧した児童にはその體驗について話させ、本文の理會に資する。

書くこと 新字・讀替文字・略字を中心として指導する。「徑」と「輕」は同音の文字である

が、字義の異なることを明らかにし、扁旁にわけて字形筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて書取を練習させる。

寒天のやうなからだから腕が何本も出てゐます。

「その反動で、くらはげは運動するのだ。」

室の中央に、直徑五メートルぐらゐの、まるい池があります。

輕快なせんと、機といつたやうです。

「かれひは、平たいからだをくねらせて泳ぎます。

次のカナヅカヒに注意させる。

さうして、赤や、黄や、みどりの

さうだ。さうして、よくごらん

あるのださうです

「ぼくは思はず

かはいらしい、兩手を思はせます

二人とも思はずふきだして

注意すべき發音文字ことは等

アクセント

あぢ(慘) — アジ

あぢ(味) — アジ

あし(足) — アシ

あし(處) — アシ

訛音方言

いわし — 「ユワシ」と訛らないやうに注意する。

名前 — 「ナマイ」と訛らないやうに注意する。

低い — 「シクイ」と訛らないやうに注意する。

平たい — 「ヒラツタイ」といはいやうに注意する。

もぐつて — 「ムグツテ」と訛らないやうに注意する。

割合 — 「ワリヤイ」といはいやうに注意する。

發音

行き — イキ

入口 — イリグチ

何とも——ナントモ

何の花——ナンノハナ

ああして——アーシテ

何と——ナント

胸びれ——ムナビレ

左右——サユー

上下——ジョーゲ

頭——アダメ

二人——フタリ

ことばの中または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 反動 直徑(徑ケ)

讀替 寒天 輕鞋(ケ)伏 平たい

語句語法

「水族館」中の長さ「反動」「運動」「直徑」「目もくれない」「胸びれ」「背びれ」「しりびれ」「輕快な戦闘機」「くねらせて」「見當がつきません」「へんなかつかう」「觸角」「ビヤノ」「ダイビスト」等は指導を要する語句である。
「うみがめ」「いそぎんちやく」「いそばな」「ひのき」「きんせんくわ」「いぼやぎ」「くらげ」「寒天」「いわし」「あち」「はうぼう」「かれひ」「たこ」「たかあしが」等は挿畫または實物繪畫寫眞等により指導する。

次の如き比喩につき指導し、文意を理會させる。

ひのきの葉のやうな形で黄色やえび茶色をしてゐるのは、いそばなでありました。
小さなきんせんくわがむらかつて咲いてゐるやうなのは、いぼやぎでありました。

すきとほつた寒天のやうなからだから、觸角が何本も出てゐます。

ときどきからだをしぼるやうにして、すいすいと浮きあがります。

輕快な戦闘機といったやうです。

その胸びれは扇のやうにひろがります。

ちやうど、グライダーが空中をすべるやうに、手ぎはよく水を切つて、おりて來ます。

八本の足を一つにそろへ、觸角を先頭に、まるで矢のやうに進みます。

小さな觸角があつて、それがちやうど人形のかはいらしい、兩手を思はせます。

しかも、その手はビヤノでもひくやうに、絶えず動いてゐます。

備考

参考

挿畫は、百十頁上方「いそぎんちやく」、下方「いそばな」、百十一頁「いぼやぎ」、百十二頁「いわし」、百十四頁「鯛」、百十五頁「あち」、百十七頁「たこ」、百十八頁「たかあしが」にの寫眞である。

(以上 二月)

二十二 母の日

教材の趣旨

三月六日國母陛下の御誕辰を祝し、御徳をしのび奉ることに因んで、この日を家庭では母の日とし、子どもたちが母の勞苦をしのび、感謝の心を表すこととする。比較的、新しく一部の家庭に行はれる行事で、まだ一般化されてゐるわけではないが、母に對する兒童の眞情をそのまま孝の實踐に導き得る面からいつても、またそれを母の誕生日といふやうな個人的な日にしないで、佳辰に因んで行ふことからいつても、教育的に見のがすべからざる意義をもつてゐることが考へられる。

本教材はこの日を主題とし、兒童の行動をさながらに表現したもので、兒童には感興の深いものであるに相違ない。特に母といふ關係にふさはしく、登場する子どもも、私は花子であり、その姉と、無邪氣な弟の

一郎を配して、主として女性的な感情によつて書き表されてゐる。もちろん母の愛撫感化やそれに對する感謝思慕の情が女兒專有のものであるはずはなく、かの忠勇なる皇軍將士の背後に、かくれたる母の力が強く働いてゐることを考へ合はせ、特に皇國女子たる母の犠牲的精神が、男女を問はず兒童に偉大な感化を及してゐることに留意して、この教材を指導することが大切である。

文章

文章はおのづから二つの部分に分けることができる。一つは「母の日」の朝のありさまを敘した部分であり、他は「母の日」の夜の情景を表した部分である。

朝の場面では、母親が起床しない間に、子どもたちが、それぞれ仕事を受け持つて活動する。「そうつと、靜かにお仕事をしませうね」といふ姉のことばに従つて、私は音のしないやうに起きて、着物を着かへたとか、「一郎さん、ゆうべのお約束よ。さ、靜かに起きませうね」など、たどり讀む

間に、きやうだいは何かゆうべの約束によつて働いてゐることはわかるが、一體何のためにさうしてゐるのか——兒童に好奇の心を起させつつ、讀ませるやうに筆が進めてある。

ねえさんが御飯をたき、私といふ花子が飯臺を出したり、食器を並べたりする。弟の一郎まで、眠い目をこすりながら起きて庭はきをする。みんなが、いつしよに働いたので、朝の支度はすぐできあがつた——たとへ子どもたちの小さな力でも協同してやれば、それ相當に大きな働きができることを言外に表してゐる。

「何か花をかざりたいものです」といふねえさんの思ひつきには、いかにも女らしいやさしさがあつた。おかあさんのおすきな花のつばきの花を手折つて来る花子のしぐさにも母への心づかひがこもつてゐる。「そこへ、おかあさんが起きていらつしやつて、子どもたちの思ひがけない働きにびつくりし、喜びもし、ふしぎにも思ひ、けさはどうしたのです、こんなに早く起きて——」といひ、朝御飯の支度もちやんとできてと

びつくりする。その驚きは、そのことばが逆敍になつてゐるのによつてもよくわかる。さうして、これに答へる一郎の無邪氣な得意さうなことば——「今日は母の日です、から、おかあさんのお手傳ひをしたのです」といふので、母ばかりでなく讀む兒童も始めてなるほど、とうなづくことになる。

以下母のよろこびのことばを受けて、父も、それは、えらい。感心なことだとほめる。その反面に子どもたちのうれしい満足が思ひやられる。

ここまでは朝の場面であるが、以下場面が變つて夜の催しが描かれてゐる。

「ただ今から、母の日のお祝ひをいたします」と、一郎が司會者になつた形で、行事が進行する。

まつさきに、一郎が綴り方を讀み、つづいて私は國語の「萬壽姫」を讀み、ねえさんが「母」といふ唱歌を歌つた。

それがすむと、こんどは、おかあさんに記念品をさしあげるといふのである。「一郎さんが、一枚の繪をさしあげ、私が自分でこしらへた前掛け、ねえさんは、ひもであんだきれいな買物袋をさしあげる。それらはすべて子ども自身の工夫と技能とを生かしてゐることに注意すべきであり、これに對して母親は、おやおや、おかあさんを、かいてくれましたね。これはありがたう。一郎さんとお禮をいひ、よく似あひますね。かはいいいぬひとりで」と前掛けをあてて見せ、これは、いいものをもらひました。毎日の買物に持つて行きますやうにうれしさうにいつで、それぞれそのお禮のことばに母親らしい心持が溫く現れてゐることにも注意すべきである。

この楽しい「母の日」も、今日はいいい日だったね」と喜ぶ父親のことばによつて終りを告げてゐるが、全文にみえぬ一家の和樂、親子の眞情が汲まれて、ほほゑましい感じのする文章である。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、確實に讀ませる。會話の部分は特に注意して會話らしく讀ませるやうにする。讀みが進むにしたがひ、母の日に子どもたちが心を合はせて母を慰めたことが書いてあることをわからせる。次にその日の朝手分けをして朝御飯の支度をし、その夜は發表會をして母を喜ばせた心持に共感させるやうに指導する。

話すこと 次の會話の部分を讀ませ、その人物を明らかにして劇的に對話を練習させる。

「そうつと、靜かにお仕事をしませうね。一郎さんは、もう少したつてから起しませう。」

「ねむいな。」

「一郎さん、ゆうべのお約束よさ、靜かに起きませうね。」

「あ、さうだつた。」

「ぼくは、庭はきをするのでしたね。」

「すあふん寒いな。」

「もうちき六時ね。今日はお祝ひの日ですから、何か花をかざりたいものですね。」

「きれいなつばきね。おかあさんのおすきな花だから、ちやうどいいでせう。」
「まあ、けさはどうしたのです、こんなに早く起きて——それに、朝御飯の支度もちやんとできて。」

「今日は母の日ですから、おかあさんのお手傳ひをしたのです。」

「けさは子どもたちが早く起きて朝御飯の支度からお庭のさうちまで、私の知らないうちにすつかりしてくれたのですよ。」

「それは、えらい。感心なことだ。」

「ただ今から母の日のお祝ひをいたします。初めにぼくが綴り方を讀みます。」

一郎「ぼくのおかあさんの綴り方を讀む。私「萬壽姫」を讀む。ねえさん「母の唱歌」を讀む。」

「おしまひに、おかあさんに記念品をさしあげます。」

「何をいただくのでせう。」

「おやおや、おかあさんをかいてくれましたね。これはありがたう。一郎さん、よく似あひますね。かはいいいぬひとりだこと。」

「これは、いいものをもらひました。毎日の買物に持つて行きませう。」

「これはこれは、今日はいい日だったね。」

次の如きことばづかひを比較して、敬語の用法になれさせる。

「おつしやつた」

「おつしやいました」

「いはれた」

「いはれました」

「いつた」

「いひました」

書くこと 新字を中心に指導する。字数は少ないが、「違」「綴」「題」いづれも複雑な文字であるから、偏旁等にわけて字形・筆順に注意し、確實に書かせる。
次の如き文によつて書取を練習させる。

部屋の中が、いつもとは違つてゐるやうに思はれた。

初めにぼくが綴り方を讀みます。

題は「ぼくのおかあさん」といふのであつた。

次のカナヅカヒに注意させる。

「お仕事をしませうね」

「少したつてから起しませう」

静かに起きませうね
ちやうどいいでせう
何をいただくのでせう
持つて行きませう

といふと
といひながら
といふのであつた
母といふ唱歌

注意すべき發音文字ことは等

アクセント

あさ(朝) — アサ あさ(麻) — アサ
はな(花) — ハナ はな(鼻) — ハナ
つばき(椿) — ツバキ つばき(唾) — ツバキ
けさ(今朝) — ケサ けさ(袂婆) — ケサ

訛音方言

塞い — 「サブイ」といはいやうに注意する。

びつくりなきつた — 「ビツクラナスッダ」といはいやうに注意する。

お祝ひ — 「オユワイ」と訛らないやうに注意する。

似あひ — 「ニヤイ」といはいやうに注意する。

紐 — 「ヒボ」の訛を矯正する。

發音

飯臺 — ハンダイ

出して — ダシテ

行くと — イクト

はうき — ホイキ

今日 — キョー

お手傳ひ — オテツグイ

その夜 — ソノヨ

真中 — マンナカ

何を — ナニオ

ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 違つて 綴(ツズ)り方 題

語句語法

次の如き助詞に注意し、その用法になれさせる。

そうつと静かにお仕事をしませうね。
静かに起きませうね。

ぼくは庭はきをするのでしたね。
もうぢき六時ね。

何か花をかざりたいものですね。
おかあさんをかいてくれましたね。

よく似あひますね。
今日はいいい日だったね。

ねむいな。

するぶん寒いな。

私の知らないうちに、すっかりしてくれたのですよ。

次の如き文例によつて接続詞、それから注意し、適切な用法になれさせる。

私は飯臺を出してふいたり、みんなのお茶わんや、おはしや、おわんを並べたりした。それから一郎さんを起しに行く。

私は國語の萬壽姫を読んだ。それからねえさんは「母」といふ唱歌を歌った。

備考

連絡

初等科國語三「光明皇后」、同四「萬壽姫」と女子向の教材として連絡がある。

二十三 防空監視哨

教材の趣旨

冬の雪の日も、炎熱やくが如き夏の日も、雙眼鏡を片手に、大空をにらんで立つ山の上の防空監視哨、それは大東亞戦争以來ひとしく國民の注視の對象となり、兒童の關心と興味も、それに向けられるやうになつて來た。しかし、防空監視哨の實際については、未だ理會が行きとどいてゐない。

本教材は、この國土防衛上重要な意義を有する防空監視哨を韻文によつて表し、楽しく唱誦させるうちに防空監視員がどんな任務のもとに、どんな心持で、どんな仕事に従事してゐるかを感得させようとした

ものである。かくして、国土防衛は防空によること多き戦時下はもちろん、平時に於いても大切な防空に對する觀念を啓培し、皇國民たるの資質の育成に寄與しようとするものである。

文章

四句七聯からなる定型によらない韻文で、その書き表し方は、防空監視員が、兒童に親しく呼びかけ、自分自身の感情と體驗とを語ることによつて、防空監視哨の全貌を描き出すやうな手法によつてゐる。

第一聯に於いて、「あの山の上の人影は」と、あなたがたは思ふでせうと、兒童を目の前に置き、それにやさしく話しかけるやうな親しさで書き始めてゐる。山の上にある防空監視哨では夜となく晝となく監視員が常に見張りをしてゐる——それはいつたい何をしてゐるのやらうかと、兒童は疑問を起すに相違ない。このやうな兒童の心と一體的な立場に立つて、この韻文は歌ひ出されてゐる。さうして、それが、いつも、ここに、かうして立つてゐる私たちなのですと親切に兒童の心に

答へつつ、兒童と防空監視員とを結んでゐる。

第二聯は第一聯の「いつても、ここに、かうして立つてゐるのです」を直接受けて更に具體的に擴大し、「雨の日、風の夜、夏の太陽がやけつくやうなまひる時、冬の風が骨をさしとほす朝でも、あの山の上の監視哨に、かうして立つてゐる」といふのである。その場合、第一聯の「いつも、ここに、かうして立つてゐる」の終りの句が、第二聯の「いつまでも、ここに、かうして立つてゐる」と呼應し、同語乃至類似語の反復による流暢な諧調をこの二聯に與へてゐる。

第二聯までは、この韻文のいはば總説的な序であるが、第三聯に到つて、冬がすんで、また、明かい春が來ましたと、春の一時期に場面を固定させ、その時期、その立場に、兒童を導き、三月の教材として與へられるこの韻文を、兒童の生活の中に、生かす用意がなされてゐる。

「水のやうに澄んだ空を、雲が、眞綿を散らしたやうに飛んでゐます」は、第二聯の「雨の日、風の夜、夏の太陽がやけつくやうなまひる時、冬の風が、

骨をさしとほす朝とは反對に、水のやうに澄んだ空を、雲が眞綿を散らしたやうに飛んでゐるなどやかたのびのびとした春の監視哨の氣分を表現し、明かるい春が來ましたの一句の意味を、自然に卽した氣持の上で生かしてゐる。

この春風駘蕩たる春の山上の監視哨に立つて、雲が眞綿を散らしたやうに飛んでゐる、水のやうに澄んだ、この大空のはてのはてまで、私たちはからだ中を目にし、からだ中を耳にして、じつと、にらみ渡してゐるのですと、第三聯までで、防空監視員の周圍を描いてゐた筆を、第四聯に於いては、徐々に監視員自身に向け、監視員の氣持や行動を中心として寫し出してゐる。その場合、からだ中を目にし、からだ中を耳にしては、全身の神經を目と耳に集注して、機影と爆音に注意するやうすをいたものである。

第五聯に於いては、今にも、もし、空のどこかに、かすかなうなり聲が聞え、飛ぶ虫の群のやうに、飛行機が見えたらと假想することによつて、私

たちの全神經が、いなづまのやうに動きますといひ、第四聯の、からだ中を目にし、からだ中を耳にして、じつと、にらみ渡してゐる監視員の全神經に動きを與へてゐる。

このいなづまのやうに動く神經は、飛行機の、現れた時刻とその、方向と、その、飛行機は敵の飛行機か味方の飛行機か、大型か中型か小型か、何十機の編隊か、飛んでゐる高度は幾メートルであるか、また飛び進む方向は、どの方角であるかといふことを、す早くとらへ、監視員は直ちに、電話に向かつて、第七聯に示されたやうに、極めて簡単に報告する。

機影を發見し、寸刻を争つて報告する時の動作が、短い切れ切れのことばを並べることによつて、さながらに表され、詩としての纏りと、落ちつきを、私はすぐ電話に向かつて、かう叫びます、最後の一句によつて與へてゐるのが、第六聯である。

最後の第七聯は、第六聯を直接受け、電話に向かつて叫ぶ簡潔な報告のことばそのままを敘して、この韻文の締めくくりとしてゐるが、これ

は、報告のことばの中に詩を見出したことで、前六聯の表し方とは、趣を異にし、この詩全體に變化を與へてゐる。

「五番は監視哨に附せられた番號であり、五番即ち、春山監視哨を意味してゐる。本來ならば、五番といふだけで十分であるが、春山監視哨と更に報告することによつて、報告に誤のないことを期するのである。

「春山監視哨」は、季節に因んで、命名された一つの假想的な固有名稱で、實際には、監視哨の置かれてある所の名稱を以て呼ばれるのが普通である。「三十七分は、何時何十分といはないところに、急を要する報告の形式がみとめられ、北敵、中型、三十、三千、南東は、いづれも第六聯の、方向、敵か、みかたか。何型が何十機。飛んでゐる高さは、方向は、に即した報告のことばである。最後の、をはりつは實際の報告の場合には用ひられないが、韻文としての口調を整へるためと、韻文全體に最後の休止符をうつ効果を擧げるために置かれた扇の要の如き一語である。

取扱の要點

讀むこと

文に即して發音を正し、文字語句等を指導し、韻律を生かして確實に讀ませる。定型によらない韻文であるがそのうちにおのづから韻律のあることに氣附かせて讀みを指導する。讀みが進むにしたがひ、防空監視哨の監視員が休むことなく警戒してゐることをわからせる。晝も夜も雨の日も風の夜も夏も冬も、いつも緊張して監視哨に立つてゐる勞苦を想像させる。さうして一度飛行機のない聲を聞くや、全神經を活躍させて敵みかたを判斷し、電話で速報する勇ましい働きぶりに想到させ、國土防衛の國民的感情を昂揚させるやうに指導する。讀みを反復し、自然に暗誦に導く。

話すこと 文章挿畫を中心として、次の如き問によつて話合をさせる

「防空監視哨は、どんなところにありますか。」

「どんなにして敵の飛行機を監視してゐますか。」

「飛行機のない聲が聞えると、どんなにしますか。」

「電話に向かつてどういひますか。」

書くこと 新字讀替文字略字を中心として指導する。「群」「經」等は複雑な文字であるから、偏旁等にわけて字形筆順に注意し、確實に書かせる。

暗誦を利用して全文を詩の形のまま書寫させる。その際に次のカナヅカヒに注意させる。

人かげは
あなたがたは思ふでせう
かうして
骨をさしとほす
かうして立つてゐるのです
飛んでゐます
私たちは
からだ中を
じつとにらみ渡してゐるのです
聲が聞え
飛行機が見えたら
飛んでゐる高さは、方向は
私はすぐ電話に向かつて、かう叫びます

をばりつ

注意すべき發音文字ことば等

訛音方言

にらみ——「ネラミ」といはいやうに注意する。
見えたら——「メエクラ」といはいやうに注意する。
動きます——「イゴキマス」の訛を矯正する。

何十機——「ナンジュウキ」といはいやうに注意する。

發音

風の夜——カゼノヨ

大空——オーゾラ

うなり聲——ウナリゴエ

虫の群——ムシノムレ

何型——ナニガタ

何十機——ナンジツキ

中型——チュウガタ

南東——ナントー

ことばの中または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 何型

讀替 群 神經(経ケ) 電話

語句語法

次の如き省略または短句を用ひたいひ表し方を指導し文意を理會させる。

「あの山の上の人かげは。」

とあなたがたは思ふでせう。それが、

いつもここに、

現れた時刻方向、

敵か、味か。何型が何十機、

飛んでゐる高さは方向は、

「五番春山監視哨、

三十七分、北、

敵中型三十、

三千、南東、をはりつ、

次の如き對句などによるいひ表し方を指導し文意を理會させる。

「雨の日、

風の夜、

夏の太陽がやけつくやうなまひる時、

「冬の風が骨をさしとほす朝、

からだ中を目にし、

からだ中を耳にして、

次の如き比喩によるいひ表し方を指導し文意を理會させる。

水のやうに澄んだ空を、

雲が真綿を散らしたやうに飛んでゐます、

飛ぶ虫の群のやうに飛行機が見えたら、

私たちの全神経がいなつまのやうに動きます。

二十四 早春の満洲

教材の趣旨

満洲の四季の中でも、もつとも楽しく、希望に満ちた早春の情景を描いて、満洲に對する憧憬の念を深め、親愛の情を増さうとするものである。即ち満洲に於いては、春を待つ心がいかに切實なものであるか、長い冬

が去つて春光がさしそめたころの嬉しさは、いかに大きなものであるか、その心情を風景風物と結び、印象的に敘述して、大陸早春のやうすを想像させ、日満親善の素地に培ひ、日滿一體たる國家的使命を感得させようとするのが趣旨である。

文章

長い間、嚴寒にとざされてゐた満洲の人たちが、ひたすら待ちこがれるものは、何といつても温い春の來ることである。二月が去つて、三月に入ると、やうやく春のきざしが現れて、野に、山に、空に、生氣を帶び始める。

季節の變りめの鮮かな大陸で、この時ほど、天地自然が活氣づき、しかも美しく潑刺と見える時期は、ほかにあるまい。

本教材は、この満洲早春の諸風景中、特に子どもたちの生活感情に即して次の五つの情景をとりあげ、これを連續的に關係を持たせつつ排列したものである。

一、スケートのこと

二、蒙古風のこと

三、家の中のやうす

四、戸外のやうす

五、渡り鳥のこと

全文が現在形を以つて書き表され、感覺的な筆致によつて寫實的に描かれ、聯想を基調として構成されてゐるために、一見、散文詩のやうな感じを與へるのも、この文章の一特色である。

冒頭に、三月の聲を聞くと、満洲でも、春らしい日光がさして來ますと書き、全文をまづ一まとめにした形になつてゐる。

初めに冬から春へ移り行く季節的變化を子どもらしく具體化するために、スケートをとりにあげ、スケート場の氷もとけたこと、スケートの手入れをして、しまつて置くことを敘し、スケート遊びと別れるのはいやですが、春の來ることは、子どもたちには實に大きな歡喜であると述べてある。

次に春先きの名物ともいはれる蒙古風のことを書いてある。天も

地も黄塵でおほひながら堂々と吹きすさぶこの大きな季節風は、いかにも男性的で大陸らしい光景であるが、天日ために暗く、室内では燈火がほしいほどになる。それだけ蒙古風の吹き去つたあとの天と地の明かるさといふものが、いつそう嬉しく、爽やかな感じを與へる。かうした天然自然の描く明暗二色も、大陸早春の一點景であり、よみかた四「北風と南風」もおのづから想起されるところである。

さて、冬中お世話になつてゐただんろや、ベチカや、オンドルなどを取りはづすのも、新鮮な晴れ晴れとする喜びである。

零下二十度、三十度とくだる寒さを防いでくれた暖房、なくてはならない大事な暖房、いつも一家團欒のなかたちとなつてくれた暖房であつた。この暖房への親しい氣持が「お世話になつた」といふことばや「お別れです」といふ擬人的な表現の中に現れてゐる。

今までは、窓を二重に閉ぢて、部屋の中を温めてゐたのであるが、暖房を取り除いてしまふころには、もう窓をすつかり開いて、澄みきつた春

の外氣を、部屋の中いづばい入れることができる。「部屋の中のごつた空氣が出て行つて、きれいな空氣が流れるやうにはいつて來るとあるのは、この時のやうすを感覺的に敍したものである。

かうなると、今まで家の中に閉ぢこめられて暮らしてゐたものが、一度に顔を出す。「鳥かどがつるし出され、鉢植の草花が持ち出され、子どもたちの顔が並ぶ。このほかに、金魚鉢も、人形も、毬などまで並べられる。いはば、子どもたちの太陽を慕ふ心が、そのまま開かれた窓にさらけ出されたやうな賑かさである。

そこへ「明かるい日光がまぶしいやうに降り注ぎ、小鳥の羽に、草花の葉に、子どものほほにあたる。春の光を浴びた、みんなは嬉しくてならない、單なる嬉しさを通り越して、自然の恵みに感謝したいやうな氣持になり、ありがたい」とほんたうに思ふのである。

この春の恵みにこたへるが如く、眞先に「花をつけるのは、れんげう」である。「れんげうの花は、眞黄色で、しかも、それが、枝一面に咲くので、見る

からに華やかなもので、その邊がばつと明かるくなるほどである。春が笑ひ出したやうなこの連翹のそばに、子どもがよく集つて来て、わけもなく喜んでゐるのも、好ましい早春の情景である。

小鳥を愛する満人たちが、めいめい飼つてゐる小鳥を外に持ち出して来て、しきりに鳴かせるのもこのころである。鳥は満洲ひばりて、鳴き聲は、日本内地の鳥などで聞く雲雀の聲によく似たいかにも、楽しさうな朗らかな響きである。満洲ひばりも、久しぶりに廣い空を見、澄んだ空氣を吸つて、「さもうれしさうにさへづり」といふ主體的な表現によつて、早春の歡喜を示唆し、そばにしゃがんだり、腰掛けたりして、いつまでも聞きとれてゐる満人のやうすを敍し、悠長な大陸早春を具體的に寫し出してゐる。

満洲の木を代表するかのやうに、いたるところにやなぎが生えてゐる。そのやなぎが、ほかの木よりも早く目をさまして、一齊に青みをおびてくるおほらかなありさまと、夕やけの空を日が落ちて行く光景と相俟つて、大陸ならではの見ることできない雄大な情景を描き、やなぎの「うすみどり」に對して、大きな夕日の「赤々」と映える色彩の美を配したところに早春の生氣を表象してある。このやうに、のどかな春が繪のやうにひらけて行くといつしよに、春のいそがしい仕事が始り、生き生きとした活動が、自然界に、人間界にいとなまれて行くことが述べてある。

たとへば、雁の群が、「さかんに空を渡つて行くが、これは、シベリヤの野山に卵を生まうとして飛んで行くのであり、遠く日本から来て、」玄界などを越え、それからもつともつと北をめざして、飛んで行く。ここでは初等科國語四、燕はどこへ行くと思ひ合はされて、渡り鳥の生活が思ひやられる。

また、かささぎは、「あちらこちら飛びまはるやうになるが、これは、巢を作らうとするためである。この鳥は、毎年新しい巢を作るといふ習性を持つてゐる。」

農夫たちは、いち早く、廣い、廣い畠を耕し始め、種蒔きの準備にとりかかる。

かうして早春のいぶきは、すべてのものを蘇生させて、誕生させて行く。
終りに、大豆や、かうりやんなどの種をまくころは、もう満洲の春が深くなつてゐますと書き添へ、満洲に於ける春色甜なるころを偲ばせつつ、餘韻を残して、結んである。

取扱の要點

讀むこと 文に即して發音を正し、文字、語句等を指導し、確實に讀ませる。讀みが進むにしたがひ、満洲の早春のころのやうすが書いてあることをわからせる。三月になると満洲でも春らしくなつて行くことを讀ませ、スケート場の氷がとけ出し、蒙古風が吹いてベチカやオンドルでよかれた空を拂ひ、二重窓が開かれて人々が春を楽しむことや、四圍の景物が次第に春めいて行く早春の満洲を思はせ、大陸のおもむきを感じさせるやうに指導する。

話すこと 文章挿畫を中心として、早春に於ける満洲の風物について話合をさせる。書くこと 新字讀替文字略字を中心として指導する。新字は少いが、邊、農はともに複雑な文字であるから、扁旁等にわけて字形筆順に注意し、確實に書かせる。

次の如き文によつて、書取を練習させる。

早春の満洲はおもむきの深いものです。

まうこ風は、まうこの奥から吹き起つて大陸を吹き渡り、海を越えて、日本から、太平洋まで吹いて行きます。

石炭のばいえんでよかれた空が拂はれてしまひます。

明かるい日光が、小鳥の羽に、草花の葉に、子どものはほに降り注ぎます。

れんげうの黄色な花の色で、その邊が、ばつと明かるくなるほどです。

見渡すかぎり平な地平線に、大きな夕日が赤々とはいつて行きます。

農夫たちは、廣い、廣い畠を耕し始めます。

次のカナヅカヒに注意させる。

三月の聲を聞くと

スケートの手入れをして

大陸を吹き渡り、海を越えて
 ばいえんが空をよこしてゐました
 寒さを防ぐために
 いちばん早く花をつけるのは、れんげうです
 鳥かごを持ち出して来て、鳥を鳴かせ始めます
 廣い空を見澄んだ空気を吸つて
 早く目をさします
 こすゑを延してせいびをし、小さな芽をつけ始めます
 遠くから、やなぎの並木を見ると
 夕やけの空を、日が落ちて行く
 野山に卵を生まうとして、さかんに空を渡つて行きます
 玄界などを越え
 北をめざして
 かささはは巢を作らうとして
 新しい巢を作つて、ひな鳥を育てるのです

廣い島を耕し始めます

かうりやんなどの種をまくころは

注意すべき發音文字ことば等

アクセント

す(愚)を——スオ　　す(酢)を——スオ

訛音方言

できなく——「デケナク」といはいやうに注意する。

さやうなら——「サイナラ」といはいやうに注意する。

寒さ——「サブサ」といはいやうに注意する。

蒙古風といふ——「と」を抜かさないやうに注意する。

鳴かせて——「ナカシテ」といはいやうに注意する。

さへづり——「サヤズリ」と訛る地方では矯正する。

ひばり——「ヒバル」と訛らないやうに注意する。

發音

スケート場——スケートジョー　　冬中——フュジュー

つるし出され——ツルシグサレ　　持ち出され——モチグサレ

眞黄色——マフキーロ
れんげう——レンギョー
行く——イク
雁の群——ガンノムレ
ひな鳥——ヒナドリ
ことばの中、または下に來るガ行鼻濁音に注意する。

文字

新字 その邊(邊) 農(ノ)夫
讀替 旱(ソ)春(シ)ン 石炭

語句語法

「早春」スケート場「ふり返し」蒙古風「ベチカ」オンドル「はいえん」地のはて「二重窓」れんげう「その邊」滿洲「ひばり」しやがんだり「かささぎ」農夫等は指導を要する語句である。

「滿洲」シベリヤ「玄界など」等の地名は地圖によつて指導する。

次の如き列舉的な表し方について指導し、文意を明らかにさせる。

窓のそばに鳥かこがつるし出され鉢植の草花が持ち出され子どもたちの顔が並びます。

明かるい日光が小鳥の羽に草花の葉に子どものはほに降り注ぎます。

次の如きいひ表し方について指導し、文意を理會させる。

長い間閉ぢ込められてゐた人たちにとつては春はうれしいだけではありません、ありがたいのです。

花の色で、その邊がばつと明かるくなるほです。

その大きなこと何といつたらいいでせうかふたかかへもありさうな大きな夕日です。

大きな夕日が赤々とはいつて行きます。

備考

連絡

ヨミカタニ「西ハユフヤケ」よみかた四「滿洲の冬、初等科國語四大連から等と連絡して取扱ふ。

(以上 三月)

新出讀替文字一覽表

〔左傍ニ一ヲ附シタモノハ讀替文字〕

課		頁		行		新出讀替文字	
一	四	四	四	四	四	千里	
	五	五	五	五	五	月影	
二	七	二	二	二	二	閑談	
	三	三	三	三	三	惜しんで	
八	四	四	四	四	四	文字記した	金屬(属)
	五	五	五	五	五	埼玉縣試み	
九	六	六	六	六	六	災難	
	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	氣候不順	
二		頁		行		新出讀替文字	
二	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	續(続)き	
	五	五	五	五	五	與(与)へ	
三	四	四	四	四	四	軒下	
	四	四	四	四	四	旅行	
一四	四	四	四	四	四	野生	
	九	九	九	九	九	斜面	
一五	二	二	二	二	二	肥料	
	五	五	五	五	五	十箇月	
一六	七	七	七	七	七	株	

課		頁		行		新出讀替文字	
三	一八	一八	一八	一八	一八	熱	
	一九	一九	一九	一九	一九	日露戦争將軍	
四	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	東郷閣	
	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	四形植込み	
二二	六	六	六	六	六	旅路機	
	七	七	七	七	七	支那料理	
二四	九	九	九	九	九	澄心	
	二	二	二	二	二	大豆	
二五	〇	〇	〇	〇	〇	遠足	
	四	四	四	四	四	廣瀬中佐	
二六	五	五	五	五	五	旅順港口	
	一	一	一	一	一	觀戦艦式	
五	五	五	五	五	五	雌姿	
五		頁		行		新出讀替文字	
五	三六	三六	三六	三六	三六	望み	
	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	上品	
八	三	三	三	三	三	舞奉納	
	九	九	九	九	九	皆々	
三三	八	八	八	八	八	問づ	
	八	八	八	八	八	岩石	
三三	五	五	五	五	五	怠り	
	九	九	九	九	九	防ぐ	
三三	八	八	八	八	八	源氏	
	一	一	一	一	一	灰ひ	
六	二九	二九	二九	二九	二九	十萬騎	
	五	五	五	五	五	先導	
六	四	四	四	四	四	御召艦	
	三	三	三	三	三		

一八	九〇	四	物産
九二	六	發達	
三	二	商店	
七	三	劇場	
九	七	復興	
九三	九	有名	
九四	六	教育塔	
一九	二	四天王寺	
九六	六	美術館	
九六	一〇	岸壁 一萬トン級	
九六	一	免じ	
九六	六	厚い 鋼鐵	
一九	九七	釜 白熱	

一九	九七	七	國赤
九八	九八	四	足り
九八	九八	一〇	冷し
一〇〇	一〇〇	一	火藥
一〇〇	一〇〇	一〇	卒業 職工
一〇一	一〇一	一	砲身
一〇二	一〇二	五	通路
一〇二	一〇二	三	運轉
一〇三	一〇三	五	略
一〇四	一〇四	二	必要
一〇五	一〇五	三	天井
一〇六	一〇六	六	驗し

二〇〇六	七	派	
一〇八	一	輕く	
二二一一	七	應(応)用	
二二一一	四	寒天	
二二一一	九	反動	
一一二	一	直徑(径)	
一二四〇	一〇	徑(徑)快	
一二五	八	怪たい	
二二一九	一〇	違ふ	
二二四	二	綴り方	
二二九	三	題	
二二九	七	群	
二二九	八	全神(經)注	

二四	二二	何型	
二四	二二	電話	
二四	二二	厚唇	
二四	二二	石炭	
二四	二二	その邊(辺)	
二四	二二	農夫	

LiH_2O

(特に筆類の誤り易いもの、又は二様以上あるものについて、藝能科習字と連絡してできるだけ統一して掲げた。)

制閉務屈定拔備帥在製澄理將與難試縣屬惜

ハ一山日
尸、
目、
言一エシ、
一ロニ人、
一カ、
一レ、
一ニ曰一ニ
シ、
合、
一ノ、
イ、
オ、
六、
戸、
マ、
一、
一

佐觀騎源舞情翼垂確距貫灣劇興有級免釜卒

[illegible]

二五二

職路轉要驗脈應

一、二、三、立、日、ノ、
 ロ、一、一、ク、ハ、ロ
 巨、一、百、一、ム、一、一、
 一、リ、一、ム、ノ、一
 一、三、一、一、ハ、一、四、ハ
 月、一、イ、ク
 一、ノ、イ、一、一、三、心

違綴題型邊農

一、二、ロ、ニ、一、一、
 玄、小、双、双
 旦、一、一、人、頁
 ニ、リ、リ、一、上
 白、三、ハ、ハ、一、ノ、一、
 口、リ、ニ、一、ノ、ニ、レ、人

綴り方指導要項

指導の發展段階

- 第一期 兒童の生活を言語によつて發表することになれさせ、次第に素朴簡易な文章表現に進め、綴り方の基礎的態度を養ふ。
- 第二期 兒童の見聞する事象、日常の行動などにつき、見方、考へ方を指導して生活を豊富にし、表現の意欲を旺盛ならしめる。
- 第三期 文の目的と用途とを明らかにして表現を的確多様ならしめ、次第に國民生活の實際に應ずる表現の力を養ふ。
- 第四期 第三期に準じてそれを發展せしめ、國民的自覺を喚起して國語の豊かな表現になれしめる。なほ實務的文章にも習熟せしめる。

初等科第四學年

一 指導要項

初等科第四學年の綴り方は、前學年から次第に芽生えてゐた科學的・道德的・藝術的な見方・考へ方が、その分化の度を増して來た。随つてその表現も、單に生活事實をそのまま無難作に再現するばかりでなく、書かうとする主題を自覺して、それに適合したものを、生活事實の中から選擇して書くといふ態度が生じて來る。

故に本學年の綴り方指導は、他科目・他教科の指導、中でも郷土の觀察と相俟つて、自己中心の生活環境から一步ふみ出して、廣く自然や世の中のできごとなどを注意して觀察するやうに導く。一方、家事の手傳ひ、飼育栽培、工作、遊戲などの實際經驗を盛んにさせることによつて、兒童の生活を正しく豊かに培養することにつとめる。その表現については、醇正な

國語によつて、徐々にまとまりのある文を書くやうに導くことが肝要である。

綴り方と話し方とは、不即不離の關聯をもつてゐるので、綴り方指導のあらゆる機會に話し方の修鍊とすべきである。そのため毎週の國語の授業時間のうち、約三時間を割いて、綴り方・話し方を併せて指導する心構が大切である。

上述の要旨に基づき、左に本學年の指導要項、毎學期の指導要項例並びに參考文題を掲げて、指導の指針とすることにした。

○兒童の見聞する事物現象・日常の行動などを次第に文の目的や用途によつて、的確に書くことができるやうに、見方・考へ方を指導する。

(イ) 見聞する事象・日常の行動などを、的確に書くことができるやうに、事物現象を確實に觀察する態度を養ふことにつとめる。

(ロ) 事柄がくはしく書いてゐるだけでなく、心持がもりこまれてゐるので、文には値うちがあることをさとらせ、事物現象をよく考へてみる

やうな態度を養ふことにつとめる。

(ハ) 他科目他教科諸行事と緊密な關聯を考へ、取材の範圍を廣くするとともに、事物現象の見方考へ方を健全に導くことにつとめる。眞實を書くこと、自分の心持を正直に表すことは、文を書く上に大切ではあるが、それがために不健全な見方考へ方の萌芽を助長するが如きことを戒め、常に明朗にして、積極的建設的な兒童性を伸ばすことにつとめる。

○綴り方を書くことの自信と興味を養ひ表現の意欲を旺盛ならしめる。

(イ) 珍しいこと、變つたことだけでなく、日常の極めてありふれた事柄でも、見方考へ方書き表し方がすぐれてゐれば、よい文になることをさとらせ、常に題材を豊富に持つやうに導く。

(ロ) 學級兒童の綴り方や適當な文例について讀ませたり、話合などをさせて、どんなのがよい文であるかをおのづからさとらせ、表現の意欲を旺盛ならしめることにつとめる。

(ハ) 機會ある毎に、實際に手紙や日記や報告などを書くことを獎勵して、

自分の書いたものが何かの役にたつといふ喜びを味ははせる。

○正しい國語による書き表し方に馴れさせるやうに留意する。

(イ) ことば、ことばづかひは、醇正な國語によるやうにつとめさせる。

(ロ) 濁音鼻音拗音促音その他必要なカナヅカヒを正しく書くやうに常に努力させる。

(ハ) 句讀點、鈎改行などは、讀み方の教材に準じて書くやうにさせる。

○自分の文は自分で十分仕上げるといふ態度を養ふ。

(イ) 自分の文は必ず讀み返して、誤字や脱字を正し、句讀點に注意する習慣をつける。

(ロ) 時には自分で直した文を、更に淨書させることによつて、推敲の興味と方法を體得させるやうにする。

(ハ) 自分の文を、他人に讀んで聞かせることは、お話をして聞かせるのだといふ心持をもつて、よく人にわかるやうに讀ませ、これによつて讀

むこととともに、話すことの修練をさせる。

二 指導要項例

第一學期

○ゆたかな敘述

- (イ) 日常の遊び、仕事、いろいろな行事などについて、自分のしたこと、見たこと、聞いたことを、その順序にしたがつて書かせるとともに、心に強く感じたこと、考へたことなどを、特にくはしく書くやうに導く。
- (ロ) そのために、どの場面をくはしく書くべきかを考へるやうに導く。
- (ハ) 場面をよく想ひ起して、行動や、對話や背景などをとり合はせて書くことの修練をさせる。

- (ニ) 時には、對話のみで書かせたり、韻文で書かせたりすることもよい。

○感想の記述

- (イ) 読み方、修身諸行事と關聯して、家庭や學校や社會のできごとなどをよく觀察して、くはしく書かせるとともに、意見や感想などを書くやうに指導する。

- (ロ) 意見や感想は、常に素直で、明朗な心持で書くやうに導く。

○正確な記述

- (イ) 理數科、藝能科等と關聯して、春から夏にかけての動植物の生長氣象の變化等、自然物や自然現象などについてよく觀察させ、それを細かに、正確に記述させる。時には、それを日記の形で書かせるのもよい。
- (ロ) 郷土の觀察に於いて見聞したところを整理して書かせる。

- (ハ) 必要に応じては、圖を入れて、具體的に説明する手法を修練させる。

○手紙

手紙では、相手により、目的や用途によつて書く事柄や書き表し方に差違のあることを知らせて、それを修練させる。

○用語用字符號

(イ) 読み方教材と關聯して、漢字まじりのひらがなで、正確に書くことに馴れさせる。

(ロ) ことばやいひまはしをつとめて醇正な國語によるやうに導く。

(ハ) 敬體口語と常體口語とを混同しないやうに留意する。

(ニ) 句讀點鈎改行などの表記法は、読み方教材に準じて正しく書く習慣を養ふことにつとめる。

○ 自分の文は自分で十分に仕上げる態度を養ふ。

(イ) 自分の書いた文は、必ず読み返して、誤字や脱字を正し、句讀點や鈎に注意する習慣をつける。

(ロ) 読む人によくわからせることを考へて、書き足りないところを補ふやうにさせる。

(ハ) 時には自分で直した文を更に淨書させることによつて、推敲の興味と方法に氣づかせるやうにする。

○ 話し方の修練に留意する。

(イ) 綴り方の朗讀發表は、話し方修練の機會であるから、これを獎勵し、聞く人によくわかるやうに讀ませることに留意する。

(ロ) 他人の朗讀する綴り方をよく聞いて、何が書いてあるかを捉らへ、またそれについての感想を述べさせるなどして、話し方の修練につとめる。

第二學期

○ 勞作作業を題材とした敘述

(イ) 物を製作したこと、家事の手傳ひをしたことなど、働いたことについて、その仕事の順序や作つた物の説明を正確にさせる。

(ロ) 必要に応じては、圖を入れて具體的に説明する手法を修練させる。

(ハ) 事實の記載にとどまらず、感じたこと、考へたことを述べるやうに獎勵する。

○ 感想の記述

(イ) 第一學期に準じ、次第に、日常の行動、見聞する事物現象等に對する心持を中心として書かせるやうに指導する。

(ロ) 珍しいことに限らず、手近なことでも、新しい角度から觀察し、考察し、想像をめぐらして書けばよい文になることをさとらせ、その表現の修練をさせる。

○正確な記述以下の各項目については第一學期に準じて指導する。

第三學期

○希望やあこがれの敘述

(イ) 春を迎へる、喜び、新年の覺悟、五年生になる喜びなど、將來のことについて想像したこと、考へたことを書かせる。

(ロ) 想像を豊かにするとともに、想をよく練つて、筋道の通つた表現をするやうに導く。

(ハ) 材料に應じて、韻文や對話や手紙などに表現させる。

○場面の描寫

(イ) 特に心に強く感じた場面を捉らへて、そのやうすと心持とを、ありありと描き出すやうに仕向ける。

(ロ) 場面をよく想ひ起して、見たこと、聞いたこと、考へたこと、感じたことなどを、いきいきと書く手法を指導する。

○正確な記述以下の各項目については第一學期に準じて指導する。

三 参考文題

(次に掲げた文題は指導上の参考に供するものである。これを手がかりとして題材を適當に選ぶべきである。)

第一學期

四月

四月はじめの學校

新しい學年を迎へた感想、喜びかはられた先生など、児童生活上の變化を、學校に即して記述させる。

春のけしき

うちの庭や、田園や、海べや、學校園や、通學途上の春景色などを書かせる。詩の形で表現させるのもよい。

私のうち

家族のこと、家業のことなどを説明的に書かせる。家畜などを書かせてもよい。

郷土出の兵隊さん

大東亞戰爭に参加してゐる郷土出身の兵隊さんのこと、その家族のことなど、郷土出身の偉人について書かせてもよい。

五月

自分のからだ

身體検査に因んで、自分のからだについて説明と感想を述べさせる。小さい時からの發育狀況などを考へ合はせて書かせるのもよい。

種まき

理數科理科と關聯して學校やうちで種まきをしたことをくはしく書かせる。

このごろ

五月の學校園・田園・通學途上の景色等について、主として自然の有様を書かせる。詩の形で書かせるのもよい。

ゑんそく

潮干狩や遠足などのやうすを地圖や説明圖を入れてくはしく書かせる。

六月

このごろの仕事

家業の手傳ひについて、どんなことをどんなにしてゐるか。またその時に感じたことを書かせる。自分のしてゐる仕事について書かせてもよい。

うちのとけい

時の記念日に因んで、うちの時計のこと、時間を大切にすること、時刻をよく守ることなどについて、なるべく自分の體驗をもととして書かせる。

忠義な人

本で讀んだり、話で聞いたりした忠義な人のことについて、どんな時にどんなことをしたか、それに對してどう思ったかなどを書かせる。最近に戦死した人についてでもよい。

このごろの天気

梅雨期の天気や温度や自然などについて、自分の調べたこと、感じたことを書かせる。

七月

夏のやさしい

じやがいも、トマト、なす、きゅうりなどについて、各自の経験を書かせる。栽培や採取のことを入れて書かせるのもよい。

兵營にゐる兄へ

読み方と關聯して兵營にゐるに、いさん、または知人にあてて書かせる。戦地病院の兵隊さんにあてたものでもよい。

水泳ぎ

水泳の楽しいやうすを書かせる。できるだけ背景を取り入れて、川遊び、魚つりなどを書かせてもよい。

第二學期

九月

私たちの調べたこと

夏やすみ中に調べたことについて、その調べ方の順序や、その時感じたことなどを書かせる。

飼つてゐる生きもの

うちで飼つてゐる馬や牛や、鶏や、犬や、猫や、小鳥などのやうすをよく觀察して、くはしく書かせる。學校で飼つてゐるものを書かせてもよい。

私の作ったもの

紙鐵砲、水鐵砲、模型飛行機、お人形、手さげなどの製作について、順序だてて正確に書かせる。

氏神様のお祭

氏神様のお祭のやうすをくはしく書かせる。郷土の觀察と關聯して氏神様について調べたことなども入れて、戦地の兵隊さんなどに知らせる手紙としてもよい。

十月

ニュースを聞いて

ラジオのニュースを聞いたり、新聞の記事を読んだり、ニュース映畫を見たりして、感じたこと、考へたこと、特に國民の覺悟を固めたことなどを書かせる。

日記

稻刈の手傳ひをしたこと、働いたこと、留守番をしたことなどを中心にして書かせる。

秋の一日

遠足や運動會など、秋の一日を楽しく暮した日のことをくはしく書かせる。

人のことば

人々のことばのくせや、よいことばとわるいことばなどについて、自分の聞いたこと、失敗したことなどを書かせる。

十一月

秋の運動

このごろしてゐる運動について、どんなことをどんな順序でするか、どんな心持がするかなど、山遊びなどについて書かせてもよい。

げき

修身や國語などで習ったこと、その他聞いたこと、讀んだことについて劇風に作らせる。

私たちの村(町)

郷土の觀察と關聯して、自分の村や町のことを説明的に書かせる。

秋の終りごろ

晩秋の自然の景色を書かせる。詩の形で表現させるのもよい。

十二月

自分の長所と短所(自分の性質の長所と短所をなるべく具體的に書かせる。

年の暮

年末の家の行事、村や町のやうす、人の動きなどについて、觀察とそれに對する感想をくはしく書かせる。

今年あつたおもな
こと
自分の一年間を回顧し、國家として、學校として、家庭として、また自分自身に起つた主なことについての感想を書かせる。兵隊さんにあてた手紙にするのもよい。

第三學期

一月

ぐわんじつの朝

元日の朝の行事と、その心持をくはしく書かせる。

入營を送る

入營する兄、又は郷土の人を送つた時のやうすと、その時の感想を書かせる。

冬の遊び

スキーや雪合戦や雪だるま、などはとび、その他冬の寒さとたたかつた勇ましい遊びのやうすをくはしく書かせる。

二月

私の工夫したものの

自分が工夫して作つたものについて、どんな動機で、どんな順序で、どんなものを作つたかを書かせる。

大陸の友だちへ

滿洲支那その他大東亞各地の子どもに、日本はどんな國柄か、日本にはどんな名所があるか、今、日本人はどんな決心でゐるかを知らせる手紙。

楽しい夕飯

夕飯の時、または夕飯後の一家團樂のやうすを書かせる。
對話だけで書かせるのもよい。

見學したこと

〔動物園植物園博物館その他を見學したことを順序だてて正確に書かせる。〕

三月

父母の恩

〔父母の恩について深く感じてゐることを具體的に書かせる。〕

陸軍記念日

〔陸軍記念日の學校の行事や聞いた話や調べたことなどを順序だてて書かせる。〕

春を迎へる喜び

〔このごろの氣候動植物の有様春らしくなつて來た自然五年生になる喜びなどを綴りませて書かせる。〕

話し方指導要項

指導の發展段階

第一期

兒童と話をするあらゆる機會に留意して、はつきりとおちついてものをいふやうに導き、「ヨミカタ」で得たことばを手がかりとして發音や語法を訓練し、次第に生活の中に活用するやうにつとめる。また人の話を注意して聞くやうに仕向ける。

第二期

兒童の見たこと、聞いたことなどについて、順序だてていへるやうにし、ことばづかひや、いひまはしなどを正しくするやうに導き、人の話をよく聞く態度を養ふ。

第三期

自分のいはうとすることを要領よく話し、相手と場合に應じてそれぞれふさはしい話ぶりをし、ふさはしいことばが使へるやうに導き、人の話の要點をつかみ得る力を養ふ。

第四期

同じ話でも、相手にわかりやすく、しかも興味深く語り、上品なことばづかひをするやうに導き、また男女によつて、ことばづかひに違ふ點もあることをわきまへて話すやうにさせる。
なほ、話をしたり聞いたるときには、相手の心持をくむことが大切であることを知らせ、その心構を養ふ。

初等科第四學年

指導要項

初等科第四學年の話し方指導は、他科目他教科の指導と同様指導の發展段階に於ける第二期の後をうけて、いよいよ第三期の指導段階にはいつたのである。

第二期即ち第三學年の話し方指導では、順序だてて話をするやうに導くこと、ことばづかひや、いひまはしなどを正すことなど、話の仕方について積極的に指導することを企圖してはゐるものの、やはり過渡期であるために読み方指導に即して日常の話しことばを新しく習得させ、その使ひ方に馴れさせることを本體としたのである。

第四學年に於いても、読み方指導に際し、前學年と同様な心構をもつて臨むことは勿論であるが、指導の發展段階にも示したやうに、自分のいはうとすることを要領よく話し、相手と場合に應じてそれぞれふさはしい話ぶりをし、ふさはしいことばが使へるやうに導くのであるから、それに適した機會を作つて、その指導を行ふことを考へる必要がある。

そのため、國語の毎週の授業時數の中、約三時間を綴り方と話し方にあ

て、その中の一時間を時に話し方の修練にあてるやうにするがよい。
以上の要旨に基づき、左記要項によつて本學年の話し方を指導する。

(一) 話し方は、綴り方と緊密な關聯のもとに、話しことばを指導し、かつこれを醇正ならしめるやうに修練することにとめる。

(1) 綴らうとする題材を中心にして話合をさせ、言語發表の修練をさせる。時には、言語發表だけの時間を置いて、發音やことばづかひや、敬語のつかひ方について指導する。

(2) 綴り方に於いては、文の目的や用途によつて的確に書くやうに指導するのであるが、話し方に於いても、それと同じやうな心掛が大切なことをさとらせ、要領よく話すことができるやうに導くことにとめる。

(3) 綴り方の朗讀は、まとまつたお話をする修練の機會と考へさせ、はつきりとお話をする心持で讀むやうに導き、言語發表の修練に資する。なほ常體で書き表したのもだんだん多くなるであらうから、その

常體で書いた文を話す草稿として、敬體の話しことばで發表させることも、話し方修練の一方法である。

(4) 綴り方の朗讀を聞く場合には、どんな事柄がどう表してあるかに注意させて聞くやうに仕向ける。

(5) 兒童の綴り方を中心として、いろいろな話合をさせ、書き表されてゐる事柄や、表し方や、ことばづかひについて適正に指導する。

(二) 話し方は、讀み方と緊密な關聯のもとに指導する。そのために、特に左のことに留意して取扱ふやうにする。

(1) 讀み方指導に於いて行はれる話合は、讀み方教材たる文章をよく讀み、挿畫などをよく見させ、表現に即して具體的に發表させることにとめる。

文章や挿畫などに關聯して、兒童の體驗を發表させる場合にも、つとめて、順序だてて、要領よく發表するやうに仕向ける。

(2) 讀み方の教材に親しませ、正しく讀むことに馴れさせて、正しいこと

ばづかひや、いひまはしに習熟させるとともに、それを話すことばとして發表させるやうにとめる。

(3) 問答に於いては、問の出し方に注意し、教材のことばや、いひまはしを取り入れて答へさせるやうにする。なほ読み方教材の進むにつれて、文章語としての語彙や語法も出て来るから、それらは適切な話したことばによつて身につけさせるやうにとめる。

(4) 教材中の對話や、人物の言行について敘した文章には、相手と場合によつて、おのづからことばづかひに相違のあることをさとらせ、その使ひ方に修練させる。

(5) 問答や話合に現れる兒童の誤つた發音方言訛音等は、機會ある毎に矯正して、醇正な言語に導くやうにとめる。

(三) 他科目他教科の指導と關聯して、常に言語修練をなす。そのため特に左の事項に留意する。

(1) 修身禮法と關聯して、相手と場合に應じたことばづかひ姿勢態度等

の態をなす。

(2) 音楽と關聯して、發音を正すことにとめる。

(3) 郷土の觀察理科諸行事等と關聯して、事物現象の觀察や作業等を整理して發表させる場合にも、つとめて正確なことばを使用させ、要領を明確に話すやうに導く。

(4) お話會學藝會等に於いて、他科目他教科で學習したこと、自分で調べたこと、諸行事で經驗したこと、讀物等を話題として、大勢の前で、筋道をたてて話すことの修練をさせる。

(四) 話し方の指導は、兒童の生活のあらゆる機會に於いて行ひ、常にその場その場に於ける言語修練に留意する。

(1) 教室に於ける問答話合はもとより、教室外に於けることばづかひについても常に留意して、一般的また個人的に指導することは、全學年を通じて大切なことである。とりわけ教室外のことばづかひは、粗野になりがちであるから、常に注意することが大切である。

K131.8-5-8a

話し方指導要項

二七八

- (2) 教師はつとめて正しいことばを使用して、児童をして、知らず知らずそれにならはせるやうにする。
- (3) レコード、ラジオ等を選択利用して、發音や話しぶりなどに關心を持たせ、正しいことばに馴れさせることにつとめる。
- (4) 家庭と協力して、挨拶その他日常のことばを正しく使ふやうに躾ける。
- (5) 話し上手は聞き上手であることをさとらせ、他の人の發表する話を氣持よく聞く態度を養ひ、その話の要點を的確に捉らへるやう、聞き方の指導に留意する。

昭和十七年八月十日	昭和十七年八月十日	昭和十七年八月十日	昭和十七年八月十日
發行	發行	發行	發行

初等科國語 四 教師用

定價金四拾八錢

著作權所有

發行者兼
文
部
省

東京市小石川區久堅町百八番地 32

日本書籍株式會社

代表者 大橋 光吉

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 日本書籍株式會社工場

發行所
日本書籍株式會社

日五十月八年七十和昭
濟查檢省部文



(3) レコード・ラジオ等を選択利用して、發音や話しぶりなどに關心を持たせ、正しいことばに馴れさせることにつとめる。

(4) 家庭と協力して、挨拶その他日常のことを正しく使ふやうに練習する。

(5) 話し上手は聞き上手であることをさとらせ、他の人の發表する話を氣持よく聞く態度を養ひ、その話の要點を的確に捉らへるやう、聞き方の指導に留意する。

昭和十七年十月十七日	昭和十七年八月十八日	昭和十七年八月十八日	昭和十七年八月十八日
翻刻發行	翻刻發行	發行	印刷

定價金四拾八錢

著者發行

文
部
省

東京市小石川區久堅町百八番地 32

日本書籍株式會社

代表者 大橋 光吉

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 日本書籍株式會社工場

日本書籍株式會社

日五十月八年七十和昭
濟查檢省部文



